

市民文芸

平成 30 年度

函館市民文芸

第 5 8 集



函館市中央図書館

指定管理者 TRC 函館グループ

函館市民文芸 第58集

目次

◇随筆(対馬 俊明 選)

【入選】

父の日章旗	池田義博	1
わがままな旅	小林雅子	3
「ふるさと」になる	佐藤健	5
定住の街	武田勉	7
蔵の中から	谷口敦子	9

【佳作】

夏が来ると	畠田実里	11
死体が抱きつく	佐藤憲明	13
むかし	菅原陽子	15
父のガサエビ	野口裕子	17
傘の雫が掛かる島	水関清	19
冬の扉	元木いづみ	21
【選評】		23

◇小説(安東 璋一 選)

【入選】

あこがれ	山野みちこ	28
庭に咲く薔薇	菊地政義	37

【佳作】

笑顔	畠田実里	54
お客様は神様です	日高光	70
円環するカレンダー	高橋剛治	80

◇文芸評論(安東 璋一 選)

【入選】

ふたつの「二握の砂」と 啄木の「生活の発見」	水関清	96
【選評】		113

◇ノンフィクション(竹中 征機 選)

【入選】

『御伽草子・うらしま太郎』と乙姫の恋

木村裕俊 116

演じる事の覚悟……………佐藤健 127

鉄道の旅、その三つの愉しみ
……………水関清 135

【佳作】

お城めぐりツアー……………片岡美智子 141

【選評】

…………… 147

◇詩(鷺谷 峰雄 選)

【入選】

白いキャンバス……………玉掛公恵 149

【佳作】

野原の中に……………毛間内悦子 153

幸せってなに……………高橋和子 156

【選評】

…………… 158

◇短歌(山県 庸美 選)

【入選】石岡繁雄・菊地利春・山田正明…………… 160

【佳作】柿崎芳明・柴田泰子・水関清・竹田光彦
……………

中崎裕美…………… 160

【選評】

…………… 161

【選者詠】

…………… 162

◇俳句(熊澤 三太郎 選)

【入選】池田陽子・菊地政義・清水法雄…………… 163

【佳作】佐々木了一・関口孝三・伊藤静子・富樫進
……………

齋藤ふじお…………… 163

【選評】…………… 164

【選者吟】…………… 166

◇川柳(坂本 千代光 選)

【入選】岩本真穂・白井靖孝・山根裕一…………… 167

【佳作】本間総子・伊藤静子・辰宮清春・山根敬子
……………

大山利子

【選評】

【選者吟】

◇追悼 池 さとし 先生

◇審査員紹介・あとがき

父の日章旗

池田 義博

手元に古びた日章旗がある。かつての白地は染みつき黄ばみ、よれよれの布に墨色は薄く褪せてはいるけれど、「一死報

国」「忠勇義烈」「聖戦の基礎となる東洋平和の確立」など書かれた文言は激しく勇ましい。父が出征した際、郷里の木古内村の学校長、村会議員や親戚代表、友人らが寄せ書きしたものだ。

昭和十九年春、召集令状を受けた父は「万歳、万歳」の歓呼の中、函館駅から集合地である旭川へと向かった。以来日章旗は父と共に各地を転々とし、七十年を経て現在、私が保管している。

父の出征時、私が既に母のお腹にいたことは当の母さえもまだ気づいていなかった。後日、母からの手紙で私の存在を知った父は自分の名の一字を入れて「名前は（義博）にしなさい」と返事を

寄せた。父は、はなから男児出産と決めた込んでいたという。

その後、幾度か手紙のやり取りがあり、父の無事を確認し安堵していたのだが、「北千島方面」と記された手紙を最後にぱったりと連絡が途絶えてしまった。戦死の通知も来ないから、恐らく極秘移動で転戦をしているのだろうと母や周囲の者は思っていた。それでも、もしやという不安が常につきまとう落ち着かない日々を過ごしていたそうだ。

昭和二十年八月十五日、第二次世界大戦は漸く終結した。それを機に外地から復員兵がぞくぞくと帰還した。しかし、父がどこににいるのかは杳として分からなかった。

生きていくために、母はまた三歳の兄を釜谷の父の親類に預け、私だけを連れ

て岩内の実家で父を待つ生活を余儀なくされた。

三年、四年と日が過ぎて行き、誰もが父の生存を諦めかけた五年目の冬、突然、木古内村役場から一報が入った。（シベリアからの復員兵を乗せた船が三月に舞鶴港に着く。その名簿の中に父の名がある）と。

大勢の復員兵の中に青函連絡船から降りてくる父を見つけた時、母は一瞬息を呑んだ。本当にこの人がわが夫なのだろうか？類はこけガレガレに痩せて、目だけがギョロギョロと異様に大きく陰しかったそうだ。持ち物は身の回りの品が入った小さな布袋ひとつだけで、その中に日章旗がしまわれていた。後生大事に持ち歩いていたのだ。

父の話によると旭川から千島列島沿

いに北上し、その後樺太に渡り、さらに北滿へと移動したところで終戦となった。武装解除後ソ連軍の捕虜となり、そのままシベリアに送られたのだった。

極寒の地での五年間の過酷な労働は想像を絶する厳しさであつたろう。が、父はそれについて殆ど語ろうとしなかつた。それでも気が向くと、母にはぼつりぼつりと話したようだ。たくさんの戦友が疲労と病氣、飢えと寒さで次々と死んでいき、残つた仲間と涙ながらに凍土を掘り墓標を立てたこと、配給されたタバコを貯めて、ソ連兵にパンと交換してもらい飢えを凌いだこと、彼らは父の日章旗を戦利品にしたいのか頻りに欲しがつたが、頑として譲らなかつたことなど。

この一統の旗に父はどんな思いを込めていたのだろう。祖国と自分を繋ぐ一縷の望み、あるいは日本男児の誇りでもあつたか。

お酒が入ると多少愉快になる父だったが、私が高校生になつたある日の晩酌

時、突然歌い出したことがあつた。哀調を帯びたロシア民謡で、それも覚えないうロシア語である。私は驚いた。どうやら抑留生活中に覚えたものらしかつた。いや、覚えるよう強制されたものだったのかもしれない。そして、口をついて出た言葉は

「露助野郎は、とんでもねえやづだ。俺だちがいつ日本に帰れるのがつて聞けば、(おお、明日ね)と言つてニヤツと笑うんだ。明日ね、明日ねつて騙くらかして、とうとう何年間もきつつかいやがつて」

生まれ故郷の訛りの中に私は父の遣る方ない憤りを感じていた。

「もはや戦後ではない」という語が流行したのはもう六十数年も前のことになろうか。経済面はともかく、父の世代で起こした問題が、私たちの世代では解決をみず次なる世代まで引きずられていこうとしている。北方領土然り、従軍慰安婦問題をめぐる対立等々。まさしく戦後はまだまだ続いているのだ。

今冬の平昌オリンピックでの日本選手活躍はめざましかつた。選手達は日章旗を高く掲げ、笑顔で誇らしげに行進した。日本人観客は「頑張れ」「目指せ金メダル」など激励を込めた日章旗を手に応援した。同じ日章旗でも父の日章旗に書かれた文言とは全く質が異なる。嬉しいことだ。平和そのものだ。

父が逝つてこの夏で三十年になる。私の誕生と共に同じ年月を歩んできた父の日章旗。今、それを見つめる私の胸に、父の歌つたロシア民謡が複雑な思いとなつて突き刺さるのである。

わがままな旅

小林 雅子

「この度は、ご予約を頂き誠に有難う御座います」旅館から返信の電子メールが届いた。明るい画面は、私の心をも照らすようだ。

平成二十九年、父の三回忌を終え、実家の母と旅番組を見ていた。母が父の思い出を話す。連れて行きたい場所がまたあったのに。

紅葉の京都が映る。母が自分の母親を連れて行った地。「もう歩けない」と言う祖母のために短い距離でもタクシーを使った。どんなわがままも聞き入れた紅葉を前に子供のように「うわあ」と感嘆の声を上げた祖母。その姿を見る事が出来て、本当に良かったと何度も言う。その後、祖母は病気をし、旅行には行けなくなつた。

「最後」は、あとからわかる。振り返

つて、あれが最後だったと知る。満足していれば、「最後」を受け止められる。そうではない時は、後悔の波に飲まれてしまいそうな気がする。

翌年の平成三十年に母が米寿を迎えることに気づいたのは、函館に帰る飛行機の中だった。母の「未来予想日記」を思い出した。「古希」のページを見せて「過ぎた。何も無し」と書き加えたよ」と笑った。還暦に姉と記念の品を送った。しかし、その後のお祝いの節目は通り過ぎしてしまつた。母は何度「何も無し」と書いたのだろう。

函館の香雪園の息を飲む美しい紅葉の中、米寿のお祝いの旅を思いついた。姉と一緒に母を紅葉の京都へ誘おう。今度私達が連れて行く番だと母に電話をした。

姉からは「母は、私達とは行きたくないと思う」私の提案に水を差す。母は本当に行きたいと言っているのかと文字だけの返信。母は喜んでいるはずなのに。雪が残る北海道から早咲きの桜の東京へ帰省した。母に改めて秋の旅行の話を持ち出すと、行きたくないと言いつつ、

当たり前のことを家族にしてきた。何も感謝されることはない。親から健康な体ももらい、今まで生きてきた。転ばない体力をつけ、主治医のもと日々真面目に過ごしている。年を取っていただくだけ。祝われることはない。過去の京都の中にいるのは、元気な自分だ。老いた自分が行けば、美しい思い出が汚れるようで辛い。母が背を向ける。

ひとり浮かれていた私は、何に気づ

かずにいたのだろうか。

二十年前、姉はシングルマザーになり、小学生の甥と姪を連れて両親と一緒に暮らした。五人の日々は過ぎ、母と姉の二人を残した。女同士の生活は、自分のことは自分でするスタイルで、同じ冷蔵庫で別々に食材を管理する。違うメニューの朝食で顔を合わせたら、それぞれの一日を過ごし、語り合う時間を見つめるのが難しい日常だ。

母は老いていく。八〇二〇で表彰された歯も、入れ歯になった。背中が曲がったと服を捨てた。痛い腰を伸ばして立ち止まり、バス停まで時間だけが長くなった。電話口で淡々と話す、その姿は見られたくないのだ。

歩調を合わせて後ろを歩く姉に、「先に行ってくれ」と声を荒げると言う。時折訪れる苛立ち。一緒に暮らす姉には珍しくない場面なのか。遠い私は知らない。行きたくない母を無理やり連れ出すのがお祝いだろうか。タクシーに乗せられ乗ることが、母が喜ぶことなのだ。

ろうか。

自分自身の声に耳を傾けた。母に感謝されたいわけではない。私が、母と姉のふたりの顔越しの風景を見たいのだ。

行き先を鎌倉に変更した。私達が子供頃連れて行ってもらった場所を懐かしく訪れよう。運んでもらう懐石料理を食べ、三人でゆっくり語ろう。母と一緒に人力車に乗ろう。

思いを込めて想像の旅の絵手紙を母に書いた。拙い私の絵と気持ちを受け取ったと母から電話があった。姉も一緒に行くと伝えると、心なしか母の声が和らいだ気がした。

姉に旅館の情報と私のわがままを送信した。「わかりました。でも、人力車は乗り気ではありません」冷たい文字。第一老人に乗れるものなのかと内容には母を気遣うひとこと。すでにリサーチ済みで、高齢者にも安全だと答えた。母は承知しているのかの問いには、オッケ―を伝える絵文字で返した。

相手の気持ちを考えることは大切な。

でも、時にはわがままを言っても許されるはず。「これが最後」かもしれないのは、年老いた母にだけ当てはまることではない。

旅を終えて、三人で家に着いて、母と姉から「家が一番」と言葉が出たらそれで本望だ。

母の未来予想日記の「何も無し」は、何事もなく過ぎたという良い意味なのかもしれないとふと思った。

「ふなやう」になる

佐藤 健

今年の冬は、韓国の平昌オリンピックで大いに盛り上がった。カーリング競技の女子チームが第三位となり、同種目で日本初のメダルを獲得したのだ。彼女たちの地元のみなさんが総出で応援する姿が何度もテレビで放映された。また、彼女たちが競技中に話す「そだね〜」の言葉にも注目され、出身地である北海道北見市が全国的に知れ渡った。

私の故郷として脳裏に浮かぶのは、高校卒業までの十八年間で過ごした岩手県の山間の風景です。そして、ふと思っただのが子供たちのことです。私の転勤で二人の子供たちは転校の連続でした。長男と長女が横須賀勤務時代に生まれてからは大湊、佐世保、川崎、木更津、大湊、函館へと引越しの連続でした。

子供たちは、転校したくないと言った

ことはなかったものの今思えば子供たちの声に耳を傾けたことはなく、子供たちもどうにもならないことは理解していたのでしょうか。全国のあちらこちらに友達が生きて良い様に考えるのは、いさゝか親の勝手が過ぎるかも知れません。いくら仲良くなっても二年後にはまた転校することを思いながらの友達付き合いは大変なことだつたらうと思います。幸いイジメを受けた話は聞きませんが、転校生に対する感情は決して友好的なものばかりでないことは容易に想像できます。そんな経験から、子供たちは転校生としての処世術を学んで行つたのだと思います。

中学校を転校したばかりの頃、車の助手席に座る娘に、友達はできたかと質問すると、娘は前を向いたままで答えたも

のです。

「転校したばかりの時は、みんな優しいよ」

娘が発したその言葉の中に人間関係の複雑さを感じたものです。ほとんどの友達が幼稚園や小学校からの付き合いの中で、簡単に友達になれるはずもなく、ましてや親友と呼べる友達に巡り会うのは奇跡に近いことです。どれか特定のグループに所属することが一番の近道であるように思いますが、もしそこで選択を誤れば取り返しがつかないことになります。娘が選んだのはどこのグループにも所属せずに広く浅くみんなと接することでした。それが娘が経験から学んだ人付き合いの仕方だったのです。その娘は今、大学を卒業して道北の街で菓子の営業の仕事をしています。

長男の高校進学を機に妻の実家に近い函館に自宅を購入しました。子供たちに、

「お前たちの故郷はどこですか」

と質問したなら何と答えるのでしょうか。

「自分の部屋があるこの家だよ」

と言う答えを期待しながら、一方では深い考えもなしに子供たちにとつても祖父母が住み私生まれ育った町だと勝手に決め込む気持ちもあります。子供たちが小学生までは、よく帰省して野山を歩いたり川で遊んだりしたものです。でもそれは、田舎と故郷を混同しているだけで、子供たちにとつては、田舎のお爺ちゃんやお婆ちゃんの家に行って遊んだ思い出に過ぎないのかも知れません。では、子供たちはどんな風景を故郷として思い浮かべるのでしょうか。もちろん山や川だけが故郷の景色ではありません。都会で生まれ育った人にとつては、ビル街がその景色です。いや、目に見えるものではなく、人の温もりや友達と遊

んだ記憶こそが『ふるさと』になり得るのではないかと思えます。

息子は、高校三年になると不登校になり、卒業できずに留年しましたが、結局登校することはなく、一学期で中退して通信制で高卒の資格を取りました。人前ではお調子者で周囲を笑わせていましたが、心の闇は家庭内で淀み、私が単身赴任中だったことから矛先は母親に向けられたのです。息子には息子の言い分があつたのかも知れません。こういうことは世の中にはいくらでもあることも知っています。でも、自分の息子がそうなることをどうしても受入れられませんでした。

息子本人の希望で東京の声優学校に二年間通わせましたが、卒業しても声優になれるわけではありません。今でもアパート代は親の口座からの引き落としのままです。家を出てから六年が過ぎましたが、その間一度も函館に帰っていません。旅費がないのか覚悟なのかはわかりません。

小さな劇団に所属し、東京新宿にあるバーを舞台に見立てた芝居を一度だけ夫婦で深夜バスを利用して見に行きました。そこには、長い台詞を滑舌の良い台詞回しで生き生きと演じる息子の姿がありました。しかし、その後の公演の連絡はありません。

今までは、自立を促すために敢えて突き放し、甘えを許さず厳しく接して来ました。でも、三六年勤めた前職を三年前に定年退職した今、船に母港があるように、函館のこの家が子供たちにとつて、いつでも帰れる『ふるさと』であつて欲しいと願うのです。そして、その時に孫も一緒ならば、なお嬉しいと思う今日この頃です。

定住の街

武田 勉

高齢者と言われる年代に手が届いた。うかつにも老人と呼ばれるまで気付かないまま来てしまった。おもな要因は年齢など考えている暇がなかったことだが、性格的なことも作用していると思われる。うかつなのだ。生まれ付いてのものらしい。他界した祖父が、しつかり者の妻の祖母から、そこつ者と言われるように記憶している。一本気で純朴な祖父だったが、あまり生活を省みないところがあつた。人よりひとテンポ遅い鈍感さと生活の余裕のなさは二人とも同じで、わたしにジャンプしてしまつたらしい。

高齢者体形になつてきているので、街で見かけるスポーツウエアなどは着られなくなつてきている。Tシャツの上に着たジャージなどを羽織り、スローテン

ポで歩いて健康を維持しようとしている。そのためか、街なかの空気の変化などが肌で感じられるようになり、四季の替わり目をいち早く知るようになった。

怪我や病気などもあつて足踏みした時期もあつたが、後ろなど振り向かなかつた。年を取つて老けて行くなどまるで他人ごとで、見向きもしてこなかつた。考え込んでいる時間などどこにもなく、無理にでも背中を押して走らせなければ、陸揚げされて口をパクパクさせる魚類のようになりそうであつた。

魚と昆布の臭いが混じつた風の吹く街で、その時代その時代なりの彩りがあり、周囲と同色の着物をまといやつと暮らしてきた。社会の底に渦巻く冷たい流れに溺れ、息が止まりそうになつたりしながら、その瞬間でしか知り得ない経験

をいく度にも日々の中に積み重ねていできた。言葉にならない激しい感情が胸の内に層となつてたまり、忘れた頃に肋骨の内側をチクチクと突いたりした。仕事に追われ、深く考えることもなく、あいさつ程度の日常を漂つて、それすら忘れてしまつた。次々と追い抜いて行く友人や知人たちを視野の端でにらみながら、何も出来ず前を向いて走るより他なかつた。毎日の繰り返しの中で、輝きや胸の高鳴りは徐々に薄れて行き、気付くとすでに時は過ぎ去つていた。いずれ老化が始まることは知つてはいても、どうしてもそれを認める気にはならなかつた。

つい最近、精神年齢が実年齢に追い抜かされた。いつも気持ちだけは若いと内心自負していたのだが、鏡に映る老人の

顔は、記憶にある自分の顔ではなくなっていた。晩年の祖父や定年退職したころの父の顔立ちとどこか似ていて、あまり気分は好くはない。人はそれぞれ違つた道を歩んだはずで、それに見合った自分なりの顔つきになるべきだろう。なのにそうならず、不思議と重なり合つてくる。遠い過去の隠された絆なのだろうか。

これから先も実年齢が先行して走り、精神年齢が追い駆ける展開になりそうだ。ゴールに飛び込む実年齢をちよつと遅れて背後から見届けて、一番目に到着すると、銀メダルくらい貰えるだろうか。どうもそれでは面白くない。その時には追いついて、同着一位でフィニッシュすることが望ましい。これで金メダル獲得だ。肉体と精神が一体となり、栄えある栄誉と共にメダルを首にかけてもらえるのだ。人生において賞のたぐいなど一度も頂いたことはないので、最初で最後はの瀬戸際で、金メダルを授与されてもいいではないか。特に実害はなく、誰にも迷惑をかける訳でもなく、手土産とする

にはちよつと良さそうだ。

おそらく、生の終盤近くには差しかかつてきているのか、この左右を海に囲まれた地に、なぜか骨を埋めようと考えるようになってきた。年齢と境目がそう思わすのか、錆び上がったトタン屋根や、雨ざらしてイカ墨色にすすけた外壁の家でも、生きて行く上で不足はなく、その日その日を過こしてこられた。仮の住まいのはずが、いつやら終の住処になつてしまふそうだ。どこかでこの街に住むように定められていたのだろうか。生まれ故郷であることを省けば、ここに住まなければならぬ特別な理由はなく、居心地の良さにほだされて、気付けば祖父母の側で眠つていそうだ。

そのころから、街の背景にそびえる山のフォルムや、海峡の波頭を銀色に染めて吹き抜ける風のざわめきなどから、目をそらすことが出来なくなつてきた。この街のすべてが鮮やかな色彩を放つて目に飛び込んでくるようになった。

見慣れたはずの同じ街並みが、造られ

た当時の輝きを持つた景観となつて目に映り、そこが別天地であつたことを、老化が教えてくれていたのだろうか。

鈍り始めてきている五感をだましまし働かせ、もう少し先の海峡の見渡せる丘の上まで走らせるか。眼下に広がるくびれた地形の街を記憶のフィルムに焼き付けるのだ。青く輝く港も、そこに舫う船も、市内を縦断する市電も、路地裏の朽ちかけた家も、走り抜けてきた自分の姿も、この街のすべてにうすく染めて、生き走り鼓動した証としようか。

了

蔵の中から

谷口 敦子

かなり前のことになるが、夫の実家を解体した折、土蔵の中から古い冊子がいくつか出てきた。『最新調査・函館土地明細台帳』というのは現在の不動産登記簿のことだろうか。最新といっても明治四二年のことだ。開いてみると、索引には函館市の今は無い町名がずらりと並び、帆影町など演歌の歌詞にでも出てきそうな町名や、旅籠町、真砂町、音羽町など雰囲気のあるもの、天神町、地藏町、恵比寿町など神仏ゆかりの名も今は消えてしまっている。

夫の曾祖父であるご先祖様、与四郎さんは、相生町に住んでいた。相生は一つの根本から二つの幹が生えることで相老に通じ夫婦とともに長生きするといっておめでたい意味があるそうだ。しかし、残念なことにご先祖さまの連れ合いは

つぎつぎに早死しやつと二人目の妻が比較的長生きしてご先祖様を看取った。

与四郎さんは本州の生まれだったが、商家の四男だったため間に入った人があつらしく海を隔てたこのまちの同業者の養子になつて商いははじめた。結婚してから生さぬ仲の両親と同居していたが、どんな事情があつたのか夫婦で養家をでて独立し、商売を始めた。そのあとにやはり二代目の養子亀治郎さん夫婦が入つて商いを継続し、同業者として双方とも成功したらしい。件の土地台帳にも両方の名がある。

与四郎さんは、信仰心の厚い人だった。檀家寺の総代となつて寺には多額の寄付を欠かさなかつたが、自分の暮らしはつましく、家族にも決して贅沢はさせなかつた。彼の孫娘である義母は「お宅は

お金持ちなのにお雛様もないの」と友達に言われたという。

ところで与四郎、亀治郎の二人は、もう一冊の冊子にも名を連ねている。明治の末、当時皇太子だった大正天皇の北海道行啓の折に住民総出で皇太子を迎える準備が行われた。『鶴駕奉送迎録』はさしずめ「皇太子殿下送迎準備記録」とでも言う意味だろうか。冊子にはこのまちの名士がごぞつて名を連ねた「奉送迎委員」の一員として、与四郎、亀治郎ともども仲良く名が残っているのだ。「畏れ多くも天皇陛下の名代であらせられる皇太子殿下」の行啓に対し失礼や手抜きがあつてはならないと送迎準備を抜き行つた、その証拠としての書付なのだろう。土蔵には奉送迎のためだろうか燕尾服を着た与四郎さんの、りり

しい立ち姿の写真も残っていた。冊子には皇太子の寝所となった公会堂の見取り図もあり、帰京の際の献上品として「熊の彫刻」「昆布」「蟹缶詰」「熊皮」などが各々数量とともに几帳面に記されている。

もう一冊は布張りの写真集だ。表紙には『愛国婦人会会員肖像録』とあり最初のページには名譽総裁の天皇夫妻の写真が載り、次のページから会員の顔写真と名前が載っている。愛国婦人会は明治三四年に結成された全国組織の婦人団体だが、これは大正天皇の即位を記念したこのまちの会員に限った名簿のようだ。与四郎さんの三人の妻の誰かが関わっていたのだろうが、それを知る人はもうすでに亡く顔写真と姓名だけで彼女たちを特定することは今となっては難しい。

それはそれで残念なことだったが、興味深いこともあった。写真の下に記された名前だ。おそらく当時の流行だったのだろうが、タケ、マツ、スエ、フサ、シ

ゲなどカタカナ文字の名が圧倒的に多い。中にはその下にノがついて、タケノ、キクノというものもある。ツルとかカメというおめでたい名もちらほら見える。もっと興味深いのは、本来の名の下に一樣に「子」がつけられていることだ。これも想像によるのだが、新時代の流行に「子」のつく名前が出現しつつあり、気を利かせた写真集の編集者が、全員に子をつければさぞハイカラで箔がつくとも思ったのではないだろうか。例えばマツよりマツ子のほうがきつと本人にも喜ばれるだろうとそう判断したかもしれない。

しかし中には喜ばない人もいたと思う。ツルさんやスエさんとはともかくタケノさん、カメノさんの場合どうだったろうか。ちよつと聞いてみたい気がする。

夏が来ると

畠田実里

七十年前のことなのに、海水浴の時期になると決まって思い出すことがある。

あれは小学校四年生の時だから。戦後四年ぐらいたった頃のことだ。食料・衣類難で、食べ物というと、ジャガイモが主食だった。今はお金さえあれば食料も衣類も手に入る時世で、とても考えられないことである。

郷里は海辺の小さな集落だった。イカもイワシも毎年豊漁だったが、交通の便が悪く容易にお金にはならない。だからと言って、これを一旦三食、食べ続けるわけにはいかない。商店もないので、食べ物は畑で作るよりない。それで、どこの家でも裏山の斜面を耕して、ジャガイモや大根をつくった。

いつも腹を空かせていた。子供達は空

きつ腹を満たすため海に入った。ウニやツブ、ナマコなどが口に入ったから、天氣が良くて、風ぎであれば、朝から夕方まで海に入っていた。今ではウニやナマコは、高価すぎて口に入らない代物なのに、当時は子供でも海に入れば容易に手に入った。

考えると、自然の栄養のある高価なものを食べたということになる。それでも、米のご飯が食べたかった。家が貧しかったから、白いご飯は、大晦日や正月にししか口に入らない。

それに衣類も不足だった。私は五歳上の叔父のお下がりだった。大きくて上着の袖にもズボンも上げがあった。そのうえ、肘や膝にはつき当てがしてある物ばかりだった。

泳ぎの苦手だった私は、海や波が怖か

った。友達が海で獲ったウニやナマコを食べるのを、いつも横目で見ていた。ある日、友達に誘われて、ようやく海に入る決心をした。ところが、服を脱ぐ時になって、

「海に入るときは、パンツを脱いで入れ。パンツは人絹だから、塩水に濡れると、すぐ破れる」

という母の言葉を思い出した。友達は、躊躇っているのを感じたのか言った。

「みんなもパンツ履いてる。海から上がったら、焚火で乾かせばわからない」
それでようやく安心して、パンツを履いたまま海に入った。

みんなのように潜れないので、浅いところで、手探り足探りで、ウニやツブを取った。

日が陰ってきた頃、川で体を洗って、焚火の周りに集まった。残っていた焚き木をみんな火の中に放り込んだ。竹籠の古いのも焚火の上にかぶせると、火は勢いよく燃えた。一日の終わりにびったりだ。炎が上がると風が出て来た。

てんでに、パンツのゴム紐のところに細い棒をはめて、パンツを開き、長い棒の先に引っかけて、焚火の上にかざしていた。運悪く煙が私の方に回ってきて、煙いのと熱さで、ちよつとの間、顔を背けていた。

「おい、パンツ燃えてる！」

見ると、パンツの裾が燃えていた。慌てて引き寄せ、砂の上に放つて、なん度も踏みつけた。

ようやく、火が消えた。見るとゴム紐のあたりが残っているだけ。

みんなは大笑いしたけど、母の怒る顔が浮かんできた。

「もう使い物にならないから、燃やしちやい」

みんなに言われた。もう履けないと思

ったけど、どうしてか、それができなかつた。

持って帰って、軒下の薪が積んである間に隠した。

なん日か、パンツを履かないで過こしていた。腰にあつたものが、無いとなんとも涼しくて、締めまりがない。

しばらくたった夕飯の時、妹が言った。「兄ちゃん、パンツ燃やしちゃったって、みんな言ってたよ」

「残ったのどうした、持ってこい」

母は怒った。隠した薪の間から、取ってきた。

母なら、燃えたところを切り取って、違う布を継ぎ足して……と、思ったのかも知れない。

燃えカスのパンツを広げて見た母は怒るところか笑ってしまった。

「明日からこのパンツ履いて、海に入れ。それならタコが寄ってくる。それを挿んで来い」

そこに父が入って来た。

「おお、変わった。パンツだこと」

「泳ぐときは、パンツはかないでと言ったのに。このさまだ」

「母さん、そりゃー。おめでたいことだ。それだけ大人になったつーことだ」

父が笑うと、母も妹も笑った。仕方なく私も笑ったけど、涙笑いになった。

これも、今では考えられないことだけど、夏が来ると決まって思い出す、なんとも物悲しいことである。

終わり

死体が抱きつく

佐藤 憲明

「あゝ、判った。後はいうな」

これは兄の口癖だった。口数は少なく、思いやりがあり、頼りがいがあった。

夢を見た。『あゝ、判った……』夢の中の声に目を覚ました。電話が鳴っている。

「今、救急車で運ばれてきたの……」

病気知らずの兄が救急車？しやれでもないと思つた。義姉は気が動転している。これは本物だ。女房を起こし急いで車に乗った。

義姉は放心状態だった。開腹したら、腹部動脈瘤破裂で大量出血し、足から血管を取り、何とか繋ぎ直したが、容体がかなり悪いと、度々医者から経過を聞かされた。義姉に私たち夫婦、義姉の弟弘夫婦は口を開く気力がない。三十分ぐらいたら、

「お会いしますか」

と声が掛かった。手術室ではなくICUだった。若い医師が全身の体重を掛け、心臓を押し続けている。押すたびに体の上に踊る。あばら骨を折る気か。モニターの波形は何を意味するか知らない。顔色、体の色はピンクでまだ血の気がある。主治医はマツサージを見守っている。泣き出しそうな義姉は、緊張を通り越し立っているのがやつとだ。私は義姉の後ろに回り、倒れはしないかと構えた。

「かわいそう。もう結構です」

見るに堪えかねた義姉が、涙声でいった。

主治医は左手をさつと前に出し、マツサージを制した。ポケットライトで瞳孔を覗き、聴診器を胸に当てたが、儀式にしか思えなかった。見る間に顔色、肌の

色が白く褪めていく。医師は時間を読み上げ、頭を下げた。

「精一杯尽くしましたが……」

と、死亡を告げた。その日は、兄の八十歳の誕生日だった。呼び入れた時点で、すでに死んでいたんだ。遺族に納得をさせるための心臓マツサージだった。私は申し出た。

「私の車で連れて帰りたい」

引き取りに時間が掛かると安置室に移される。安置室には入れたくない。遺体を一時放置したよう居たたまれない気持ちになる。

葬儀屋に搬送依頼はしたくない。搬送という言葉が嫌いだ。生きていようが死んでいようが、私にはかけがえのない大切な兄だ。死人は物と同じだとは認めたくない。

母にはじまり、弟、父親とみんな私の手で連れ帰った。母親の頃は、正面玄関から乗せることが許された。『さあ、帰れるよ』と母に声を掛け、抱きかかえて乗せた。

現在、『玄関から出せ』と言つても、時代が違う。地下の通用口へ車を着けた。看護師がストレッチャを車の傍に寄せ、どうするかと私を見た。車の四面のドアを開け、助手席をいっばいに倒した。

「後部座席から足を入れますので、前の方に移動の手助けをして下さい」

理解した看護師は素早く位置に着いた。兄の頸の下に右腕を入れ、覆い被さるように左腕を反対側の腋に差し込む。看護師が腰と足に手を回し、力を入れた私も力を込めたが、七十八キロの兄はびくともしない。

七十六歳、私自身が抱かれる側であつていい歳だ。看護師が私の様子を窺っている。目の前に不安に見つめる妻の顔があつた。

兄は以前、親や弟を車に乗せるとき『抱きつくのがうまいな』と冷やかしたその度に『いや、抱きついてくるから』と笑つた。

私は看護師にもう一度と目線を送り、『兄貴、抱きついてこい！』

と心の奥で気合いを掛け満身の力を込めた。その時だ、兄がぐいっと下から私にしがみついた。『来たッ』とありつたけの力を込める。不思議にも兄の身体がスーツと浮いた。

ズルツ、ズルツと足から車の中に入る。車の中から看護師が足を捕まえた。大方が車内に収まった。浴衣の裾、襟元を直し、タオルケットで全身を覆つた。私たちは整列し、看護師に深々と礼をし、車を発進させた。

無言のまま兄の家へと急いだ。途中、不安がよぎつた。五人で合計二百九十九歳、七十八キロの兄を抱えなければならぬ。

家に着くと、私と弘で上半身と頭部を支え、義姉と妻が片方ずつの足を持つこ

とにした。私の体力はすでに限界だ。私の拘りにみんな当然のように従つてくれる。兄は八十歳、私たちの体力にも限界がある。腕の筋肉はなく、筋ばかりの腕で再度兄に抱きつく。弘も反対側から抱きつく。ズズツ、ズズツと頭から兄を引きずり出す。義姉と妻が足を無事に掴んだ。目だけの合図で、そろそろと横歩きする。階段の二段目から三段目にさしかかったとき、『落ちる！』と弘が叫んだ。私の指先は感覚を失っている。ここで落とすと、兄の一喝が跳ぶ。満身の力を振り絞り『あと二歩だ！』と、声を張り上げた。兄も必死にしがみついている。みんな顔面蒼白で、漸く布団に横たえた。私たちは茶の間に下がり、二人に背を向けた。義姉は兄の胸に顔を沈め、『お家なのよ』と囁き、全身を震わせて泣いた。

兄の手が、しつかり義姉を抱きしめていた。

むかし

菅原 暘子

私は函館生れの函館育ち、二十歳代に四、五年程、他市で過したが九十年間函館暮しだ。まだ市民の足が電車だけの頃、今の千代台電停は営所前と云っていた。

其れは、第七一重砲隊が有ったからであり、練兵場の左側の電車通りに一列に七、八軒の商店や医院等があり一角に私の家があった。起床ラップや消燈ラップが聞こえたり大人達は函館山へ定時に通う兵隊をみて家事を進めていた。練兵場と民家との境は低い土手に有刺鉄線をめぐらしていたが、一ヶ所有刺鉄線が切られて、大人も子供も自由に出入りしていた。子供達の結構な遊び場で白赤のツメ草が咲き首飾りや冠を作ったり背丈以上も伸びた草むらでかくれんぼやおたまじやくし取り等したり桜の頃は営所祭り等あつて市民とも交流があつた。昭和十九年の大火

は子供心に強く印象に残る。夜中に起きられ寝ぼけまなこに写つたのは眞赤な空に向いの屋根がヒラ／＼と新聞紙の様に飛んで行き、電車の止まった道巾一杯に、黙々とゾロゾロと後から後から切目なく続く人々、子供心にどこまで続くのかとおどろいた。ズーと後に耳にした話だが、群集は練兵場に避難して来たそうだが、練兵場は兵隊が居てはいれなかつたそう、群集は五稜郭を目ざしたそうである。理由は火薬庫が有ったからと云われている。しかし私達は火薬庫をみた事はない。唯今あそこかと思われる場所があつた。土を盛つて土手を高く作り常に兵士が土手の上を銃を構へて往復していた。あの土手の陰に火薬庫が有つたのだろう。土を盛つた分平地は湿地帯になつて早春に葉とも花とも知れぬ眞白な大きな植物が湿

地一面を埋めつくした。わんぱくな子供達は蛇の枕と称して近づかなかつた。私もその植物の根本に青大将やカナヘビがウヨ／＼居そうでも枯れても近よらなかつた。大分後年新聞で「水芭蕉」と云われる珍しい植物であると知り営所の一角を白々と埋めつくしていた事は知つてる人は少ないのではないか。

終戦を迎へ営所はアメリカ軍に接收され駐留軍の宿舎になつて居た。挺身隊を解放され、女子は家の中で仕事するといふ母の意に逆らつて、厚生省函館援護局に「雇を命ず月給百二十円」で勤めに出た。最初は元町の公会堂それから金森ビル（現在の北島三郎記念館）に引越し最後に辿りついたのがアメリカ軍の撤退した後の第七一重砲隊兵舎跡であつた。私は通勤に乗り物に乗らずに済んで

皆にうらやましがられた。

火薬庫の土手は残つて居たが最早湿地は消えて平凡な草地になつていた。樺太引上第一船を迎へ私の青春の一駒である。

私は今昔重砲隊時代下士官の官舎跡に建てられた三階ビルの窓から、昔のかけらも残つていない営所を見下す。今日も色とりどりのウエアーやスニーカーで若い人々が運動に走っている。小学校の頃毎年運動会を開いた草原でなく陸上競技場で。時には野球場から太鼓の音が響く、草叢はきれいに舗装されて、昔の面影をとどめていない。

室生犀星の詩に

“ふるさとは遠きにありて思つもの”

以下続くのであるが、私はふるさとを離れる事なく居るが、今は全く違ふふるさとを眼にし心の中のふるさとをなつかしんで居る。昔下級士官の官舎の跡に建てられた、三階のビルの窓から若い人達が色とりどりのウエアーやスニーカーで練習に励み、野球場、プール、テニス

コート、弓場、青年センター、と子供公園、きれいなタイルで舗装された道を行来する。公園の数ある樹木の中でポプラの二本の大木は昔の名残りの様に思い、見上げる。

父のガサエビ

野口 裕子

大正末期に生まれた父は、青森生まれの青森育ち。十一月生まれの父は、誕生日を迎えると、満九十二歳になる筈だった。

私の母は早くに亡くなっているのですが、父と二人で過ごした時間も長かった。料理も得意で、「食い道楽」を絵に描いたような人で、美味しい物を食べるには、お金の糸目をつけず、実に豪快に買う人だった。

青森の花見シーズンは四月下旬。ゴールデンウィーク前後が花見シーズンとなるのだが、桜の美しさと共に、我が家で毎年楽しみにしていたのが、「父のガサエビ」である。私は、子供の頃からずっと「ガサエビ」と呼んでいたのですが、ガサエビの本名が「シャコ」と言う事は大人になってから知ったような気がする。

父の自慢は、「わでねば作れねガサエビ（私でなければ作れないガサエビ）」の味付けである。人が来る度に、自分の作り方を伝授し、実際に作ったガサエビを食べてもらい、その美味しさに、誰の顔もほころび、唸るといふ、究極のガサエビの味付け。

花見のシーズンになると、父は自転車で市場へ出掛け、数キロのガサエビを買ってくる。

昔は、ガサエビって言えば、海さ行けば、漁師の人から、バケツ一杯貰ってこれだんだ。飽きる程、食べられて、子供の頃のおやつは、ガサエビの爪の部分をビニール袋に一杯入れて持って歩いて食べたもんだ。今は高級魚だもんなあ。」懐かしそうに昔話を教えてくれる父の目は、いつも優しくかった。

さて、その、父の究極のガサエビの作り方はどうと。買って来た大量のガサエビを、洗いながらまず、オスとメスに区分けする。一番分かりやすいのは、ガサエビを裏返して、クビの部分にヒゲがあるのがオス。もしくは、クビの部分が無くなっているのがメス。瞬時に見分ける事が出来る。そして、大きな鍋に入れて、オスとメスを別々に煮るのが、ここからがスゴイ。鍋の中には、一滴の水も入れないのだ。何を入れるかというと、水の代わりに日本酒を入れるのだ。惜し気もなく、一升瓶丸ごと入れてしまう。出来上がりを食べると納得してしまう。味付けは、醤油とだしのみ。出来上がりの、ガサエビの茹で上がった美しいピンク色の肌、まるでコーティングでもし

たかのようなピッカピッカに光るガサエビの殻の部分。見ているだけで、ゴツクンとツバを飲み込んでしまうくらいに美しい。実際に食べてみると、コクが全然違い、幸せの味ってこういう物かなと思う、まさしく、究極の味わいに仕上がっている。大皿に、煮上がったガサエビをオスとメスを別々に乗せて盛り上げ、「さ、好きなだけ食べる!」と、ニコニコ顔の父を目の前に一緒に晩酌。結婚してからもそれは毎年のように続いていた。「お父さんが死んだら、『あー、あのガサエビ、美味しかったなあ』って思い出してな。」と、笑いながら食卓を囲んでいたあの日々。そんな父で、私は幸せだな〜と感じていた。

足腰が弱り、車いす生活になり、有料老人ホームのお世話になりながらも、元気に過ごしていた父だが、寄る年波には勝てず、今年の四月末に、父は静かに息を引き取った。折しも桜が満開の日だった。

家族葬を希望していた父の遺言通り、

身内での葬儀となったが、私の友人が甲間に来てくれた時に、「お父さんのガサエビ、食べたかったね〜。」と話されて驚いた。私の友人にまで、父のガサエビの話は浸透していたとは!更に、姉の義弟さんも「父さんのガサエビ、めがったなあ。」と笑顔で挨拶してください。従妹の家では、父から父の妹が作り方を教わり、その作り方で、従妹の家でも作っているという話も後日聞いて、父のガサエビの作り方の浸透ぶりには驚いてしまった。

父の葬儀は、とてもアットホームで、温かく送る事が出来た。そして、葬儀後の法事の席での事。沢山のお料理が並んでいたのだが、現在、東京で暮らしている孫の葉子が、「あ!おじいちゃんのガサエビ!これから食べる!」と、握り寿司の中にあつた、ガサエビをほおばった。何だかジーンンとしてしまって、「私も!」「私も!」と、最初は、ガサエビの握り寿司で乾杯となった。

悲しくない、淋しくないと云えば、そ

れは嘘になる。でも、いつも家族の事を第一に考えて、美味しい物を作ってくれて、家族の喜ぶ顔を見るのが楽しくて、せっせと料理してくれてた父の事を話す時は、みんなが笑顔になった。亡くなる前日まで、頑張つて、私の介助でミキサー食を完食し、お風呂にも入れてもらつて。生ききる姿を私達に見せてくれた。旅立ちの日は、桜が満開だった。最高の演出をして旅立った父って、粋だなあと思う。毎年、桜が咲くと、父を思い出し、父の作るガサエビを思い出すことだろう。父と同じくお酒が好きな私。桜の季節には、父を想いながら、そつと乾杯しようと思つている。

傘の雫が掛かる島

水 関 清

九州の大分・宮崎両県に向かい合う、四国の愛媛県に属する瀬戸内海西南部には、人の住む、一〇ほどの島が点在する。そのほとんどは、千人に満たない規模の人口を、いくつつかの浦々で分かちあっている。

それぞれには、山と山の鞍部が形づくる入江が抱く、わずかな平坦地が広がり、目地の漆喰が白い瓦屋根の集落が密集する。そして、細い海岸道路を挟んで、小さな岸壁とそれに付随した浮棧橋がある。背後の山では、丹念に石を積んだ段々畑が中腹へと続き、蜜柑や薩摩芋、そして日々の食卓に添える野菜等が育てられる。

四国西南部の宇和海沿いに広がる、リアス式と呼ばれる沈降海岸は屈曲が激しく、複雑怪奇である。島との区別が困

難な、なぜ島にならなかつたかと思うほどの、細く長く伸びた半島が入り混じる。地図を手にして船上から目を凝らしても、島との見分けがつかない半島がある

こともしばしばで、陸上交通は難路の連続であるため、船便が便利な点では、まさに陸の孤島である。海岸に点在する集落には、小さな診療所が設けられているが、医師は常駐せず、複数の診療所を掛け持ちで担当する。医療機器も最小限のものに限られるため、住民が画像診断などを受ける機会は限られる。そうした島では、予防医学が重視されるという観点から、地元在住の保健婦活動と連携した巡回診療船事業が続けられてきた。「海をわたる病院」として知られる、離島医療の一端を担う活動に加えていただきたいのは、今から四五年前のこと。医師を

志して大学に学んでいた頃のことである。

船便が運ぶ本土からの物資以外は自給自足の島の生活。酒屋はあるが本屋がなく、宅配便もタクシーも救急車を呼んでも島の中にはやって来ない。どこで暮らしていても、人々が暮らすところには、多様な医療需要があるが、その密度が希薄で、医療従事者の常時配置が困難な場合にどうするか。日常的な保健婦活動の中で、島民が「自分の体は自分で守る」という予防医学の考え方を浸透させるとともに、診療船の定期巡回事業の中で画像診断を含めた検診業務を担う、という理念の下で、岡山済生会病院の大和人士院長の指揮のもとで、昭和三十七年から開始された「海をわたる病院」の活動の場を医学生生の眼で見つめる機

会をいただいたことは、その後、生涯の仕事とした総合医活動の基礎となった。

夏休みの一週間を、面積三・九平行^キ、当時の人口約七百という、宇和海の離島である日振島で過ごした。細長い島の西側は断崖が連なり、東から北にかけては岬や入り江が、三つの集落を形成している。集落をつなぐ陸路は、部落を隔てる稜線をたどる幅員二メートル程度の狭隘なくねくね道で、交通の主力は船便である。はるか承平の昔(九三五年頃)、「伊予掾」として赴任した藤原純友が、海賊の一大団を率いて出没したのは、この日振島のある海域である。島には純友が築いた砦や海賊たちが使用したという井戸が残る。当時は、本土からの送水管の敷設前のことで、島の水は、高価な海水淡水化装置によって得ていた時代である。この井戸も、「純友さんの井戸」として、軒を寄せ合った集落の中で、生活用水の供給源として、なお現役であった。

当時の日振島に一軒だけあった旅館は、純友にちなんでその名も「海賊荘」。

診療船の主役である医師や看護婦たちはここに宿泊し、私たち医学生は宿は部落の奥にある潮風に晒されて軒が白く反り返った寺のお堂であった。

「海をわたる病院」の活動に戻ろう。昼間は、医師の診察介助をし、撮影された医療画像をまとめて整理するなどの業務を担い、夜は、駐在保健婦・医師・島民の方々との懇談の場に陪席するのが、私たち医学生の仕事であった。漁師の一日の仕事開始に合わせて、採血などの検査は午前五時から始められる。医師の診療開始は、漁師が沖から昼食のために帰ってくる午前一一時から二時間の間に集中的に行われる。午後からの検査や診察には、漁師の家族や、現地駐在の教員、警察官、公務員などが受診され、夏の陽が海面に近づく頃に、やっと一日の業務が終了する。

そんな一日の終わりに、お堂の外に設けられていたのが、沸かした海水をドラム缶に満たした露天風呂であった。慎重に踏み板を踏んで、火傷せぬように入っ

たこの日の湯の感触は今も鮮やかである。

一浴してお堂に戻って、夕食をとった。一日中一緒に働いて気心が知れた、五十代のベテラン保健婦さんも同席していた。週一回、診療所に医師が巡回する日には診察介助をするが、それ以外は、ひたすら部落を回って血圧を測り、家で食べる味噌汁の味を確かめ、体調の良しあしを聞いて回るといふ。急患があれば、本土の医師に連絡して時には応急処置をするという。この島には犯罪がなく、どの家も鍵をかけないとひと通り島を褒めた後、ポツリと漏らした一言は、さらに忘れがたい。

「この島は、傘の雫が掛かる島なのです。」

冬の扉

元木 いづみ

庭の葡萄の果皮が、黄緑から赤茶、そして黒っぽく変わり熟してきた。青空を見上げるようにして蔓に鉄を入れる。小房から甘酸っぱい香りが漂う。

不安定な天候の中、夏の役割を果たしたミニ向日葵は、安堵しうなだれている。マリーゴールドは、金色に輝いている。

朝夕の冷気が仲秋を知らせると、やがて訪れる季節を感じる。

冬の扉は、今は確かに遠景の中の点である。北海道から離れることなく住み続けていると四拍子の四季の一拍目が『冬』のように思えてくる。

他の地域と比べることすら思いつかない子供の頃は、紐つきのぼっこ手袋をはめ、例え、足が霜焼けの痒さで不愉快であつても、家に帰ると石炭ストーブで体を温める他はなかった。冬を嫌う理由

はなかった。

雪は風物詩でもあり、無くてはならない好きなもののひとつでもあった。

当時は、竹スケートをして学校へ通つてもよかった。家に一台しかないスキーを学校の裏山まで担ぎ、交替で滑つたりした。

大人になり山スキーを覚えると、更に楽しみも広がった。休日にシールをつけて頂上を目指す。鳥の囀りとハーハー言う自分の呼吸が静寂の中に溶け込む。雪との戯れの日々は、忘れることはない。

今年は、自然界の揺さぶりに驚愕し心痛むことが余りにも多かった。新年早々に、その暗示たる出来事があった。身内が事業推進に支障をきたし、事業停止の

事態となった。

いきなり背中に鉄でも背負わされたようで体が固まり動悸が起こつた。

前年の十一月の大雪による工期遅れが挽回できず、膨大な賠償も生じた。工期延期の申請も通らず、幾重もの不運な条件のもと、選択と決断が急がれた。住み慣れた土地を離れざるを得なかった。人生の転機に人はどんな言葉を伝えるのだろうか。時を巻き戻すことはできない。

別れの言葉も、気遣う言葉も、これからの励ましの言葉の区別もつかず、眼差しと表情と肉体からの内言で思いを伝える。

かるうじて、誰もが日常的に使う、「ちゃんと、ご飯食べるんだよ。」
「沢山、睡眠とつてね。」

と、簡単そうに難しいことをさり気なく言う。

「一番強く言いたい「生きるんだよ。」は、気持ちが悪えて言えない。」

何十年も生きて、私にはたいした知恵はなかった。けれども、願いと祈りは通じた。

春の扉がゆっくり開かれ、柔らかな陽光に笑顔で咲いた、たった一輪のスノードロップ。植えた覚えもなく名前も知らなかった花。

その頃、一枚の葉書きが知人から届いた。二十年ほど交流のある手作りバッグの専門家・職人とも言うべき方で、バッグ作りを終了するという内容だった。すぐに電話をした。体調を崩したのではないかと心配になったからである。以前と変わらず、元気そうな声で、道具や機械を処分する話が多かった。

五月中旬に、声が聞きたくなかったのと電話があった。実は、昨年十月に、珍しいと言われている十二指腸の癌が

見つかり、抗癌剤治療を受けているのと語った。

愕然とした。手許にあるバッグの中で好きな物を差し上げたい、という話だった。バッグはともあれ、その日の午後には訪問した。

髪は沢山あったのに抜けたの、と綺麗なシルバーグレーの頭に小さな上品で可愛い帽子を被っていた。思わず、とても似合って素敵です、と言葉が出たほどだった。偶々気に入って買ってあった帽子の出番があったのだ。

彼女は、私より十歳ほど年上で、向上心・向学心に溢れ率直な方でもあった。人生の先輩である彼女に相談することもあった。

六月に二回ほど電話をした時は、抗癌剤治療の入院予定の話で会うタイミングはなかった。

八月二十三日の朝刊で訃報を知った。身支度を整え、連絡をとり、すぐ弔問に伺った。一人暮らしだったので、遠方に住む御家族がこれから、遺骨をお寺に預

けに行くところだったと話してくださいました。

最後のお別れができた。

「どこも痛いところもないし、副作用もないの。だから、何だか変な感じなの。」と穏やかに話した言葉が甦る。

長い冬の間の孤独な闘病生活。辛い冬を生き抜いた方は、ここにもいらつしやう。

私の冬への怯えは、俯瞰する者の傲慢さの写し鏡であった。

まもなく重厚な冬の扉が開けられる。雪の精たちは、みんなて手をつなぎ、くるくる輪を描き、銀世界を創造するのだろうか。

選評

対馬 俊明

今年の随筆部門には二十三篇の応募があった。内三篇は同一作者の作品なので応募者は二十一名である。例年この選評では、全作品を応募順に取り上げ、選外作品についても内容を紹介してきたのだが、どの作品が入選佳作であるのか分かりづらいという声があったので、今回から選評の、各作品の題名の上に入選・佳作を示すこととした。

随筆は、エッセイも含めて幅広い分野にわたる内容を包含するジャンルであり、そこに多様な見聞、経験、知識、感想が書かれるが、いずれにしてもその語り口のおもしろさ、文章の表現力によって読者は興味をひかれ、共感し、感動するのである。応募作を読んで、その表現の熟度が高いものを入選作とし、次に、読んでほしい作品を佳作とした。

入選「父の日章旗」 池田 義博

昭和十九年召集令状を受けて出征し、

シベリア抑留を経て帰国した父が持ち帰った日章旗のことが書かれている。寡黙な父が漏らした極寒の地での生活。戦友の次々の死。ロシア兵士の無理な要求、無責任な言動。筆者は平昌オリンピックで掲げられた日章旗と対照してその複雑な思いを語っている。ロシア民謡を歌う父の姿が浮かぶ。

「スツポンカツポン考」

亀田川の白鳥橋と田家橋の間にあった深いプールのような用水池が「スツポンカツポン」と呼ばれるようになった由来の考察である。子供たちが用水池に落ちて水死しないように母親たちが、「あそこはスツポンカツポン」だと言葉の金網を張った、つまり「母親金網説」が有力であるというのである。「スツポンカツポン」という呼称は他地域にもあって、身長より深い川の淵を指すようだ。ややこしい語源の推理よりも危険な個所が傍にあることを意識しつつ、川原で夢中になって遊んだ子供のころの思い出を書いた部分がよかった。そこに子供

の成長過程が描かれていて、懐かしさをそそる。

佳作「夏が来ると」 畠田 実里

七十年前の食糧難、衣料不足の時代。海に行つてウニやナマコを探し、パンツを焚火で乾かす少年たちの姿が生生きと描かれている。パンツを燃やしてしまつた後の母と父の会話がいい。貧しい時代助け合い励まし合つて生きた家族の温もりが伝わってくる。

「納骨の日に」

東京で一人暮らした弟が亡くなり、共に暮らした道北の町に姉と私が集まつて墓に納骨する場面が描かれている。私と弟は血のつながらない姉弟で、私が出する時駅まで送ってくれた。それ以来の彼との再会が、お骨との対面ということになる。このように過去と現在を回想場面によつてつなぐのは小説的手法である。もつと長い作品にしてほしい。

「鍾馗の絵」

知人宅の玄関に飾られていた「鍾馗立

像」の迫方に魅せられたということ、中国唐代に玄宗皇帝の夢枕に現れて高熱を治めたという「鍾馗」の説話を紹介している。筆者の中国古典の知識に通じた自在な語り口に感心するが、逸話そのものは現代社会との接点あまり感じられない話で、今一つおもしろさに欠ける。鍾馗さまと自分の酒飲み同士の共感というだけでは弱い気がする。

入選「わがままな旅」 小林 雅子

「函館に住む私が、米寿を迎える母を京都の紅葉見物の旅行に誘う話である。東京と函館の間で交わされた会話で、旅の話の進捗状況を語りながら、母と姉とわたし自身の心の動きをたどる。その間に投げかけられたいくつもの問いは、老いの孤独に立ち入ることの難しさを突きつけてくる。生きるとは、わがままとは、最後とは。登場する人物が皆ブライド高く自分の人生を生きようとしているがゆえの問いかけに心が共鳴するのを感じた。

「高倉健さんからの手紙」

平成二十六年十一月に亡くなった映画俳優高倉健へのオマージュ（献辞）である。高倉健が、平成二十五年文化勲章を受章した際、筆者が投稿した祝文が新聞に掲載され、それを送ったところ、すぐ礼状が来たということ、その全文が記載されている。また「あなたへ」の撮影で世話になった外山刑務所で受刑者に語りかけたことはが転載されているなど、資料によつて高倉健の人柄と信条が紹介されているが、彼は筆者と同世代のヒーローということであり、その生き方の美学を生み出した時代性を、筆者の体験と重ねて書いてくれた方が、孤高の人、高倉健の魅力を身近なものとして理解できたのではないかと惜しまれる気がした。

「映画つながり」

小さいころから映画大好き少女の私は、映画全盛時代、映画の話で皆とつながっていた。「映画という一つの文化つながり」で減じることなくここまで生き

延びることが出来た、それだけで十分なのではないか」とある。映画文化礼賛論だが、映画衰退期、PC・スマートホンの流行。それに対応しての映画界の努力などにも触れており、変化しながら続いていく映像文化について、もう少し話を進めてほしかった。

入選『ふんやう』にならぬ 佐藤 健

転勤を余儀なくされる仕事についている親にとつて、子供の教育は心配の種である。子供は次々変わる環境に適応しながら、その中で自己形成をしていく。この作品の家族の場合、娘は、道北の町に自立の場所を得た。息子は順調に高校に進学したが三年になって頓挫。その後曲折があつて、今は東京で一人暮らしをしているという。親とともに各地を巡つた子供たちの「ふるさと」になるのはどこか。子供心のよりどころを問う親の思いには切実なものがある。この作品は現代の日本社会において、多くの家庭が抱える問題を家族の動向を通じてリアルに描きだした貴重な証言である。

佳作「死体が抱きつく」 佐藤 暈明

急死した兄の遺体を自分の車で運ぶ様子を描いている。安置室に入れるのは遺体を一時放棄したようで居たたまれないからで、母、弟、父親とみんな自分の手で連れ帰ったとある。車に抱え入れる際の「死体が抱きつく」場面の描写には圧倒される。合計二百九十九歳の家族愛に脱帽。

佳作「むかし」 菅原 陽子

九十年間函館に住んでいるという女性の記憶である。かつて千代台にあった第七十一重砲隊の練兵場の近くに家があり、そこから眺めた練兵場の様子や昭和十九年の大火の際避難してきた人々の様子が書かれている。終戦後は函館援護局に勤めて、千代台の官舎後に建てられたビルの窓から見た広場の光景を描いている。ところどころ記述が飛んでいるが、昭和一桁生まれの個人の記憶の中の風景として残すべき作品だろう。

「一匹の犬」

人生で忘れられない思い出として、路

上で出会った一匹の犬のことが書かれている。人を恐れている犬に声をかけ、餌を持ってくると犬はその近くに隠れて待っていた。その後犬は飼い主を探しているのか去って行った。家で飼っていた猫は、なついで一緒のベッドで寝てくれた。当時私は病気で孤独であったが、あのちっちゃな温もりに何度救われたことか。犬であれ猫であれ、命を安易に考えてほしくないと結んでいる。ペットがいかに人の心の安らぎであるかを伝える文章である。

「音」

久しぶりのひとり留守番で、午前中に掃除、雪かきなど終えた後、ストーブが燃えている部屋で休んでいて、表の救急車の警笛、定期便の航空機の音を聞いているうちに、戦中挺身隊員として軍需工場へと駆り出されて行ったことを思い出す。音には色があり、そして生活があるとして、元気で仲良く楽しく過す人生を願う気持ちを語って結んでいる。日常の音と戦時中の非日常の音を記憶の

中から呼び出して人生の時間を迎ろうとした発想はすばらしいが、最後のまとめで説明するだけでは、音が心に響いて来なかった。

「月光仮面リターンズ」

松風町のグリーンプラザに置かれている「月光仮面」の像とその姿を映した白黒テレビを話題として、現在の官僚や、公的機関の不正をあばく正義の味方の再来を期待し、かつて月光仮面の登場で人々に夢を与えたテレビに代わる新時代の情報機器が再び人々に幸せをもたらしてくれるかどうかと問いかける。時事評論、時事コラムとして完成作品。

入選「定住の街」 武田 勉

精神年齢が実年齢に追い抜かされたという老いの自覚のもとに、走り続けて来た自己の人生を振り返り、故郷でもあるこの海峡の町に定住する決意を語る。内省を伴う濃密な文体に息詰まる思いもあるが、深い感動を呼ぶ作品である。

「息のかかった者」

現今の政官の間に行われた隠蔽、虚偽

改さんについて、時代劇に出てくる「息のかかった者」同志の関係になぞらえて、その癒着を糾弾している。災害被災者に対する援助についても、物心両面における多角的な援助が必要であると提言。時事コラム作品。

「時代を読む、そして私の価値」

情報科学を専攻した文系人間である筆者の人間感覚優先論である。「空気を読むことは人間にしかできない」との記述があつて、AI（人工頭脳）の限界を言っているのではないかと思つたが、「人の書いた文章なりプログラムなりを評価するのは人間である」とあり、その二項が同次元で語れるものなのかどうか。いづれにしてもエッセイ作品として取り上げるにはテーマが大きすぎるので、一部を紹介するだけに止めておく。

入選「蔵の中から」 谷口 敦子

夫の実家の蔵から出て来た明治末に作られた土地明細台帳に載っている町名。大正天皇が皇太子だった折の送迎録にある献上品名。送迎に当たった婦人会

員の写真と名簿などを紹介している。それらの資料の出どころの「先祖様の出自が分かりやすく説明されており、献上品目で、当時のハレの場での食事風景が髻髻とするし、函館の婦人たちの姿、特に女性名にも流行があつたことの解説など、楽しませてくれる作品である。

佳作「父のガサエビ」 野口 裕子

青森生まれの青森育ちの父が造つてくれた豪快なガサエビ料理とその自慢話を懐かしく思い出している。飾らない書き方が父への思いを素直に伝える作品である。

「トキと百年」

始めに、百年前に「ブラキストン」が採集したトキの剥製が北大の博物館に保管されていることが書かれている。両親が佐渡衆で、北海道の余市で鉄道員として働いたが亡くなり、自分は佐渡の農学校で学び、北洋博の時函館に来た。今は、農業高校時代の友達との年賀状のやり取りが楽しみだ。あちらからの年賀にはトキが刷りこんであり、こちらは丹頂鶴

であると、始めと終わりを地方を代表する鳥でまとめるなど構成もしつかりした作品であるが、途中、記述が抜けて意味が通りにくい部分があるのが残念。

佳作「傘の雫が掛かる島」 水関 清

瀬戸内海瀬南部に点在する島を巡回する診療船に乗って検診業務を担う「海をわたる病院」の活動に参加していた時の体験を書き留めている。孤立した島を思わせる半島の地形、歴史の説明。漁師と家族のそれぞれの生活時間に合わせた診療の様子。そして一日の終わりに入った露天風呂の体感など、その描写と状況を説明する文章力に感心するが、随筆としては、もう少し広い視点から、北海道の僻地医療との関連などに話を敷衍してほしかった。

「銀杏並木の出会い」

小学校入学を目の前にして母が亡くなる。母に代わって私を育ててくれた姉が嫁ぎ、父と二人っきりの淋しい生活。晩秋の夕方訪ねてきた老婆に一杯の水を所望される。老婆は息子と夫に死なれ

独り身になったことを語る。老婆が去る時、見上げた銀杏が一斉に葉を散らす。その老婆の姿に母の面影を重ねて、一期一会の人生を思う。懐かしい母恋物語の一場面を読むようである。銀杏の落葉と合わせたのがよかったが、少々感傷過多か。

【無題】

生まれつき悪い脚を投げ出して坐る猫を哲学者に見立てて、彼の思考を推理するという設定での言葉遊び。「茶色いフローリング」の「茶色」とは番茶の色だから「番茶色」「緑茶」はそのまま「緑茶色」つまり、もともとの素材に色をつけるのが、私の名付け法。では、「茶色の猫」は「猫色の猫」になつてしまふニヤア。などなど。何度も読んだけど、よく分からない。ごめんなさい。

佳作「冬の扉」 元木 いづみ

北海道に住む者にとつて冬は四季の一拍目。今年の新年早々、去年の大雪に端を発した身内の会社の事業停止と転地。春が訪れるころ、旧交ある知人から

仕事を終了するとの便り。抗癌剤治療の経過を聞き、八月には訃報に接する。心の内の怯えを意識しながら、新たな一拍を刻む冬の訪れを待望する最終部の文章は秀逸である。

あこがれ

山野 みちこ

「招待券二枚もらったの、一緒に行かない？」

優子が、イルミナシオン映画祭のチケットを寿々に見せながら言った。函館に住む映画好きの有志が始めた、いわば市民映画祭は回をかさね二十三回目になる。十二月初旬の三日間、新旧の日本映画を十数本上映し、シナリオ募集もして何か映画も制作し世に送り出してきた。会場は函館山山頂に建つイベント施設と山麓にある旧棧橋の倉庫を改装したホール。映画だけでなく函館の山と海の魅力もいっしょにあじわってもらおうとの主催者の心づもりなのだろう。その近辺に住んでいる優子の行きつけの、映画祭サポーターでもある喫茶店店主が「日頃のお礼に」とくれたのだそぞだ。

どれを観に行こうか、とふたりでプログラムを開いた。『美しい星』がある……

「これ観たい。寿々は反射的に声にした。

三島由紀夫の小説『美しい星』が映画化されたと新聞か雑誌かで知ったとき、驚きながら同時に、ぜひ観たい、だが映画館が少ない函館では上映されないだろうからDVDになるまで待つしかない、と思っていた。それが地元の映画祭で観

られるなんて見逃すわけにはいかない。

三島の死から、すでに半世紀近く経った。もう「三島由紀夫」の名前を文学部の学生が知らない……と大学教授が随筆に書いていた。何故、今、若い（と思われる）監督はこれを撮りたいと思ったのだろう。寿々は三島のたくさんの著書の、ごく一部しか読んでおらず、『美しい星』はタイトルを知っているだけで手にとったこともない。だからどのような映画なのかまったくイメージできないが、ジャンルでいえば三島唯一のSFとだけは分かっている。監督と制作者の心が動いたのはそのあたりかもしれない。昨今の進化したCG技術を駆使すれば、どんなに壮大なスケールの物語であつても華麗に映像化できる……。映画が撮られたと聞いたとき、寿々は意外な思いとともにそんなことが頭を駆けめぐった。

ほとんど同じ時期ではなかったろうか。週刊誌などがよくやる企画で、著名人に、感銘した本をあげてもらおうというページを見ていたら、『美しい星』三島由紀夫のいちばんの傑作」と書いている人がいた。未読であるのにかかわらず、つまりどんな内容なのかも知らないのに寿々はそのとき、どこ

となく他の人が推している本と異質、もつといえはチグハグな感じをおぼえた。三島の『本流』ではない、『SF小説』を「いちばんの傑作」だなんてどうなのだろうと戸惑ったのだ。本人が知ったらなんと言うだろう、あれ（三島本人がベストだと考えているもの）を無視したのか、と不快感をあらわすのでは？それとも、その通り、よくこれをあげてくれた、と喜ぶかもしれない？

最初、三島由紀夫は寿々の前に、映画スターと同類の『有名な人』として現れた。小説を書いている人なのだそうだが、手にしている雑誌のグラビアでその人は、濃い眉と鋭い眼光で自信にあふれた笑いをうかべていた。黒いポロシャツ姿だったり、剣道の胴着をつけていたり、ボディビルを始めたと上半身裸のこともあった。「映画にも出演！」など、誌面は常にセンサーショナルな見出しが躍り、添えられた活字には小説の最新作についても触れられていた（はずだ）。そこから十代だった寿々は、作家としての情報もいくつか受けとつたのだと思う。『美しい星』がSFで、三島の小説の『本流』ではないとの認識、刷り込みがされたのも多分そこからではなかっただろうか。

「それにしよう、『美しい星』、わたしも観たい！」

優子が賛同し、相談はすぐにまとまった。

「そういうえは……」

急須に電気ポットの湯を注ぎながら、「テレビで『午後の曳航』観たよ、どこだったか外国、イギリスだったかな、でつくれた映画だった……」と優子がつぶやいた。

若い母と少年の暮らしの中に飛びこんできた船乗り。だが、憧れだったその『海の男』が母との結婚で俗物になってしまふと少年は幻滅するという三島の小説——

「少年がラストでとる行動、ゾクツとしたわ」

優子は納戸に押しこんでいた古い箱をおそるおそる開けたような顔をした。

「わたしも観たわ。三島の小説はけっこう映画やドラマになっていて、『春の雪』は旬の女優を起用して何度か撮られた……：そういうえは、あの事件のとき、東京にいた優子さんの周辺の反応はどうだったの？」

優子の部屋の窓が函館湾の青い海をきり取っている。寿々は新しくいれてもらったお茶を口にふくんだ。

「ニュースで流されたとき……事務所にいた人たちは皆テレビの前にすいよせられて……何がおきているのか飲みこめないまま……」

「あの事件」の日をよびもどしながら優子はことばを紡いだ。

三島由紀夫を話題にするとき、今でもやっぱり彼の最期にこだわってしまう。興味本位の憶測を重ねるだけで核心に近づくわけではなく、むしろ夾雑物をふやし、本質から遠ざか

っているのかもしれないが。

市ヶ谷の自衛隊に三島が乱入しているとのニュースは寿々の記憶でも昼どきに流れた。その時点のアナウンサーは、「作家の三島由紀夫と名乗っている男が……」と特定しない伝え方をしたがテレビの画面は建物のバルコニーで何かを叫んでいるらしい三島の姿を映しだしていた。

寿々は『暁の寺』を読んでいるときだった。三島のライフワークだと発行された「豊饒の海」四部作の第三巻だ。第一巻『春の雪』、第二巻『奔馬』と読みついで後の『暁の寺』は前二作とくらべて読みづらかった。というか寿々の頭では、まるで解らなかつた。ひとりの読者として心を寄せることができた第一巻の松枝清頭・綾倉聡子、第二巻の飯沼勲とちがつて第三巻のジン・ジャン姫は寿々のなかで像を結ばない。物語ではなく学術書をひらいているようで、つきはなされたようなさびしさを寿々は感じていた。そんなときに事件はおきたのだつた。

第四巻『天人五衰』が書店から届いたのは翌年の春だった。大長編最後の一行は「庭は夏の日ざかりの日を浴びてしんとしている。」だった。そして——「豊饒の海」完。昭和四十五年十一月二十五日——日付けが記されていた。

三島はまさにその日、書き上げた原稿を出版社に渡してから楯の会の若者と市ヶ谷に向かい、あの行動におよんだ、との証言が時をおかず関係者から出された。

「文芸大作这件事情があつたけど、文学作品を映画にしたものを指したことはでしょう、三島以外にもいろいろ小説が映画になつて、文学と映画はいい関係なんでしょうね。そうそう、観てから読むか、読んでから観るか」なんていう宣伝文句も流行つたよね。最近は何人かを照準に、コミックが次々映画やドラマになつていけるけれど、『美しい星』楽しみだわ」

のびやかな声で優子は言った。

寿々と高校の同級生だつた優子は、今でいう半ば登校拒否していたような寿々々々々々を気遣い、持ち前の明るさとリーダーシップで何かと支えてくれた。期末試験の前など進級が危うい寿々に、一緒に勉強しようとして誘つてもくれた。大学にいった東京でそのまま社会人となり、退職したとき高齢の両親と暮らすため故郷の函館に帰つてきて最終の役目を果たした。

「ところで、学校でわたしたち三島を習つた？ 教科書には何か載つていたの」

寿々がたずねると、優子は「そうねえ、漱石と鴎外は確実にあつたけど。教科書だから評価が定まつた明治・大正が中心で、昭和は……とりわけ戦後の作家つて、まだ載つてなかつたと思う。半世紀以上前のことだから、あやふやだけど」と腕をくむ。

休みがちだつた寿々は学校のことと授業のことはあちこちが空白だつた。仕事に出かける母を見送ると、しだいに体が重

くなり家を出るのが億劫になる。評論家が後年、寿々たち戦後世代を「団塊の世代」と名づけたが、六十名近くもの生徒が詰めこまれた教室にはいつも熱風がうず巻いていた。級友の誰もが将来じぶんがやるべきことを模索し格闘している発熱だったと今は分かるが、その頃の寿々には身がすくむ場所だった。未来というものが存在しており人は誰もがそこへ行き自立しなければならぬ、そのための努力を重ねなければならぬと考えたことはなかったから、何の軋轢もない家の中で、ぼんやりしていることが最も安らいだ。寿々が担っている夕食の仕度にとりかかるまで、かくべつ何をすることもなく過ごしていた。生計のため一日外にいた母は多分、そんな娘の毎日を把握していなかったに違いない。時おり、将来何をやりたいのかと尋ねてきたが、寿々は曖昧な態度で答えを先延ばしにしていた。卒業間近になって、一年か二年このまま家にいたいとの願いをいうと母は受け入れた。せめて洋裁か和裁を習うこと、が交換条件だった。それさえ守れなかった寿々だったが――。

「あのころ時間はたっぷりあって、つかわずにいれば減らな
いと思ったわけではないけれど、怠けもの時代だったわ」

寿々が今更ながらの嘆息をもらすと、

「おとなになるのを拒否するモラトリアム時代って誰にもあ
って、『牛後の曳航』の少年もその部類なんじゃないかなあ……

……三島自身の内面でもあるから、もつともつと複雑だだけ」

優子ならではのフォローをする。閉じこもり気味の時代を見守り伴走してくれていた友に、あらためて感謝の念がわく。体型がいくぶん豊かになっているけれど、すがすがしい優子の目差しはあのころと変わりない。

優子の家で映画祭の『美しい星』を観ることに決め、そこから若いころのあれこれをたどる成り行きになった寿々は、帰路 ひさしぶりに書店にたち寄った。

『ダラダラしているだけではないけどちよつと反省したとき、『仮面の告白』とか『金閣寺』を読んで、へえー文学ってこういうものなの？』と思つた覚えがあるわ」

狭小な寿々のいる場所に、それらの小説は未知の空気を送りこんでくれた。『仮面の告白』は屈折した自意識をもつ主人公の背中を追って疲労困憊し、美しいものの存在を消すことによつて自分を生かす『金閣寺』の主人公にはわずかに共感した。どちらからも難渋と緊張と陶酔がまじりあつた濃い余韻がもたらされた。よほどのことが無いかぎり一冊の本を二度、三度と読むことはないが、一度きりでも読んだことで何かが刻まれる。時間の濾過をくぐり抜け、ふとしたとき、模糊とした風景のなかに緑の草のようにすがたをあらわす。

寿々は『美しい星』の文庫本をさがし買ひもとめた。「いちばんの傑作」とのアンケート回答を読んだときはすぐにも入手しようと思つたのに実行せざうにいた。予想していたより厚

い——長編だった。発表されたのは一九六二(昭和三七)年とある。寿々が十五歳、中学生のときだ。

寿々のそのころの『愛読書』は叔母からもらった料理の本だった。母とふたり暮らしたかったので、仕事から母が帰るまで夕食を用意しておくことがいつしか寿々の役目になっていた。魚を焼いたり野菜を煮たりの簡単なものだったが、寿々が台所にたっていることを知った叔母が、参考になさい、と何冊かくれたのだ。種々の、見たことも食べたこともない料理が載っていた本は叔母が購読していた婦人雑誌の付録で、だが綺麗なカラー印刷の、付録とは思えないのもあった。いつかつくってみようと思いつながら寿々は飽かずに、ときにはメモも取ったりしてながめていた。

叔母の家で、婦人雑誌で、三島のさまざまなグラビアを見ているのだろう。

昭和と同じ年齢の三島と、母や叔母はほぼ同年代だったのだとも、今になって初めて思いついたり寿々は不思議な気がした。どんなものであれ、ふたりが小説について話題にしていた覚えはない。『時代の寵児』とはいえ三島のことより関心があったのは、生活に直結した料理やおしゃれや、本当の芸能人のことなどだったのだろう。寿々は遠い日の、若かった母と叔母を思い出す。

叔母は、市内では名の知れた企業に勤めているひとと結婚

していたので、離婚して寿々を女手ひとつで育てなければならなかった母と反対に不自由な暮らしができていた。塀をまわした一戸建ての社宅は、新しくはなかったが住宅事情が十分でなかった時代、夫婦ふたりで住むには贅沢といえた。土曜日の午後など寿々がおとずれ勝手口から声をかけると、母から連絡が入っていたのだろう、叔母はバスTELカラーの花模様のエプロンをつけて台所にたっていた。ウェーブをかけた髪がいつも叔母の顔をやわらかく縁どっていた。

「ちようど良かった、ホットケーキ焼きあがったところ」

さあ早く……と促され、ほどよく暖まった茶の間に入り、寿々は、ふうつと溜息をつく。家を出て、電車に乗って……叔母の家につくまでとても緊張する時間だった。大火や震災からまぬかれた古い町から閑静な住宅街へ、路面電車の四角い箱のなかの安心できる立ち位置を探して息をひそめていた見知らぬ人がいる場所は苦手な寿々だった。車窓から目につる街並みも固くこわばっている心には染みこまない。電車が走っている商店街に、どんな店が並んでいて、どんな人々が行き交っているのか少しも覚えていない。煙ったように感じられる車内で、レールと車輪のきしみでときおり激しくなる振動にだけ全身で立ち向かう。聞きなれた停留所の名が耳にとどくとようやく呼吸が楽にできた。

ストーブの上の薬缶からたちのぼる湯気がおどっているように見える。テーブルにはティーカップが用意されていて。

叔母の茶の間はいつも心地よかった。寿々はいつもの朱色の座布団にすわった。

「レコード聞く？おじさん、新しいレコード買って来たんだよ」

カップに紅茶を注ぎながら叔母が言う。テレビの隣に置かれているステレオの鼈甲色の木肌がひときわつやつやとしていた。この間まで叔母が編んでいた白いレースの覆いがかけられ、この家でのステレオへの優遇ぐあいがうかがわれた。

「カラヤンっていうんだって、この人。世界的に有名な指揮者だそうだよ」

レースの覆いを外し、蓋を開け、ジャケットから取り出したレコードを叔母はうやうやしくプレーヤーに載せた。空になったジャケットを見せてもらおうと、どこの国なのか分からないが険しい顔つきの男の人が写っていた。

——わたしになんの相談もなく買って来たのよ、あんな高いもの、どうして必要なのか分からない！おかげで冬のコートが買えなくなってしまった。

叔母が母に訴えていた光景がうかびあがった。悔しそうな悲しそうな叔母を、どう慰めたらいいか母は困惑していた。

叔母をあれほど落胆させた、叔父が買い求めたステレオという装置から流れてくる音色……聞いたことのあるその旋律が、どれだけ画期的に良い音なのか寿々にも叔母の言うようにはつきりと分からなかった。ただ、叔父には「音を楽しむ

”という趣味があったのか、と漠然と思った。

寿々は叔父に対したときも電車の中にいるような緊張感がわき上がる。叔母の「だんなさま」ということで無条件な親しみは覚えなかつた。柔和な容貌の、物言いも穏やかな人なのに、なるべく目を合わさず、できるだけ距離をおいていた。それでも叔母の家を訪れるのは、叔父は帰宅が遅い。とくに土曜日は、ほとんど真夜中まで帰らないから叔母のすすめるまま泊まつても、その日は顔を合わせなくてすんだ。叔母は「付き合いなのか接待なのか、きつと仕事の方がわたしというより楽しいんでしょう」という。

寿々はおもしろい音につつまれながら、叔母がつくってくれたホットケーキを口に運び、紅茶を飲む。家にもどった叔父が、叔母を嘆かせたこのステレオから流れる交響曲に耳をかたむけているところを想像する……以前、泊まったときのことによみがえってくる。

接待なのか内輪の飲み会なのか、酒を飲んで深夜帰宅した叔父は、寿々が叔母と寝ている隣の部屋に眠っている。床の間があるその部屋は叔父の寝室となっていた。酔って帰ってきた叔父を小言をいながら布団に入れ、また寿々の横にもどってきた叔母の動きで寿々の眠りは浅くなり仕舞いに目ざめてしまった。ふたたび眠りに落ちることができない。家にいる母のことが思われた。一人で、今夜は何を食べただろう、編みなおすといっていたセーターをほどこいてでもいただろう

か。額にかかったほつれ毛をそのままに手作業に没頭している母の背中が浮かぶ。すでに熟睡しているらしい叔母を横目に、寿々は泊まったことを後悔しながら寝がえりをくり返した。

そんな寿々の耳に絡みついてくるものがあつた。空気を押しつけ畳の上を這うようにやつてきた何かの、もの音ではあるのだろうが何なのか分からない微かな音……建物のきしみ？ どこかに潜んでいる猫とか小動物のうめき？ まさか怨霊のようなものが忍びよってきたのか……掛けている布団より暗闇が重くのしかかり、寿々は得体のしれない音から逃れることができず、じっと息をひそめているしかなかった。そうしているうち、つかみどころのなかった音にコトバの輪郭があるように感じられてきた。寿々はすべての神経を耳に集中した。

「……むーうーすーうーまーあーでー」

まちがいなく日本の語、しかも隣の部屋から流れてくる。発しているのは叔父だ。

「きーみーがーあ よーおーはー」

たどたどしい、幼児の歩みみたいな旋律の踏みかた……だが、耳なれると語のつらなりは明瞭になってくる。叔父が歌っているのは「君が代」だった。

翌朝、叔母は何事もなかったように朝食のしたくをしていた。寿々は深夜に体験した奇妙なできごとに触れなかった。

その後も二度三度、叔父の「君が代」を聞いた。酔いが深いときに出るようだった。だから叔母にとっては取りたてて珍しいことではなかった、叔父の寝言として馴れていたのだらう。

寝言のせいもあるかもしれないが叔父の「君が代」はいつも息たえだえ苦しそうだつた。すすり泣いているようにも聞こえた。叔父のまぶたの裏の光景は、どんな状況で、そこで、どんな思いで歌っていたのだろう。たとえば戦場で途方にくれて立ちつくしている叔父が想像されたりもする。

最先端のステレオを買いたいともめ、オーケストラの音色と旋律に浸っている叔父と重ならない。

寿々が買った『美しい星』は新潮文庫。そのカバーに書かれている文を読むと――

地球とは別の天体から飛来した宇宙人であるという意識に目覚めた一家を中心に、核兵器を持った人類の滅亡をめぐる現代的な不安を、SF的技法を駆使してアレゴリカルに描き、大きな反響を呼んだ作品。著者は、一家を自在に動かし、政治・文明・思想、そして人類までを著者の宇宙に引込もうとする。著者の抱く人類の運命に関する洞察と痛烈な現代批判に充ちた異色の思想小説である。

「SF的技法」の「思想小説」？ 直球のSF小説だとばかり

り思っていた寿々の重心がぐらりと揺らぐ（直球といつてもそれがどんなものかは知らないのだが）。

地球に「飛来した宇宙人であるという意識」の人たちが織りなすストーリーに出遭うべく寿々はいそいでページをめくる。

第一章の冒頭で埼玉県飯能（はんのう）市がこの小説の舞台だと分かる。一家の名前は、当主・大杉重一郎、妻・伊余子（いよこ）、長男・一雄、長女・暁子（あきこ）。宇宙人だとの意識に目ざめた彼ら四人は「地球の平和を護るといふ／＼宇宙的使命」をもつて行動をしている。

この宇宙人一家がどこから地球に来たのかというと、それぞれ違う星からである。重一郎は火星、伊余子は木星、一雄・水星、暁子・金星という具合。なぜ、そのように別々の星から来たか設定したのである？ 美しい娘である暁子が金星人なのは納得できるから、火星人、木星人、水星人である必然性もあるに違いない、だんだんと明かされていくのだろうと思いつつページを繰る寿々の目に、重一郎が家の近くの空地で真夜中、円盤を目撃する回想シーンに出あった。重一郎はそれを切っ掛けに自分は火星人だと信じるようになり、家族にもつぎつぎ同様のことが起こる。異なる星がふるさとの一家だが「宇宙人」という共通点で固く結ばれ、「地球人」ではないということが彼らの矜持にもなっている。

すでに一家は、ソ連のフルシチョフに「核爆発実験をやめ

るよう」手紙を出す行動をおこしている。東西冷戦時代。アメリカの大統領はケネディ。キューバ危機がおこったのは調べてみると、三島がこれを書きあげた直後だった。

五十年前の背景は現在と相似だった。現代科学がもたらした光と影の、究極の影である「核」——地球を、核のない、争いのない、真に美しい星にしようとする奮闘する大杉一家の物語『美しい星』はとても今日的な小説だった。

十章からなっており、野心を抱いた政治家、地方大学の助教授とその友人の床屋に銀行員などが登場してくる。とくに助教授の羽黒真澄は人類滅亡を企てており、大杉重一郎を自分の陣営に引きこむべく論戦を挑む。

第九章で、羽黒はいう。

「歴史上、政治とは要するに、パンを与えるいろんな方策だったが、宗教家にまさる政治家の知恵は、人間はパンだけで生きるものだという認識だった。」

叔母がつくった香り高いホットケーキを味わい、叔父のステレオから流れてくる音楽を聴いていたあの時、米ソ二大国の綱引きがもたらした緊迫が世界にあった。その実感は、寿々もふくめ周囲の大人たちにどれほどあったのか——。みんな何より日々の豊かな暮らしに憧れていた。おいしいパンを手でできれば満足した。為政者はまっさきに経済成長率の数字をあげる。数字が高いと、自分の手柄だと胸を張る。

映画祭の日は好天に恵まれた。冬型の低気圧におそわれるとロープウェーは運行できなくなり、一昨年は実行委員たちをあわてさせたと聞いた。寿々と優子は、山頂にある会場に行くため、夜景見物する一般客の行列にまじって並んだ。

「いちおう小説は読みあげてきたわ。人間の本质が、『宇宙人』たちの会話でうかび上がって考えさせられた……』と寿々は言った。

「わたしは『小説とは何か』というエッセイが本棚にあったから読んでみたの。晩年に書いたそうで三島の『文学的遺書』だといわれているらしい。そこに『美しい星』は『思想の闘い』として『長大な会話』をする小説にトライしたのだが『成功した』とは云いにくい』って文章があつたのよ」

「自己評価しているわけ？」

「そうなの、ぐうぜん目に入つて、びつくり。でも失敗だとはいつてない、三島は、それなりに達成感があつたのだろうと思つた」

客たちを乗せてロープウェーのゴンドラはするすると上昇を始めた。眼下に街のきらめきが広がっていく。十二月の凍つた空気が夜の灯りをいつそう輝かせている。

『美しい星』最終の十章、大杉一家が夜の渋谷を車で通過するシーンを思い起こさせた。不治の病をえた当主・重一郎といっしよに妻の伊余子と子どもたち（二雄、暁子）は郊外を目指している。

「重一郎は薄くひらいた目に幻のように映る夥しいネオンを眺めた。『見るがいい』と重一郎は言った。『みんな見るがいい。人間の街の見納めだよ』／『それぞれの故郷へ帰るまでの、われわれはつかのまの家族なのだ。それまでは一そう仲好く、口争い一つせず、有終の美を完うしようじゃないか』

一家は東京郊外の丘陵にたどり着き。ついに「銀灰色の円盤」に出遭うところで『美しい星』は終る。

虚無がただよいアイロニーに充ちているのが三島の世界と思つていたが、この小説は人類の愚かさを糾弾しながらも、じわりとした温かさをのこしてくれる。

これを契機に、もう一度『三島由紀夫』の扉のまえに立つてみよう、企みにみちた迷宮でも何かに触れうるかもしれない、と寿々は思い——さて、映画はどのように撮られているのだろう。小説が書かれた一九六二年、三十億だった地球の人口は、いま七十億人である。七十億の憧れと絶望を乗せて『美しい星』は無窮に浮かんでいる。

山頂に着いたのか、ゆらりとゴンドラが揺れた。

庭に咲く薔薇

菊地政義

1

たつた今、受話器を置いたばかりの電話がまた、けたゝましく鳴りだした。

台所へ戻りかけていた晶子は、少し迷惑そうな顔をして再び電話台へと駆けもどる。

「松井でございませう……あーらー暫く……お元気で？……ええー、有難うございます……はあ！……今おりますので、お電話代わりましょう、ちよつとお待ちを……」

受話器の端に「掌」をそえて「あなたっ！近藤さんよっ！」深々とソファに身を沈めて、新聞に目を通していた当家の主人、松井章三はゆつくりと身を起こし、テレビの音量を少し下げから受話器を受け取る。

「やあっ！近藤君か……銀行のコンペ以来だなあ……ああ……有難う、ありがとう……うむ！薔薇は私の生涯のテーマだからねえ……今度という今度は、我ながら良く頑張ったよ……なんだってロンドンのグランプリだからねっ！……うん！去年、家の庭に咲く薔薇を五日間ほどかけ

て描きあげたんだ。いやあ！今日は朝から電話の鳴りつばなして参ったまいった。嬉しい悲鳴という奴さ……あっ！それでさあ、船見町の例の現場、仕事拂っているんだろうな？……ああそうかそうか……週明けにでも顔を出すから……うん、わかった。じゃあどうもどうも……はい」

明るく活力に満ちた電話は、章三の今朝の心境をそのまま現わしていた。

「あっ！もうこんな時間か？大体呉れそうな電話はみな来たようだなあ？さあ！そろそろ出社の時間だ」少し慌てて奥に着替えに行つた。

晶子は夫の受賞を喜んだ。受賞を報ずる今朝の新聞が晶子の心を弾ませていた。

食器の触れ合う軽い音も、蛇口をほとばしる水道の音もみな心地良いものに思われた。

暫く静寂に包まれた居間に、再び電話が鳴り響く。グランプリ受賞御目出度うの電話だけでも、今朝からもう十本以上は数えている。これで一体何本目だろう。静寂を破る闖入者

の電話に、晶子の表情にはもう笑みは無かった。

今までの電話には無い微妙な響きを感じた。晶子はスリッパをバタつかせて電話台に急いだ。

「……はああ、左様でございます。……ええ、おりますけど。……どちら様で？……少々お待ちください」

晶子が奥へ向かうと同時に、着替えを終えた章三が出てきた。

「何んだっ！亦電話かつ？」

「ええ、美原三丁目青地さんですって、知らない人ねっ？」

「どれっ！」、今までとはちよつと調子を変えて、重々しく慎重に。

「松井です……、何ですって？……私の薔薇の絵が模写だと云うんですか？……とんでもない、何を根拠に？……家の庭に咲く薔薇を、この私が描いたものだっ！……とにかく、馬鹿げた言掛りだっ中傷だっ！やめてくれっ！答える必要は無いつ！」こわね 声音も荒く、投げ捨てるように受話器をおいた。顔色は土色に変わった。病人のような顔色である。やがて肩で息をし始めた。

十分前のあの満足し切った、自信に満ちた穏やかな会社社長長の表情はもうここには無かった。

雰囲気のあまりな急変に、ふきん 布巾を片手に棒立ちの晶子は心配そうに「あなたっ！如何なさったのっ？」声はかすれて上ずっていた。

「なにつ！心配することは無い。……朝刊の俺の絵が模写だといつて難癖つけて来やがったんだ。……この馬の骨めがっ！」

エンジンの音も荒々しく章三は出社していった。

さきほど以上の静けさが居間を包んだ。テーブルには、先刻、社長が眺めていた今朝の朝刊がそのまゝ広がっており、紙面左上段には葉書大の写真が掲載され、そこには、右手で大きな薔薇の絵を支え、左手にはそれとわかるブランドの高級時計、高価と覺しい背広とネクタイに身を包み、傲然と少し不器用に微笑みかけた表情の章三、そして、その派手な見出しには大きく、英国展でグランプリ、松井さんの油彩画、赤中心の大胆なタツチとあつた。

晶子は、倒れ込むようにソファに横たわつた。どつと疲れが湧いて出た。

夫は、先程の電話を心配するなといつていた。しかし、やはり気になる。

晶子は、朝から何度も見た新聞の絵の写真を、改めてじっくりと見直した。

晶子は、絵画にたいしそれほどの興味をもつ訳ではない。夫と共にデパートや美術館の展覧会を見歩くことはあるが、ともすれば苦痛を感じることもある。

二階の二十畳のアトリエは、文字通り夫の城であり、夫の一番気の休まる空間なのだ。

夫が絵の制作に取りかかると、晶子は、テレビドラマを選
び、ゆつくり落ち着いて見入ることが出来た。

去年七月、庭の薔薇が咲き誇るのを待ち兼ねて、夫は薔薇
の絵を描き始めた。

あの時の絵がこのグランプリなのだろう。こんな形、こん
な模様の花瓶は家には無い。しかし、夫は良くいつてた。対
象が如何しても面白くない時は、勝手に自分の気に入るよう
に変化をもたせる、それがまた絵の面白いところだと。

そんなものかと聞き流していたが、やはり自分にはわから
ない。晶子は、そう思った。

若いときから酒もタバコもやらず、競輪競馬も見向きもし
ない。只ひとつの趣味といえば絵を描くことだけ。たまに開
かれる銀行のゴルフコンペも二度に一度は断っていた。

結婚当時は、毎日、朝早くから晩遅くまで、自転車で見
て走り回っていたものだが、右肩上がりの好景気、その波に
のり、電気工事の事業も拡張に次ぐ拡張、今では従業員四十
人の会社に成長、道南地区トップの業績を誇っている。自他
ともに認める経営者になっているのだった。

2

函館市美原地区、その面積は広大だ。そして平坦だ。

近年、急速に発展し、郊外型大型店舗が林立する。観光都
市函館を想起する光景はどこにも無い。

通称産業道路は市内随一の交通量で、朝夕の渋滞は市民生
活のネックになっている。

隣接する赤川地区に少し道をたどれば、広いとは言えない
が、ほど々々のお庭に樹木草花を配し、しゃれた色、しゃれ
た形の家々がパステル画のように広がる。

思いがけ無い所に瀟洒しょうしやなキリスト教会があり、その裏手が
青地あおだち忠ただしのあまり大きくない家である。建て、からもう三年に
なる。

青地忠は、定年退職するまで中学校の美術教師を勤めてい
た。生涯、勤務した学校は八校を数えるが、最後の一枚を除
いて、残りは全部農村、漁村の小規模校ばかり、これも本人
が希望しての事だった。

今は、どこにでもいる退職教師の年金暮らし、頼まれて町
内会の会計を担当、暇さえあれば画廊、美術館の展覧会をめ
ぐる。子供は居らず、妻は老人大学の学生として澁漑として
頑張り、決して豊かとは言えないが、小さく安定した第二の
人生を楽しんでいる。

青地家の生活は、典型的な夜更しの朝寝坊型である。

現役時代は勿論こうではなかった。サンデーマイニチの生
活となり、退職後二年目あたりから漸く今の形がパターン化
した。

忠は、いつも朝食前に新聞を見てしまうのだが、今朝は愛犬ロンの散歩でコースをかえ、少し遠出をしたので新聞は食後になってしまった。

先ず、真つ先に目を通すのが第一面の大きい見出し、次に慶弔欄、ついで芸能、スポーツ、文化、社会面へと続く、経済面、特に株関係は素通りし、最後に第一面の精読、そして社説ときて終わる。美術関係は特に熱心に読みスクラップブックを作っているほどだ。

忠の目が異様に光った。ロンドン・グランプリの記事が目にとまったからだ。

忠は、あまり記事を読むこと無く写真ばかりを凝視していた。

見知らない男が得意然としてF十五号ほどの薔薇の絵を支えている。忠は、その絵を凝視し続けていた。

一度、ゆつくりお茶を啜った忠は、次に記事を読みだした。見出しには、大きな字で（英国展でグランプリ）（函館の松井さん）（赤中心の大胆なタッチ）三段で載っている。

記事を読み進んだ忠は途中で「うむっ！これはひどい、許せない」と一言漏らした。

写真の横には小さい字で、グランプリ受賞作品、「バラ」と表彰状を手にする松井さんと記されている。記事の内容は、概ね、次の通りである。

函館市湯川町在住の画家で、電気工事会社の社長松井章三さん（五九）の描いた油彩「バラ」（F15号）がこのほど、ロンドン国際展覧会（英国ロンドン芸術委員会特別審査委員会主催）で日本人の作品としては初めて最高賞のグランプリを受賞した。同展覧会はEC十ヶ国と日本の芸術家が出品、一年おきに開かれる洋画展で、今年が十二回目。「バラ」は赤中心の原色を使った大胆な明暗のはっきりしたタッチが評価されて、全部で二百五十点余りの中からグランプリに輝いた。

作品はロンドン市美術館に七月二十四日から八月十日まで展示され、最終日に表彰式が行われて最近、返還されてきた。

松井さんは、国内でもよく知られた芸術団体・東洋会（本部・東京）の会員、今年六月、国際美術協会の展覧会（東京）に別のバラの絵を出品、最高賞の審査員長賞を受けたことから、ロンドンの国際展覧会に推薦された。

グランプリの作品は、自宅の庭に咲いている「花の中では一番好きな」バラを七月に一週間ほどかけ、自宅のアトリエで油絵用ナイフだけで描いた。「日本からはじめてのグランプリで感激している。これからも命ある限り、一生懸命描いていきたい」と話している。

読み終えた忠は、しばし言葉がなかった。呆れたのである。驚いたのである。そして、怒ったのである。

異様な空気を感じた妻の照子は「あなた！如何して？・・・

何かあったの？」いぶかしげに忠の顔を見つめた。

深刻な顔をして口を結んでいた忠は、突然叫んだ。

「許せん！人の絵をまる写しにして何がグランプリだっ！」

照子は、その剣幕に驚いて少し顔を顰めた。

忠は、無言のまま新聞を持って出ていった。自分の部屋へ行ったのだ。玄關脇の四畳半、家中で一番日当たりの悪い部屋、こゝが、忠の書斎である。

出窓のある壁面と、ステレオの置かれているスペースを残して、後は全部本棚、上部には雑多な文庫本や単行本、下部には比較的大型の美術全集、辞典等の書籍が雑然とならんでいる。部屋の片隅には小さい座机、僅かに残る壁面には、F3号の一個の林檎を精密に描写した静物画が掛けられて、殺風景な小部屋に僅かな色を添えている。忠自作のお気に入り作品だ。

忠は、ひととき大冊の、重量感あふれる函入りの一冊を引きました。忠は滅多にこの画集をひもとくことはない。あまりに大きくて重過ぎるのだ。

しかし今朝は見ない訳には行かない。

函から取り出された画集、忠はどん々々頁をめくっていった。外国の風景、いろいろの花、明日香地方の古寺、お馴染みの函館近郊の風景等々、……あった！八十一頁にその絵はあった。

忠は、画集の大きいカラー刷りの薔薇の絵と、新聞のそれと併置して眺めた。

カラーと白黒では、明確な比較は難しいが、やはりこれは模写である。

壺の位置とその模様、花の形と大きさの配置そしてその盛り上がり、左下部になにげなく置かれた小物の陶器、バックとテーブルの線とその位置、壺下部のカット、絵を構成する大事な要素が、みな其の儘だ。

これでは比較的容易な輪郭線をなぞり、その中に絵の具を塗り込んだ只の塗絵ではないか？タッチにはかなり相違の部分がある。これは画筆とペインティングナイフとの違いだろう。

絵は描きたい！描こうと思った感動で勝負が決まる。新聞の絵ではその感動が感じられない。忠は、新聞を切り抜き、この頁にそれを挟んだ。

函館の郊外、赤松街道として有名な松並木の最も美しいあたりに大村画伯のアトリエがある。この画集は大村画伯の画業の集大成として昨年琢磨工房より出版された大画集である。送料込みで四万円、忠の小遣いでは賄いきれず、照子に泣き付けて求めたものだ。

忠は、学生時代から大村画伯の絵を好んだ。芸術家ならず、威張らず、言葉少ない先生を尊敬していた。

過去、何度も開かれた画伯の個展には、日程のやりくりがつく限り汽車、バス、電車を乗り継いでも見に行つた。

思い切つた色彩、重厚なタッチ、対象に鋭く迫る觀察と細部を省略した大胆な描写、いつも感激して帰宅するのであつた。

二度三度、画伯と私語を交したこともある。

個人の人柄は文章にも現れる。たまに新聞に掲載される紀行文、エッセイも心を打たれ、忠はスクラップしているのだつた。

画伯の絵が踏み台にされている。こんなことが許されて良いのか！

函館は美術に関しては道内トップ級のレベルにある街である。美術愛好家も多くその関心も高い。忠は、過去三十年美術教師として延べ約八百人余の児童に絵を教えた。

絵は上手く描こうと思ふな、失敗を恐れるな自由のびのびと描け、人の真似はするな。絵は心でかけ、これが忠の教育指針でありモットーでもあつた。

このままでは、あの時の生徒達に申し訳が立たない、抗議の電話をしよう。

忠は決心して居間に戻つた。

「何してたのよう・・・あなた・・・新聞持つてつちやつてさ、私まだ見てないのよっ！」

「どうだっ！この絵とこの写真、似ているとは思わんかつ！」
「あらっ！似てるわねっ！」

「電話で抗議しようと思ふんだ？」

「おやめよっ、くだらない、一銭にも成らないわつ。電話代の損よっ」

一瞬、忠はためらつた。模写でしようと問われて、はい！その通りですとすぐ答える馬鹿者が何処にいるものか。妻のいうとおり、これはくだらない事なのか？

照子は、これを飲んでのぼせた頭を冷しなさい、と云わんばかりに冷えた麦茶を注いだ。

一息入れた忠は未だこだわつていた、一人でもこの絵を見て「オヤツ」と思つた者がいることを示したい。松井氏も一応画家と称されるものならば、それなりの見識はお持ちだろつ、それが聞きたい。

忠は電話帳をめくつた。番号はすぐにわかつた。新聞を見ている無表情の照子のそばで、ダイヤルをまわす、話し中である。五分後にまたかけて見る。亦、話し中である。

「あなたっ！もうよしてよ・・・落ち着かないっ！」

すこし間をおく。忠は亦ダイヤルを・・・今度は出た！女性の声だ。

「松井さんのお宅でしょうか・・・ご主人様、おいででしょうか・・・あつ！失礼しました。私、美原三丁目に住

む青地忠と申します。……」ここで電話が代る様子だ、……
今度は男性の声、ご主人だろう。

「……失礼します。あのおーう、朝刊掲載のグランプリ、
もしかして、模写ではないかと思いませんか？私、大村画伯の
画集持っているのです、八十一頁の絵とそっくりですね？

……ええ、そのとおりです。……だつて、あの壺、形も
模様もそっくりではないですか、それにですよ！あの左下
の陶器の小物、あれは画伯が良く使う独特な手法しゅほうですよねっ
？……いや決して中傷ではありません、私は、絵を愛す
るもの同志として話しているのです。……如何です、一言
お答え願えませんか？函館の美術愛好家はそんなに甘くはあ
りませんよっ！」ガシヤリッ！ここで電話は潰れるような音
を立て、切れてしまった。

極めて冷静に話しているつもりだったが、相手が声高こゑたかにな
つてくると知らず知らず合せてしまう。

照子は、ことの成り行きに驚いてキョトンとして突っ立っ
ている。電話の突然切れた音は、照子にもハッキリ聞こえた。
「それ、ごらん下さい。……不愉快な思いをするだけよ、や
めてやめて……」

澄んだ空気に明るい日差し、ロンと歩いた楽しい散歩、今
朝のおいしかったジジミの味噌汁、壮快な朝の快感がいつべ
んに消し飛んでしまった。

惘然とした忠は、日当たりの悪い部屋に重い画集を抱え引
つ込んでいった。

3

薄暗く雑然とした自分の小部屋、いつもここにいるかぎり、
忠の気持は安らいだ。座ぶとんを枕に、仰向けに寝転び、電
灯に止まって動かない一匹の蠅をみつめていた。

私はあの絵を模写だといい、作者はとんでもないと否定す
る、模写は悪いことだ、一種の犯罪だ。私が警察に訴え出た
ら、みんな、私を馬鹿だといって笑うだろう。

忠は、むっくり起き上る。

「照子！唐草模様の緑の大きな風呂敷あつたよな？あれ出し
てくれ」

大きな声でどなった。普通の声では通らない。

「何か言つた？」照子が顔を出す。

「新聞社に行つてくる、これを包むんだ」といつて画集を指
差した。

忠の思い詰めた顔付を見て、もう、照子は何も言わずに風
呂敷をさがしに行つた。

近くのバス停と言つても家から二百メートルはある。

重い荷物を持つて汗をふきふき、忠が現れたのは、丁度午

前十時を少しまわる頃だった。

時刻表を見ると、あと、五分は待たなければならぬ。函館駅前行きの路線がちやうど新聞社前でとまる。忠はそれを待った。

模写か否か？新聞社にこの画集を持ち込んで、責任ある人に判断してもらおう。勿論これは自分のためだ。

新聞社が模写と断ずれば私の勝ち、否と断ずれば私の負け。さつき動かない一匹の蠅を見ながら考えついたのはこのことだった。

あきれ顔の照子の横顔が、ふと、窓ガラスに映ったような気がした。

俺が新聞社に用事だなんて・・・忠が、新聞社の前に立つのは初めてのことだ。

右手に受付がある、眼鏡をかけた年配の女性が目を光らせている。時代遅れの、今では珍しい唐草模様の大風呂敷に包まれた何か重そうな荷物を抱え、キョロキョロと落ち着かない忠を見て、受付嬢は声を掛けた。

「どちらへ？なんの御用かしら？」

忠は、簡単に来意を告げた。

「あゝ、それは三階の報道部ねっ！」歳の割には意外と若々しい声だ。続いてもう一言、

「この用紙に御住所、お名前、お年と電話番号を記入して出

して下さい。」

用紙を手渡すその手で「エレベーターはあちら」白い指で示した。

報道部はすぐわかった、薄暗い途中の廊下には労働組合の檄文、アジビラ・ポスターが乱雑に貼られ、ひととき忠は昔の職場を懐かしんだ。

部屋には、たぐさんの机に大勢の社員、書類を山積みにして顔だけ覗かせている。活気があつて忙しそうだ。

それでも、一番近くに居る若い社員がすつくと立上り、忠を見つけて近よってきた。油気のない髪の毛を無造作にたらし裕次郎にちよつと似ている。

「何の御用でしょうか・・・」声まで似ている。「ちよつとお待ちを！まず荷物をどこかに？」忠は、どこで画集を広げるか迷っていると、「こちらへどうぞ」、少し奥まった広いテーブルに連れていかれた。

函から出された画集には紺地布張りの豪華な表紙に、大村太郎画集と金文字で格調高くしるされていた。

若い社員は、いぶかしげに立って見ている。

忠は、問題の八十一頁、バラの絵を開いた。そこに挟んでいた新聞の切り抜きを横に並べた。

「今朝のグランプリ、どうです？・・・この絵に似ていると思いませんか？・・・私は模写だと思つのですが？・・・それで責任ある方の御判断を頂きたく、参上した次第です」

裕次郎は、顔を近付けて、食入るように眺めていた。……
「とにかく、まずお掛けになって。……それでですねえ。写真が小さくておまけに黒白ときている。素人の私が断定するには自信がないのですが……いわれてみると似ているような気がしますねえ？」

裕次郎は続けていう。「ちよつとお待ちになつて、いま、上役に相談して参ります」

部屋の一番禺、大きい机で四十を少し出たくらい、偉そうな人が只今電話中、難しい用件なのか表情が険しい。裕次郎は電話が終るのを待っている。ようやく電話は終わったようだ。こちらを見ながら何やら話している。上役は、大きく頷くと、すつくと立ちあがり、上着をきながら二人でこちらにやつて来る。

「やあやあ！御待たせ致しました。今、御用件を伺いました。私、羽田と申します」そして名刺を差し出した。名刺には、道南新報社 報道部長 羽田修とあった。

「私は、いまは年金生活者なもので、名刺は持ち合わせておりません。失礼します」忠は、丁寧に頭を下げた。

「ああ、問題の大村画伯のバラ、……これなんですか？ふむ！部分的には、かなり似ているような気がします。全体として眺めると少し感じが違いますね。ムードが違う、重厚さ、品格、結局これは人格の相違かな？要するに心の違いなんだろうねっ？」部長は裕次郎をみて言った。「ところで、この写

真は誰が撮ってきたんだつたかな？」「久保君です」裕次郎は間髪を入れずに答えた。

「どうだ久保君はいま外か？」「午前中、市役所になっておりますが、予定表では十一時帰社となっております、若しかするともう下にいるかも知れません。見て参ります」裕次郎は出ていった。

忠と部長、二人きりになった。部長は、声をひそめてこう言った。

「青地さん、この画集、重くて大変でしたねっ！御苦労様でした。実は今の電話、大村画伯から直々の電話だったんですよ、冷静なお話でしたが内容はかなりきびしかったですね。

午後の三時にアトリエに何うことになっているのです。」裕次郎が一人の社員を連れてはいつて来た。久保君だろう、日にやけて精悍そうな顔、首にカメラを下げて大きい汚れたズック袋を背負っている、ベトナム戦争の従軍記者のようだ。

「おつ、久保君、……いまこの四人のなかで、この絵の原画を見たのは君一人なんだ。如何だ？原画はこの絵に似ていたか？」部長は画集の絵を指差した。久保は、思いがけない自分の出番に少しとまどった。グランプリが本物が偽物か？すべて自分の判断で決しかねない。久保は、三日前の取材を思い浮かべた。松井氏の自慢話とも付かない説明に、訳のわからない芸術論、奥さんの入れてくれたコーヒーの味と香り。「似ております！そっくりです！」久保は緊張して自信をも

つて答えた。そして、一言つけ加えた。「この画集の絵よりも、全体的に少し明るかったような気がします」

「そうか、ありがとう。・・みなデスクに戻って良いぞ、ご苦労さん」・・忠は例の風呂敷を広げ画集をしまい始めた。

「あつ、ちよつと！すみませんが青地さん、その八十一頁、写真とらせて頂きたいのですが？時間は取らせませんすぐに参ります」「結構ですよつ」、部長は階下に下りていった。

小柄で可愛らしい女子事務員がお茶を持って来る。忠はお茶を啜りながらあたりを見渡していた。窓から濃い緑色の函館山が少し霞んで見えていた、良い眺めである。

時計はすでに十一時半をまわっていた。

部長が戻る、「いやあー本当にこの画集、重いですね！これを担いで遠路遥はる感謝します。それから貴重な御意見、大きな参考資料になると思います」

忠が画集をしまい終わるのを見て部長は改まって言った。

「青地さん、私たちは美術の専門家ではありません。もちろん裁判官でも警察でも学者でもありません。しかし、黒白は私が付けます。あと、四、五日お待ちになって下さい」

4

その日の昼下がり、社旗を揚げた一台の黒い車が、国道五号線を北へ走っていた。後部座席に羽田報道部長と、同じ報

道部の久保カメランが乗っている。大きな赤松の並木が続く、北海道らしくない光景だ。特に目立った目標もないので、一瞬通り過ぎる恐れが十分あったが、さすが、新聞社の運転手、小さな大村の門柱を見つけ、その前に見事に車を止めた。門柱から家まで二十米ほど細い坂道を下る、大きな木々に囲まれているので、車の音も聞こえない。実に閑静だ。道の両側には沢山の薔薇が花を咲かせていた。

二人は居間に案内される。奥さんの連絡で、やがて離れのアトリエから画伯がお出ましになる、二人は立ち上がって挨拶を交わした。居間の中央には大きなテーブルがあり、八人位は掛けられるだろう。画伯は二人の向いに腰をかけ、初めて笑みを見せた。部長が名刺を差し出す。画伯も壁に掛かっている上着から名刺を取り出し部長に渡す。居間に漂っていた固い空気は少し和らいだ。名刺には、北海道美術協会会員大村太郎 とだけ印されていた。奥さんがワゴンに乗せて紅茶を運んで来る。・・芳香があたりに満ちた。

「この紅茶は、(紅薔薇紅茶)と申しまして自家のブランド、我が家のバラの花ビラが入っておりますのよ！さあ！どうぞ召し上がって、・・・おいしいのよう！」奥さんは、小首を二寸かしげ、女学生の様な清楚な笑顔で言った。かたわらで画伯は(また家内の自慢が始まった。まあ良いさ、これは本当なんだから)優しい笑顔を見せて飲み始めた。

部長は、この一齣(ひととけ)の光景を垣間見て、常日頃の画伯の生活

画伯の人柄がしのばれた。

向い側の壁には、画伯の作と思われる二枚の絵がかげられている。教会と人形の絵である。小品だが迫力はあつた。サイドボードの上には、日本ではあまり見受けられない、古めかしい人形が二体並んでいる。これはロシアの人形で、ひとつが農民の貧しい女、他のひとつは裕福な貴族の女だそうである。服装とポーズの違いが面白い、これは奥さんの説明である。

「僕はこの人形が好きでねえ！僕の大事なモチーフなんだ。いままで何枚描いたかなあ？」画伯は、昔を偲ぶようにゆつくりと言つた。心地よい楽しい会話が續いた。

頃合いを見て、部長が本題の口火を切る。座がヒーンと緊張する。

「午前中頂きました御指摘のお電話！私も驚きました。正確な報道、これこそ、私の責務なのですが、諸君百般（ごうはん）に通曉（つうきょう）する事は至難であり、松井氏の絵が先生の作品の模写であることを、報道部長の職にある私が、見抜くことが出来ませんでした。お詫び申し上げます」聞いている久保は不思議に思つた。いつもはユーモアたっぷりの部長が何と固い、これでは欠伸の出る国会答弁と同じではないか？部長、お楽に、肩の力を抜いて！思わず部長の横顔を眺めた、戻す視線が、奥さんのそれにパツチリと合つてしまった。奥さんはニッコリと微笑んだ。

「羽田さん羽田さん、僕は堅い話と、固い雰囲気が苦手ですね！ざつくばらん、楽にいきましょう」先生がいう。「はあ！・・つい。」一息いれて「先生！それで模写されたと思われ原画なのですが、今、お手元でしょうか？！もしございましてら、比較確認させて頂きたいのですが、如何なものでしょうか？」

「うん！あの絵は三年前札幌の個展で、大阪のコレクターに譲り、今こゝにはありません。それであれば去年出版した私の画集があるので、それをご覧になったらどうかな？とても良い色で、精巧に印刷されておりますよ」

奥さんが氣を利かして席を立ちかけると、画伯は軽く手で制し、「あれは滅法重いからね、どれ、僕がもつて来る」といつて居間を出た。奥さんは、出ていく先生の後姿を眺めながら、「苦勞様ですねえ、こんなことになつて。主人の絵は細かい説明は省き、厚塗りでタッチも明快、あまり混色しませんから、きつと模写しやすいのでしようね？もう、六十年以上もプロとして絵を描いています、こんな事は初めてと申しておりますのよ」静かにそして、さゝやくように言つた。画伯が、画集を抱えアトリエから戻つて来る。奥さんは急いでテーブルの食器を片付けスペースを作つた。

画伯は部長の前に画集をおき、八十一頁をめくつた。そこには、やはり朝刊の切り抜きが挟まれてあつた。久保がげげんそうな顔で部長の顔を窺つた。部長は眼で「良いんだ、良

「いんだよ！」といった。画伯も奥さんもそれには気が付かなかったようだ。

部長は、初めて見る画集のように振るまつていた、その瞬間、青地の姿が目を過つた。

驚いた表情で大きい絵と、小さい写真を見較べる。画伯と奥さんは部長をみつめる、久保は黙って下を見ていた。

「先生！これは間違ひなく模写ですね？写真を撮らせて頂けないでしょうか？」

「どうぞ、光の具合はこれで良いかな？」

「久保君、どうだ？」「えっ！大丈夫です」初めて久保君の活躍する場がやってきた。

手際の良い久保の仕事はすぐ終わった。

「ところで部長さん！僕はこの写真の紳士、松井氏については、不愉快には違ひないがそんなに腹を立てゝいる訳じゃない。東洋会の会員と称しても、所詮アマチュアの日曜画家、剥きになることはない、私が許せないのは、この絵をロンドンに推薦した東洋会の幹部会員の連中さ、毎年開かれる展覧会で全国から出品して来る会員の作品。その進歩、停滞、変化、注意して見ていれば何かおかしい？当然気がつくはずだ。軽率だ！大事な仲間である会員を見守る暖かみと、真剣味が足りない、僕は、東洋会の会長にたいし、文書を持って厳重に抗議するつもりだ。この結果については後日、お電話しましよう」

部長は時計を見た。「あつ、もうこんな時間、御迷惑をお掛けしました。それでは東京本部からの連絡、お待ちしています。どうも有難う御座いました」二人は大村宅を後にした。夕暮れが近く肌寒い、木立をかすめて野鴨が数羽、羽音たく西に飛んで行った。

帰途の車中である。二人とも軽い疲れか？黙して語らなかつたが、函館市街に車が入るころ久保は部長に問うた。

「部長！何故写真を二度も撮らせましたんですか？一度で十分ではないですか？それに、画集だつて初めて見るような振りをして？」

「それさ！後日、模写であるという訂正記事を書く場合、効果としては、本物と模写を併置して掲載しなければ迫力に欠ける。写真が必要なのは先生も先刻御承知だ。それをだよ、写真は既に抗議の一読者から取り寄せ済みですと言えるかね？すべての段取りが大村宅で決着した。この方が先生も奥さんも気分が良いのではないかな、私は写真はもうあるとは言えなかつたよ！」

5

翌日、つまり、グランプリの記事が、道南新報朝刊に掲載された次の日、松井章二は、午前中の出社を見合わせて、道南新報社の報道部長の来訪を待っていた。約束の時間は午前

十時半だからまだ少し間があった。

昨日の華やいだ朝の空気は、今朝は無い。

玄関先に車が止り人を二人降ろして車は去った。章三は羽田とは面識があつた。お互い笑顔で挨拶をかわす。随行の若い社員に、社長は名乗り、名刺を差し出した。「私、報道部の吉田正人です」あちこちポケットをまさぐつて漸く名刺を取り出し、恭しく社長に手渡した。若社員、(裕次郎に似ている男) その名を吉田正人と云つたのだ。

「いらつしやいませ」ワゴンにお茶を乗せ、居間に入る晶子の表情は固かつた。

部長と吉田が掛けたソファは庭に向いていた。庭には沢山の薔薇が見渡せた。

今日の部長は、その薔薇を愛でる心境にはなれなかつた。

今日の松井宅への訪問は、部長にとって気の重い仕事だつたのだ。

「お忙しいところ、貴重なお時間を割いて頂き恐縮です、どうしてもお会いしてお話ししたかったですから」

松井氏は黙つたまゝ軽く頭を下げた。

「報道部長の羽田さんが、直々の御用事とは、いったい、何事でしょうか？それも、電話では話せないなんて？」社長は、キッと部長の眼をみつめて言った。

部長は、躊躇ちゅうちゆしていても仕方がない、何時かははっきり言わなきゃならん、部長も社長の眼をみつめてズバッ！と言つ

た。

「松井さん、実は昨日の朝刊であなたの写真入りで報道したグランプリの記事ですが、読者から大村太郎画伯の薔薇の絵とそっくりである、模写ではないかと言う抗議がありまして……(ここで社長の顔色が一変苦虫を潰す)……私は、こんな仕事をしておりますが、こと美術に関しては専門家ではありません。しかし、職務上、模写か否か？断定をしなければなりません。それで、作者である松井さんと大村画伯の貴重なご意見を伺い、それをもって私は断定しよう。そう考えてお邪魔した次第です。芸術作品と作者の心とは表裏一体と申します。ぜひ、松井さんの御意見、反論をお聞かせ願いたいのですが！」

社長は壁にかけてある自分の絵を眺めながら、部長の長い話を聞いていたが、大きい深呼吸をひとつして、

「私の、あの薔薇の絵を模写だなんて、とんでもない。そんなことは、絵というものを解らん奴等が言うことです。私は、去年その庭の薔薇を自分で選び、自分で剪定し、自分で生けて描いた。びつしり五日間かかった」こゝで社長はお茶を啜つた。亦話す。

「絵を描くものは、誰でも同じと思うが？完成までに必ず行き詰まる所に出交でわします。何度やっても上手くいかない、塗つても、削つても、引つ搔いても、そんな時、先人は如何やつて乗り切つただろう、画集を見ます。沢山の絵を見ます。

暗示をさがすのです。これは模写ではなく研究です」社長は、
こゝで再びお茶を啜つた。部長も、吉田も時々首肯うなずしながら、
ただ黙って聞いていた。突然社長は部長に切込んできた。

「ところで、部長さんは如何です？ 似ていると思いませんか？
模写だと思いませんか？」

部長は不意をつかれて一瞬言葉に詰つた。

「・・・実は抗議に來た読者の方が画集を見せてくれたので
すが総合的に見て、私は模写と断定しました。偶からすみま
であまりに酷ひど似しているのです。大村画伯の御意見も伺い処
置を考えている所です。」

二人は松井宅を辞した。

「吉田君、たまには外の空気ででも思つて、今日は同行して
貰つたんだが？ 少しは勉強になつたかね？」

「有難うございます、成りました！ それにしても松井さんの
話チンプンカンプン途中で眠くなりました。」「・・・それで如
何だね？ 松井さんの人柄は？」「芸術家という感じはしません
でした、やはり商売人という感じですね」「うむ！ 二足草鞋は
無理だ。まあ一寸の虫にも五分の芸術家魂と云う所かな！」

「私は、こう思います」「何と？」「泥棒にも三分ぶの理屈」

「ウフッ！ 君、それは一寸酷いよ、言うねえ」「それにしても
部長？ 今日の奥さん、顔色が悪くて、元氣なかつたですねえ

・・・」

「コーヒーでも飲まないか？」「そーねえ！」居間に戻るとす
ぐソファに横たわつた。塩を撒まきたい氣持、とにかく二人は
氣分の転換を図りたかつたのだ。「あなたつ！ 如何なるんまし
ようね！」「なーに、如何という事ないさ、なんとでも書きた
いように書きゃいい。僕は、はつきり心外だと言つてそれを
否定したんだ。それさえキチツと載つけて呉ればそれでい
い」「ええ、だけど里子ちゃんが心配ね！ 今朝もあんなに喜んで
燥はしゃいで登校したんだから、シヨックよ、きつと」「うむ！ 只
では済むまい、まあ僕が何とかするさ」ひと息入れて社長は
出社した。エンジンの音もなく、何時、車が出たのか晶子に
は分からなかつた。

里子は、遅く生まれた一人娘である。晶子が丁度、四十の
春に生まれた。二人で可愛がつて育てゝきた子だ。いま、十
七歳、私立女子校の三年生、子供の頃から絵が好きで美術部
の部長をしている。最近秋の全道高校美術展に出品する作
品の制作で、毎日帰りが遅い。里子は、この展覧会の上位入
選常連なのだ。里子の学校は、市内の中央部松陰町にある。
木立に囲まれ、緑濃い並木の奥に白亜の校舎がある。美術部
の部屋は二階の角にある。

午後の四時半、部室では数人の部員が熱心に絵をかいてい
る。この中に里子もいた。はやめに道具をまとめ帰り支度を

始めた。「あらっ！サット！もう帰るの？」「きつと家族。ハーティーよ？いいなあー」「ああ、そうそう。サットのパパ、グランプリ取ったって家のパパ言ってたわ、羨ましい！」皆も勝手に道具をしまい始めた。「お父さんが上手いんだもの、サットが上手いのもあったり前よねっ！」「昨日の新聞、見たっ！サットのパパ、クラークゲールとフランクシナトラ足して二で割った様な渋いナイスガイ立派な服着てさあ！」「うちの先生で、あんな凄い腕時計している人、一人もないわよねえ！」手に付いた絵の具を拭きながら、里子は言った。「皆見当違い、それに、私、パパの絵嫌いっ！・・さあ帰ろう、かえろう」窓を閉め、ドアに施錠して、部室の鍵を教務に届けた。通行人を上手にかわしながら、髪をなびかせ、スカートひざかぶせを翻え、湯川方面に急ぐ自転車ひざかぶせの女子高生それは松井家の一人娘、松井里子その人であった。

7

「あなた！あなたの勝ちよ！早くはやく！」照子が大形な身振りみぶりで叫んでいる。

忠は、愛犬ロンとの散歩を、今終えたところだ。それにしてもなんと大袈裟な、忠は思わず近所を窺うかがった。

「なんだい？如何したと言っんだ？」

「あなたっ！出てるのよ、あれが」「あれがつて。」

「今朝の新聞、あの絵はやっぱり模写なんだつて！さすがあぁ！あなたは凄いわねえ・・」

とにかく、忠は急いで居間に入る。照子があらかじめ見やすい様に新聞を広げて待っていた。さつと見た瞬間、忠は思った。こりゃあ、前より派手な見出しで記事も大きいぞ、似たような薔薇の絵が二つ並んで載っている。

忠は、ゆっくりと腰をおろし、引出しから老眼鏡を取り出した。

これは大きい！何ポイントというのだろう？縦十ミリ、横十五ミリ、十個の文字が直径五センチ程の円を背景に二列に並んで踊っている、(模写作品にグランプリ) その下に横書きで(ロンドンの展覧会) 又、その下に名刺大の薔薇の絵の写真が二枚、上には(松井さんのバラ)、下には(大村さんが五年前に制作したバラ。大村太郎画集から複写) その横に縦書きで、二十四ポイントの活字が並ぶ。

(函館の会社役員が受賞、大村画伯抗議・協会も撤回申請) 見出しだけでもこうである。忠は、記事を読み出した。

函館の湯川町の画家の油絵が、今年七月、ロンドンの国際展覧会でグランプリを受賞したが、「自分の作品集の絵に酷似している」と別の画家から指摘があり、この作品を展覧会に推薦した東京の美術団体が調査、「この絵は模写と認定される」として十六日、グランプリ撤回を主催者側に申し入れること

を決めた。

問題の作品は函館市湯川町在住の電気工事会社社長、松井章三さんの描いたバラの絵が、国際美術協会の推薦でロンドン国際展覧会に出品され、二百五十点余りの中からグランプリを受賞した。ところが受賞を報じた道南新報朝刊を読んだ画家、大村太郎さん（八十）が「この絵は、五年前、私が制作し昨年出版した画集の中にあるバラの絵にそっくりだ」として、同協会に連絡。同協会は二つの作品の写真を理事会で比較検討し「タッチなどすべての面でそっくりで、これは模写としか言いようがない」と結論、大至急ロンドンの展覧会主催者にグランプリ撤回を申し入れることになった。

これについて松井さんは「受賞作品は自分の庭のバラを描いた。模写と言われるなんてとんでもない。まったく心外だ！」と話している。

記事を読みおえた忠は、報道部長の羽田さんが約束をきっちり守ってくれた事が嬉しかった。「四、五日待ってくれ！私が黒白をはつきりつけます」と言っていた。今日は丁度五日目ではないか。

照子は、忠が真つ先に新聞社に出頭、あの重い画集を担いで原画の撮影に協力したのではないか！夫の名が新聞に出ていない事に不満を漏らしていた。

いっぽう、忠は、照子の急変に驚いていた。

「一銭にもならないから止めよ」と言っていた。「気が散るか

ら電話は止せ」とも言っていた。最後はあきれて自分を無視していたではないか。

しかし、忠は照子に問うことは一切しなかった。

退職後の日毎に迫る老化、老人大学に集う同年配の人々に比べ、活力や若さが感じられないこの俺に、まだ青年らしい何かを発見して喜んでいるのだろうか。

この単純さも、彼女の性のひとつだった。老人大学の女仲間、夫の自慢と、その名前を新聞紙上に見せたかったのだろう。

忠は、いまだ「心外だ！」と喋りつづけて、松井を、負け犬の遠吠えくらいにしか、思っていない。

奥さま始め家族の方々には、可成のショックだろう。

しかし、私が新聞社に駆け込まなくとも、誰かが気付いて通報するはずだ。

記事から察するに、現に大村画伯が新聞社に電話をしているではないか。俺は黒子で良いのだ。これでいっしょのだ！

教え子たちに申し開きが立てばそれで良いのだ。

函館の美術愛好家はそんなに甘くないことを、示すことが出来て忠は十分満足している。

外の犬小屋で愛犬ロンが吠え続ける。珍しい事だ。忠には、こゝろ聞こえた。

御主人、出かした良うやった！ワンと。
(終)

笑顔

畠田実里

まだ十二月だというのに、凍てつくような朝だった。白い息を吐きながら駅に向かった。

この春、小学校の教員になって、小樽で迎える初めての冬だ。函館行きの特急は、大晦日に間があるせいか空いていた。

おれには、行ってみたいところがあった。そこは中学を出てすぐ見習いに入った自動車整備工場で、嫌なことがあつてわずか三か月足らずで逃げ出したところだった。十二年も前のことなのに、ずっと心に引きずったままにいる。

指定席につくと、直ぐ近くで見なれた人が網棚に紙袋を上げるところだった。同じ学校に勤める山田先生だ。

「函館ですか」

声をかけると、ふり向いてにっこりした。ずっと前にもこの笑顔に会ったことがあるような気がした。

「たしか、中川先生は釧路からいらしたのですよね」

「教員になる前は釧路ですけど、出身は函館です。訛りあるでしょ」

驚いたのか微笑んでいる。どこで会ったのだろう。

「学校に同郷の仲間がいて心強いなあ。これからもよろしく

お願いします」

「こちらこそ。ぼくは、トシは食ってるけど、事務職でしたから。教員は新米で悩むことばかりで……」

「わたしも、毎日うまくいかなくて、悩んでばかりなんですよ」

しばらくして、函館着は間もなくというアナウンスが入った。

「まっすぐ、お家に帰るのですか」

山田先生が訊いた。

「寄るところがあるので……。確かデパートのある通りを、函館山の方に行くんです。歩いて、そんなにかからなかったと覚えています」

「それなら、わたしの家の方角ですから、近くまでご一緒してもいいですか」

山田先生はこう言って、笑っている。たしかにどこかで会ってる。

中学校を卒業すると、先生の紹介で自動車整備工場の見習いに入った。不安だった。ドモリで人と話もできないおれに、勤まるだろうか。

一緒に入った人は、高校卒業したばかりで、山科といった。背が高くがっしりした体格の人だった。職人は中年の村上さん、もう七十歳近くで、少し腰の曲がった吉村さんがいる。初めに言いつけられたことは、朝早く出て、仕事が始まる前に、工場の片づけや掃除をしておく。それに修理に入ってきた車を洗う。これが当面の仕事だった。

「これを着て。」渡されたのが帽子付きの雨合羽の上下だった。車はジャッキで背丈くらい上げられるけど、洗車は高压の噴射機を使うので、合羽の帽子をかぶっていても、上を向くので、泥水が顔にかかってくる。終わった時は、首から胸のあたりまでずぶぬれ状態になる。最初はおれと山科が交代で、ということだったが、年下なので次第におれがやることになった。

日がたつにつれて、

「サトシは山科より年下なのに、わかりが早いようだな」

「どこで、車のこと覚えてんだ」

なんて、職人に言われるようになった。

それというのは、おれは学校に行きたくない時は、ポンコツ屋の爺さんのところに行っていた。おかげで部品の名前もわからずは大体わかった。山科は、まだ車の部品の名前もわから

ないようだった。

おれがドモリで、言うことが苦手だとわかってくると、次第にからかわれるようになった。なかでも山科は、工具を隠したり、車の下にもぐって作業をしていて、足を踏まれたり蹴られたりした。初めは我慢してたけど、度々されると、おれのことを、恨んでいるような気さえしてきた。

「車のこと、おれより知ってるからって、いい気になるなよな」

こんな皮肉も言われた。反論できないのをいいことにして、平気で嫌味を言ったりした。

小学校や中学校で起ったことが、職場でもそっくり繰り返してくるような気がした。

整備工場の隣に牛乳屋がある。そこにおさげ髪の女の子がいた。

おれが朝早く行って、工場の掃除を始める頃には、自転車の前後に空の牛乳瓶を積んで、配達から帰ってくる。瓶のぶつかり合う音が、さわやかだった。その子が高校一年生だと聞いた。それなら、おれと同じ年だ。

工場の社長さん夫婦は、「みっちゃん、みっちゃん」と呼んでいた。でも、本当の名前は知らない。

「感心な子だよ。配達の仕事があるから、近くの高校に行くって。ほんとは、遠くにある高校に行きたかったって」

社長の奥さんが言っているのを耳にして、おれの心はさわ

ついた。それに比べて、おれは情けない。

初めは、挨拶もできなかった。慣れてくると、「おはよう」ぐらいは言うことができた。その子もにつこりして、挨拶を返してくれる。ただそれだけ……。

この家には、お母さんとお姉さんがいて、同じように配達をしている。父親がいないようだ。職人の吉村さんの言うには三、四年前に、父親は病気で亡くなったらしい。あの子は小学校の五年生頃から配達を手伝っているそうだ。

ある朝のこと。早く行って、片づけをしてから、道具箱を見たら六丁組のスパナがない。昨日の帰りにチェックした時は、確かにあった。なん日か前にもドライバーが無くなっていた。その時は、仕事が終わってから確かめておかなかったからだと思っていた。

スパナのことを、吉村さんに話した。

「支給されたもんだし、言ったらみんなに迷惑かけることになるから、買って補充しておけ」

それから、工具の売ってるところを聞いて、仕事が終わってから買いに行った。

その晩は、眠れなかった。きつと、あいつ（山科）が隠したに違いない。きつとそうだ。だんだん疑いが深くなって、寝返りばかりしているうちに、夜が明けてしまった。

朝、起きれなかった。体が動かない。自分の体でないような気がする。学校に行けなかった時と、そっくりだ。

母が二階に上がって来た。

「どうしたの。もう時間がないよ」

「休むの。行かないの。なにがあったの」

学校に行けなかった時のように、疑問符付きの連発だ。しばらく、こんなことがなかったから、母は慌てている。

なにを言われても、布団をかぶって動かなかった。

母は大きなため息をすると、下りて行った。工場に電話を入れているのが、聞こえた。こうなると、体全体が鋭い耳になってしまふ。

その晩に社長が来たけど、起きて行かなかった。母が何べんも謝っている声がする。子どもの頃のことまで、話してやるようだった。

「社長さんから、聞いたけど。なんか、あったんだって……」

母に聞かれたけど、布団をかぶっていた。

次の日も、やっぱりダメだった。

「行く気あるの、ないの。嫌なことあると、こうして逃げてばかりいたら、この先どうなるの」

なん度も聞かされてきた言葉だ。もう、耳にタコだ。結局、しばらく休むことになり、部屋で一日中テレビを見たり、ごろごろしていた。

つぎの日は、ますます落ち込んでいくのがわかった。

「もう、行きたくない……」

小さい声で言った。

「ほんとに、それでいいんだね」

母は、念押しした。

その後も、なん度か社長から、電話があったことは知っている。こうして、おれは初めての職場からも逃げてしまった。

あれは小学校五年生の給食時間だった。食べていると、後ろから背中をどつかれた。見ると修一がニヤニヤしてた。

「おめーは、学校に給食喰いにだけ、来てるのか」

どつと、教室に笑いが起こった。スプーンを持つ手が止まった。口に入ったシチュウも行き場を失っている。じつと耐えた。修一はいつだって、意地悪のスタートを切って、得意になっている。

「サトシは、給食、喰う口はあるのに、もの言う口はもつてねーもんなー」

「いいよなー、先生に当てられる心配もねーし、いいご身分だこと」

後ろで次々声が上がった。また、どつと笑いが起こった。限界だった。立ちあがって、ロッカーからランドセルを引っ張り出すと、一気に廊下に出た。

「サトシ、戻れ！」

後ろで先生の声をした。「クソツ喰らえー」心の中で叫んでいた。

気がついたら、校門を出ていた。ランドセルの肩掛けを、右手で掴んでいた。軽い。勉強道具は机の中だ。どうでもよかった。どうせ勉強なんかしないのだから。

道行く人の目が気になる。家に帰るわけにもいかない。隠れる場所を見つければ。前後左右を確かめてから、一気に道路脇の藪の中に入って行った。

奥に進むほど雑草の草丈が高い。持ってたランドセルを背負って、両手で掻き分けながら進んだ。しばらくして方向がわからなくなると立ち止まったけど、自動車の走る音が聞こえる方に進んだ。

目の前が明るくなってきたと思ったら、突然三台積み重なった、ボンコツ車にぶつかった。どの車も潰されて、泣きべそをかいている。今のおれみたいだ。

中に入る車がないかと、潰れていない車のドアの取っ手を引きながら進んだ。ようやく、ギイと音がして少し開いた車があった。足を踏ん張って力を入れる。体が入れるくらい開いた。ランドセルを下ろして放り込んで、潜り込んだ。少し埃っぽかったけど、最高の隠れ場所だ。

暑くて、ウインドウを下ろそうと、ハンドルに力を入れたら、ガラスが下りた。一気に涼しい空気が入ってきた。ここなら、雨が降っても大丈夫。いいところを見つけた。

ダッシュボードも開けたけど、なにもない。それから、ランドセルを枕にシートに横になった。

知らないうちに眠っていた。

こうして、学校に行かないときは、ここで過ごした。連続して学校を休むと、先生に家に来られたら、アウトくらいはわかっている。一日か二日おきぐらいに登校した。

ここに隠れるようになって、なん日かたったある日。窓をたたく音で目を覚ますと、つなぎを着て、片手にスパナを持った爺さんが立っていた。一瞬、体が固くなった。怒っているのが一目でわかる。眉間に深い皺があつて、怖そうに見える。恐るおそるドアを開けた。

「おまえ、ここで何してる。出る！」

「す、す、すみません」

「誰かいるような気配がしてたんだ。どれくらい前からここに來てる」

「……」

「だんまりか。困るんだな。こっちにこい」

後をついて行く。この爺さん、右足を引きずってる。走って逃げたら成功間違いない。そう思ったけど、どうしてか出来なかった。

きつと、学校や家に連絡される。歩きながら覚悟を決めた。怒られるのもう慣れっこになっている。体を固くすれば、怒りは通り過ぎる。

小さなプレハブの建物がある。入り口の上に「浦野自動車・中古部品販売」と、横書きの看板がある。建物へ通じる道は、

入ってきた反対側の車道に続いていてみたいだ。

中に入った。油のにおいが充満してむせるようだ。壁の棚に置かれた油で汚れた部品や、床に雑然と放置された部品から発するにおいだ。

奥の小さな部屋に入ると、そこは事務所になっている。窓側に机が置かれ、上には電話がある。それに伝票らしい紙が、雑然と置かれている。

爺さんは、部屋の隅から丸椅子を出してすすめた。座ると、益々緊張した。

ところが爺さん、怖い顔のわりに、あまり突っ込んでこない。うなだれて膝に置いた手を、じつと見つめていた。

「いまは、まだ学校にいる時間だろ。どんな事情があるのか、聞かない。車に隠れてるくらいだから、よっぽど嫌なことがあつたのだろう……」

ここまで言つて、黙つて見ている。下げた頭のとっぺんに視線を感じる。

「どうしても、足が学校に向かないときは、車に隠れてねーで、ここにくるか。そのかわり、このことは、家の人には言っておけ。それができねんだったら、お断りだ。こんど車に隠れているの見つけたら、すぐ110番だからな。火事でも起こされたら大変だ。ポンコツばかりでも、この爺には、宝の山なんだ」

厳しい口調で言つて立ち上がると、手で膝を押さえて力を

入れた。ギイと機械的な音がした。

そして、さっさと右足を引きずるように、部屋から出て行った。どういうのか、おれは後をついて行つた。爺さんは、首だけふり向いた。

「まだ、いるのか」

こつくりした。

「おかしなやつだな」

爺さんの顔がちよつと崩れた。

ジャッキで上げられた車のそばに行くと、仰向けになつて、そのまま車の下に頭から潜つた。側でしゃがんで見ていた。爺さんは、ときどき車の下から、おれを覗いているのがわかつた。

「スパナを取つてくれないか。それにハンマーも」

工具の名前がピンとこない。もたもたした。

「右の足の辺りにあるだろ」

爺さんは、外した部品を片手に、後ずさつて出て来た。そして、側にあつたぼろきれで、丁寧に拭いて見ている。「よしつ」と、気合を入れるように立ち上がると、また、膝に手を当てて、力を入れた。やつぱりギイと鳴つた。

事務室に戻ると、油のついた手で、冷蔵庫からジュースの瓶を取り出して、コップについだ。

「こんなものよりなくてな」

オレンジジュースだつた。

しばらくぶりに、ちよつとだけ他人にあてにされたようで、元気が出た。

夏休み、ほとんど爺さんのところに通つた。すつかり自動車に興味を持つてしまった。そして「自動車のしくみ」という自由研究をやつた。写真までつけて、模造紙四枚にまとめた。おれにしては初めての大作だつた。

みんなも先生もびつくりしていた。

部屋にこもつて、もう二週間はたつている。整備工場から逃げて、部屋でごろごろして、ポンコツ屋の爺さんのことを思い出した。

そう言えば中学三年になってからは一度も行っていない。と言うのは、このままなら高校にも行けない、と母さんに泣かれて心が痛んだ。それで学校は休まないようにした。小学校五年生の夏休みに、爺さんに教えてもらいなからやつた自由研究を思い出したら、急に会いたくなつて、家を出た。

しばらくぶりに外に出た。太陽がまぶしかった。

爺さんは相変わらず、車の下に潜っていた。足の近くに黙つてしゃがんでいた。ようやく爺さんが上向きに出てきた。

「だれかと思つたらサトシじゃねーか。ちよつと、一服しようと思つてたところだ」

こつ言つて笑つた。立ち上がると、右の膝を押した。やつぱり、ギイと鳴つた。懐かしい音だ。しばらくぶりに見る爺

さん、少し皺がふえたみたい。

事務室に入った。

「しばらくだな。青白い顔して、元気がねーようだけど」

黙っていた。

「いまなにしてるんだ」

頭を横に振った。

「顔を見ないから、うまくやってるんだとばかり思ってたんだぞ」

涙が出そうになった。

「まあ、いい。それで、高校には行ってるんだろ？」

答えられなかった。

「じゃ、就職か？」

なにも言えなかった。

「そういうわけに、いかねーだろ。それで、今、なにしてるんだい……。言いたくねーのか……。また、ここにくるかい。

ちよつど、手が欲しかったんだ。ちよつとくれーなら、手当

も出してやれるぞ。遊んでるより、いいべ」

ほつとしたら、涙がぼろぼろ落ちた。

「泣くな。もう聞かぬー。明日からでもいいぞ。それから、

家の人には、必ず言うんだぞ。恨まれても嫌だからな」

こっくりした。早速、壁にかかっていたつなぎを取った。

「おいおい、いまから始めなくていいぞ」

爺さんは笑った。つなぎは、前に着たときは大きくて腕ま

くりしたのに。今じゃちよつどいいくらいだ。

ここで爺さんに車の解体と整備を教えてもらうことにした。

ようやく居場所が見つかったような気がした。

一週間ほどたつて、父と母が爺さんのところに挨拶に来て

くれた。きつと、見習いに入って、逃げてたことも言ったに

違いない。

あつという間に、一年たつた。

解体なので、自動車の構造は隅々までわかつたし、まだ部品の使えそうなものは、買われていつて、また命を与えられる。

自動車としてまだ使えそうなものは、部品を取りかえて車検を受け、中古車として売れることもできた。

「鉄くずとして処分するよりも、こつちの方がずっと実入りがいいんだ」。

これが爺さんの口癖だ。

ポンコツ自動車を生き返らせることで、おれも、生き返させてもらっているような気がした。

ある日の昼休み、爺さんが真面目な顔で言った。

「おめー、高校に行かなくていいのが。おれには、おまえがホントに勉強ぎれーだと、思えねーけどな。これからは、なにをするにしても、高校ぐれーは出ておかねーと……。人生

は、長げーぞ」

黙って聞いていた。父母からも同じようなことを、なん度も言われた。その時は、聞き入れる余裕すらなかった。かえって、むしろくしゃりするだけだった。爺さんの言うことは素直に聞けた。

「高校は毎日行かなくても、いいのがあるみてーだぞ。前に勤めていたとこで、若いのがやってた。月に一度か二度、近くの高校に行つて、後は自分で勉強するつて。そいつ、四年かかって卒業してしまった。親の腰かじつてやる勉強よりも、ずっと値打ちあるんじゃないかねーか。やる気があつたら、聞いてやつてもいいぞ」

爺さんのこの言葉がきつかけで、高校の勉強をすることにした。中学の勉強もろくにしてないやつに、高校の勉強がわかるだろうか。

「若けーんだから、今のうちにやるさ」

あんなに嫌つてた勉強も、目標ができただけで、なんだかやる気が出てきた。運転免許の交通法規も、自動車整備も初めからの勉強で、そう苦にはならないが、厄介なのは高校の数学だ。なにせ、中学校、いや小学校の勉強からやり直さなくてはならない。

どの勉強もいっぺんにやることは、できないと思つていた。ところが、交通法規の本を読んで疲れたら、次は高校の教科書に切り替えたり、自動車の整備の勉強にとりかかる。する

と疲れが取れるような気がするし、能率もいい。

苦手の数学も、難問をいつも気にかけてると、風呂に入つてるときとか、トイレに入つてるときなど、とんでもない時に、ふつと解き方が頭に浮かんでくる時だつてある。こんなこと、考えてもみなかったことだった。

勉強を始めて二年も過ぎたころだった。

「おめー、この頃顔つき、変わったな。恋人でもできたんかい」

なんて爺さんからかわれた。このごろは、朝から気分がよくて、いつもなんかいいことがありそうな、そんな気さえてしている。

爺さんのとこに来て、これまでのおれではないような気がしている。十八歳になつてすぐ、自動車学校の夜間に通つて、運転免許を取つた。

「どら、免許証見せる」

爺さんに、渡す。

「おーお、いい男に写つてるじゃねーか。これから、小屋の横にあるグレイの軽四輪、明日から通勤に使つていいぞ」

「ホントにいいんですか」

「一生懸命やってくれてんだから、こんなこともあつていいべ。初めて運転するには、あれはうつてつけど。事故、気つけてな」

と、笑っている。

数日たった、暑い日だった。水が飲みたくて、事務室のドアを開けたら、パンツ一丁の爺さんがいた。アツと声を上げてしまった。爺さんは義足を外してタオルで体を拭いているところだった。

慌ててドアを閉めようとしたら、

「逃げなくていいぞー。おめーのためにも、話しておかねーとな」

と笑っている。

見ると右足の膝の上あたりから下はない。机には義足と、

ベルトが上がっている。

「びつくりしたべ。これ」

パンパンと二回、足のない方の脛を叩いた。

「若えーとき、修理してたトラックの下敷きになってな。膝から下が粉々になってしまった」

言いながら、義足のベルトを肩から掛けている。

「車をジャッキで上げたときは、必ず丈夫な台を下に当てておけ。なにが起きるかわかんねーからな」

そう言えば、爺さんは車の下に潜るとき、必ず下に台を置いている。前にも言われたことがあるので、やってはいたが時々忘れてる。

寒くなつてから、爺さんの出勤が遅くなることがある。嫌

つていた病院に朝、寄ってからくるのだ。血圧が高く、糖尿病も進んでるらしい。

月日のたつのは早いもので、おれはこの三月、ようやく高校を卒業するめどが立った。それに四月がくると二十三歳になる。

「おまえが高校卒業するまで、倒れていられねーと思つてたんだが、医者が年だし無理したらもたねーって言うんだ。ここを閉めようと思つてる。おまえは、実力もあるんだし、もうこんな爺の相手なんかしていなくていいべ」

ポンコツ屋をやめることに決まると、おれの仕事探しが始まった。自動車の整備の仕事をするにしても、お客さんに接する仕事は、苦手なので絶対避けたい。

そうしている矢先、朝行くと爺さんが新聞を机の上にあげて、待つていた。

「これ、どうかと思つて」

新聞の広告を指さした。

「ここなら、整備しても金をとらねーから、会う人も限られる。しゃべるのが苦手でも、大丈夫だろう」

見ると、自動車学校の整備工場だった。

「パンクを直すとか、エンジンのかかりをよくするとか、簡単な整備が多いと思うよ。考えてみる」

その晩、さっそくコンビニに行つて、履歴書用紙を買つて

きた。三月に通信制高校卒業見込みのことや、運転免許に整備士の資格も書いた。

母に見せた。仕事から帰ってきた父にも見てもらった。

「どうなるものかと、心配してたけど、お爺さんのおかげで、恰好ついたじゃないか」

出勤した爺さんにも見せた。

「これなら、ほかの人と比べられても見劣りしねーな。たいしたもんだ」

こう言つて、笑つた。

履歴書には、子供の頃からドモリで、他人と話すのは苦手なことも、正直に書いた。

面接の時、五、六人はいた。みんなおれより年上のように、見込みはないと思つていたら、採用になつた。

今度は嫌なことがあつても逃げない。そう決心していたが、不安だつた。工場には、整備主任の五十歳代で人の好きさうなおじさんがいる。三浦さんと言つた。体調が悪いのか顔色がよくない。昼食が終わると必ずなん種類も菓を飲んでいた。最初の日、三浦さんから、大体の仕事の内容を聞いた。練習コースを走る車の整備で、公道を走らなくてはならない車は、街の修理工場にもつて行くということだ。特に難しいようなことはないようだ。

他人と話すのが苦手な、おれにはうつつけの仕事で、自

分に合つた職場に入れたと喜んだ。

三か月ほどたつた。校長が来てくれと言つているという。呼ばれるのは、勤めてから初めてなのでドキドキした。

「来月から、夜間の『運転教習』と『構造の講義』を、やつてもらいたい。ローテーションは、教務の方で決めるので、忙しくなるけど、やつてくれますね」

もう、決まつているという言い方で、慌てた。

「ぼ、ぼくは、人に教えるなんて、とても出来そうにありません」

「教習は運転免許を持つてるんだから、心配ないよ。それに構造の講義は、整備士の資格だつてあるんだから、君にはびつたりだと思ふよ。苦手と言つたつて、やつてみなくちゃわからない。そう決めつけないで、挑戦するつもりで、いいね。整備主任にやつてもらつていたんだが、体調が悪いようですね。なにことも経験だと思つて、やつてくれ」

「ぼ、ぼくは子供の時から……」

できないと、必死に訴えた。校長は、びっくりしたようであつた。

「やつてみて、それでもダメなら考えましよう」

こう言われて、工場にもどつた。納得したわけではなかつたし、これなら、ここも辞めなければならぬ……。こんな思いが頭をよぎつた。

戻ると、主任に聞かれた。

「なんの話だった」

「や、夜間の教習と構造の講義をして、と言われました。でも、出来ないかと断つても、そうはいかないようなことでした」

「やつぱり。わたしのこと、言わなかったかい。迷惑かけて申し訳ないけど。構造の講義は、君よりいいんだよ。わたしからも頼む、この通りだ」

深々と頭を下げられた。なんにも言えなかった。

こんなはずではなかった。主任は、おれの様子でわかるらしく、

「構造の講義となるとだれでもできないからね。君は整備士の資格があるから、講義の内容は心配ないけど。話すのが苦手と言うのは、なんとも……」

なんだか、主任のことを考えると、断ることも辞めることも、できそうになかった。ここに入るとき、嫌なことがあつても逃げないと、決めていたことを思い出した。

それから、使用する構造のテキストを調べたり、教室にある自動車の模型や、掛け軸なども当たってみた。なんとなく出来そうな気がしてきた。

でも、初めてのことで、大勢の人の前に出たら、緊張でことはがなくなってしまうかも知れない。どうしたらいい……。

ところが、目前になって「大きく息を吸って、ゆっくり」

と言う、小学校三年生の時、松田先生にしつこく言われた言葉を思い出した。

初めての講義の日が来た。破れかぶれ、と言う気持ちがあったわけではない。「大きく息を吸って、ゆっくり」

始めのひと声が出てしまうと、意外にも楽だった。不思議にもドモって困ることもなく、できてしまったのだ。

それ以来、松田先生のこと、いつときも頭から離れなくなつてしまった。

高校の勉強を始めて、そろそろ四年になる。最後の科目試験が終わった。

担当の先生に訊かれた。

「君は、随分頑張ったけど、なりたい仕事でもあるの？」

「……できたら、小学校の教員になりたいと思つています。」

大学も通信教育でなれるものでしょうか」

躊躇いながら言つてしまつて、自分でもびつくりした。

「大学を卒業したらなれますよ。卒業するには一年間のうち、四十日スクーリングに出なくちゃならないからね。いまの職場、そんなに休み取れますか」

おれは頭を横に振つた。先生は、ちよつと何か考えているようだった。

「そうだ、学校の事務職員になればいい。夏休みもあるから、スクーリングに出られる。たしか、近々中級試験があつたは

ずだな……。ちよつと時間を下さい。調べてみるから」

学校の事務職といい、中級試験といい、これは見込みがない。

「中級というと、受験資格は短大卒ですね」

「それは問題ない。君は今いくつですか」

「二十三歳です」

「学歴に関係なく、二十歳以上だと資格あるから」

こう言つて、話は終わった。

数日して先生から電話があつて、受験申込みをした。なんの準備もない受験となつた。

まぐれで合格だつた。役所から、釧路の中学校への採用通知がきた。

職場の上司に猛反対された。収入は自動車学校の時に比べて、半分以下になる。

「ここで十分生活できるのだから、これから苦労することはない。それに、卒業まで最低で四年はかかるんだろ。教員になれる保証もない。そんなところに、喜んで出してやるわけにはいかない」

父にも反対された。

「せつかく落ち着いたのに。もう、いい加減にしたら」

母は特に反対らしいことは言われなかったけど、納得している顔ではなかった。

無理もない。このおれだって、ついこの前まで、教員になるうなんて、考えてもいなかったのだから。

子どもの頃から、学校が大っ嫌いで、勉強なんてやらなかったし、学校も休んでばかりいた。そのうえドモリでろくに人と話をしたことがない人が、どうして教員なんかに。と思うのもわかる。

年齢のことも考えたら、心配するに決まっている。これまで、嫌なことがあると逃げてばかりいたが、反対されればされるほど、決心は強くなつていくような気がした。

ここでも逃げたら、一生「あの時、やつておけば……」なんて、うじうじして人生を送るわけには行かない。何があんでもやりたいものを、ようやく見つけたのだ。小学校時代に出会つた、先生のような生き方をしたい。

ところが、周囲の反対を押し切つて事務職になつたが、収入が少なく下宿代を払つて、大学の学費、それに単位習得試験を受けに行く旅費などを考えると、それだけで苦しいものだった。その上、スクーリングに行く旅費や生活費など、とても間に合いそうもない。希望に燃えてなつた仕事だけど、どれだけかかるか考えておくべきだった。今となつては、遅すぎる。甘かつた。

反対を押し切つて決断したことだ。いまさら親に泣きつくこともできないと思つたものの、どうすることもできない。悩んだ末、節約しても足りない分は、父に貸してもらおうと

思つて、頼んでみた。

「みんなが反対したのも、やつとわかつたようだな。いまさら止めるとも言えない。おまえは高校にも行かなかつたし、大学も普通より金がかからないようだから、仕方がない出してやるよ」

こう言つてくれた。

あれは、小学校三年生の時だった。担任が変わつて間もなかつた。ひげが濃くて怖そうな顔をしていた。

「今度の先生、おつかねーぞ」

みんなはおれの顔を見て、こんなこと言つて、喜んでる。

おれは、いつも何か先生に言われそうで、びくびくしていた。それで、さよならしたら急いで教室を出ようと構えていた。

「サトシ君、ちよつと用事あるから残つて」

「先生、あいつすぐ、逃げるんだ」

おせっかいな奴が言っている。

「逃がさないぞ」

先生の目もこう言つて笑っているみたい。意地悪なみんなも、おれが困るのを見てうれしそうだ。

腹積もりは出来ていた。さよならをするかしないうちに、突っ走るしかない。

ところが、入り口に近いやつが邪魔しようとしてるんだ。

「逃がさないと言つたら」

腕をがにと捕まれた。笑っている。手がゆるんだすきに、ふり切つて玄関に向かつて突進した。靴をつっかけて、外に出た。

「おーい、待たんかー」

声を追っかけて来た。

「こらー、まてー」

歩いてる子どもたちは、見て笑っている。

運悪く靴が片方脱げて、もたついているうちに、捉まつてしまった。首根っこを後ろから、がにと掴んで、力を入れてくる。

「痛でで」

「もつと痛くしてやろうか。いやなら、大人しくしろ」

とうとう、教室に連れて行かれた。掃除で残つたやつらは、手を止めて笑う。先生は椅子を引き寄せて、座れと目で合図をする。おれは突つ立ったまままだ。そしたら、両肩に手を当てる、押し込むように座らせられた。

「いいか、これからすることは、みんな君の為なんだから、素直に言うことを聞きなさい」

と、言つておいてから、

「早く掃除を済ませて、帰りなさい」

みんなは、これ幸いと急いで掃除をすませると、さつさと帰つて行つた。

「いいか、腹に大きく息を吸って、ゆっくり吐く」

やる気がしない。でも、なん度も言われて仕方なく、いうことを聞いた。

だんだん慣れてきた。

「いいぞ。その調子。なん回も」

こうして、繰り返しやると、

「今度は息を吸ったら、ゆっくり声を出しなさい。はい、息を吸って、アーと出す」

アー。

なんだか、つかかからなくて、声が楽に出た。それからなん度もやってから。

「体を楽にして。息を吸ってから、声を出すといいようだね」

先生は、怖い顔をくしゃくしゃにして笑った。

それから、机の上にあったプリントを出した。

「声を出して読んでみて。さっきのように体を楽にして、息を吸ってから声を出す」

「海は、広いな大きいな……」

「読めたじゃないか」

「ここまで、もう一度」

同じように読めた。嘘みたいだった。

それから、先生がオルガンを弾いて、歌をうたわせた。前から、ドモっていても、歌をうたうのは何ともなかった。

海の歌の外に、「ふるさと」も歌った。

「今日はここまで。帰ったら、国語の本を読んでみなさい。読む時は言われたことを守って」

家でもなん回も練習をした。思っていたより声が出た。でも、話すときには、いっこうに良くならなかったし、どうしても緊張してしまっ。

なん日かすると、また放課後残れと言われた。今度は、逃げるのができなかった。周りのやつらは、

「おまえが素直になったら、つまんねーよな」と、笑っている。

今日も声を出す練習かと思っていたら、二回くらい声を出す練習をしてから、足し算のプリントを出した。

「これやってみなさい」

見ると、一年生のやるような足し算が十個書いてある。「止め」と言われるまで、たった六個よりできなかった。先生は目をまん丸にして、しばらくなんにも言わない。きっと、三年生にもなって……。と、思ったに違いない。恥ずかしかった。学校に来て、こんな気持ちになったこと初めてだった。

「すぐ、できるようになるからな」

ホントだろうか。ほかの先生にも、やらされたけど、さっぱり出来るようにならなかったのに。

先生は、両手を出させた。なにをするのかと思ったら、両手をパチンと合わせて、

「5と5で、いくつだ」。すぐ「10」と答えた。

「これができたら、足し算なんかすぐできるんだぞ」

次に、「1から、4までの足し算」を、紙いっぱい書いたのを出した。

「ゆつくりじゃ、ダメ。なるべく早く。いいな。始め！」

どれも、答えがすぐに書けた。嘘みたいだった。

それから、「5と1では」「5と4では」など、5から9まで何度も答えさせた。

今度は「6」から、「9」までを、「5といくつ」分けさせた。「7は5と2」「9は5と4」などだった。どれも簡単だった。

直ぐに答えられてうれしかった。

それから、繰り上がりのある足し算になった。「7+6」なら、「7は5と2、6は5と1」分け、「5と5」で「10」、残りの「1と2で3」というふうに。不思議だった。これなら、指を数えなくてもできる。一年生の時、両手の指をみんな使って、それでも足りなくて、足の指まで数えて、先生に笑われ、みんなにバカにされた。

今度のやり方は、おれでも、パッと答えが出せた。魔法でもかけられたみたいだ。なんだか、数を壊して組み立てて答えを出すので、遊んでみたいだ。

同じプリントを何枚もらって帰った。

夕飯の後やってたら、母さんがびっくりしていた。

「おまえが勉強するなんて。明日どんな天気になるか楽しみ

だな」だって。

でも、問題は、引き算だ。引き算は前からまるでダメだった。

いざ、始めると。思ったより早くできるようになった。

「足し算ができないと、引き算はできないんだ」

先生は言ったけど、その意味がわからない。でも、やる気が出て来た。まだ、うまくしゃべれないけど、計算だけはすごいスピードでできるようになった。

九年間の学校の中でも、松田先生の時が、一番よかった。先生は、おれが答えられないとわかっていても、話しかけて来たし、面倒見もよかった。

不思議なことに、先生が受け持ちになってから、みんなにからかわれたり、バカにされることは、少なくなった。学校も殆ど休むこともなかった。

この出会いがなかったら、教員になろうなんて思わなかっただろう。

おれは山田先生と歩きながら、整備工場の見習いに入った時の記憶を、呼び起こしていた。街並みも懐かしかった。工場はまだあるだろうか。朝早く牛乳配達をしていたあの子のお家はあるのだろうか。これといって言葉を交わしたことはなかったのに、牛乳瓶の音と共に心に甦ってきた。

「あのころ、工場の隣りに牛乳屋さんがあって、その隣に金

物屋さんがあったのは覚えています」

「ここまで言うと、山田先生はなにかを思い出しそうな顔をしていました。」

「それは、先生がいくつぐらいの時ですか」

「中学を出て、すぐです」

「ここまで言うと、山田先生はそっぽを向いて、なんにも言わなくなってしまうた。二人ともしばらく黙って歩いた。」

「もう近いですね」

おれが言った。

ところが、工場はない。代わりに、「法律事務所」という看板がかかった、三階建ての立派な建物があった。隣りに目を移した。

「あつた、牛乳屋さん。その隣に、金物屋さんもある。ありがとう。一緒に来てくれて。今度は、お家の近くまで、わたしが送りましょう」

その時だった。牛乳屋の戸が開いて、女の人が二つ重ねの牛乳のケースを両手で抱えて出て来た。空き瓶の触れ合う音がした。懐かしい音。

「お姉ちゃん、たぐいまー」

女の人がふり向いた。

「えっ!」

おれはびつくりして、声を上げていた。

「あ、お帰りー。こちらさんは」

「若いとき、隣りにあつた工場で働いてたんだつて」

お姉さんは、わたしの顔を見ている。確かに、あの時のお姉さんだ。

「そうだったの。わたしまた、あんたが彼氏を連れてきたと思つて、びつくり……」

「いやだあー。中川先生に失礼よ、ねー」

先生は、笑つておれの顔を見た。

「折角だから、入つてお茶でもどうですか」

お姉さんが言った。

「母が待つていますから。それじゃ、ここで」

丁寧にお辞儀をしてから、向きを変えた。

五、六歩歩いて振り返ると、お姉さんが深々と頭を下げている。その横で山田先生は笑顔で手をふつている。おれもつられて手を挙げた。

たしかに、あの笑顔だった。――終わり――

お客様は神様です

日 高 光

「すみません。宅急便です」

ドアベルを何回鳴らしても、うんともすんとも言わない。片山圭太は、段々精神が崩壊していくのを防ぐことができなかった。ここはアパートの四階。安い公団住宅なのでエレベーターもない中、圭太は息を切らせてこの重たい荷物を運んできた。恐らくビールの詰め合わせか。しかも二つ分はある。重量にすると二〇キロは越すだろう。

(何で居ねえんだ。時間指定してんだろ。ありえねえし)

紙には夜の六時から七時と書いてある。今は六時三十五分。それなのに何で居ねえんだ。

圭太の気持ちが荒んでいく。どんどん砂漠の上を歩くキャラバン隊のような気持ちになっていく。前に進むのがあまりに遅いのだ。

今日このケースは十五件目だった。何で居ないの。居ないんだつたら責任とれよ。

圭太はとっさにその重い荷物を持ち上げて体ごと半回転回し、四階からぶん投げようとした。しかしもう一人の片山圭太がその手を放すのを必死に止め、荷物は一回転して足元に

音を立てて着地した。

手を離れたら、すべてを、自分の人生すべてを失うところだった。

圭太は最近、荷物をぶん投げて現実から脱走する夢を見る。そして現実世界で頭の眉毛のあたりまでそのイラつきが上がってくるのを感じていた。それが頭頂部まで達したら、恐らく物はすべてぶん投げられていたのだろう。

便利な国だった。

なにしろお客様は神様の国だ。すべてがお客さまのためにこの国は動いている。

宅急便は時間指定され、しかも安い値段で素早く配送される。物が壊れていることもないし、届かないということもない。あくまで完璧に仕事は行われるのが、この日本国なのだ。

そしてその業務を遂行するのは、忠犬ハチ公軍団だ。一糸乱れず同じユニフォームを身にまとってきびきび動く。そこには疲れという言葉はない。

とにかく自主的奴隷だ。恐ろしいほどの忠誠心、責任感。しかし報酬は最低に近い。

プライドは高い。例えば清掃業務だって、新幹線レベルになると神業として世界が注目し、恐ろしいスピードで仕事をごく普通にやり遂げる。しかし報酬は低い。

圭太も最初は仕事が楽しかった。宅急便を受け取った人の嬉しい気持ち伝わってくると、頑張ってたと思えてたのだ。物を貰って嬉しくない人はいない。必ず自然に表情は緩むのだった。テレビの宣伝も大きかった。宅急便屋がまるで幸せを運ぶキューピットのような扱いで持ち上げてくれた。だから仕事に対しては大きなプライドを持つことができたのだ。

しかし現実には厳しい。何月何日何時と指定しての配達や翌朝一〇時までの配達制度の導入によって、働かされる労働者の仕事は強烈に厳しくなっていた。

圭太は朝八時から夜の十一時まで働くはめになり、しかも残業手当はまったく出なかった。それでもまだスムーズに配達が終わればまだいいが、消費者の無責任により時間指定をしているにも関わらず居ないという最悪の状況が沢山生まれていた。

やってらんねえ

これは運送業者共通の不満だった。

沢山の仲間が辞めていっていた。やはりどう見ても割に合わないのだ。体はぼろぼろになる。精神も破壊される。給料は安く、いつも交通事故の心配でやきもきしなければならな

い。

時々、圭太は海が見える浜に行ってぼんやりとその風景を眺めていた。三〇分も空を見てると、気が収まる。しかし三〇分もぼんやりしなければストレスは鎮まることがなかったのだ。

圭太は遠い日の自分を思い出していた。

走っている。廊下を全力疾走だ。軽快な脚。教室の並ぶ横の廊下を全国大会レベルの健脚が走りぬける。筋肉が躍動する。バネの塊が全力で運動する絵は壮観だ。

ゴー！

監督が声を出す。監督はこの学校出身で、高三のインターハイで全国優勝しているツワモノだ。なんとかこの後輩から全国優勝を出そうと必死だ。日曜もお盆も正月もない。一年三六五日、厳しい部活動は続くのだ。春から秋までは市の競技場。雪の降る冬場は学校の廊下。生徒は特待生が多く、全国に行くためにこの学校の陸上部を選ぶのだ。

腕が振れている。顔が引き締まって体全体で空気を引き裂くように進む。

二時間交代交代で走り続けると、生徒の息は荒れ、肩が大きく波を打つ。もう何本ダッシュをしたことだろう。全力疾走は夏も冬もないのだ。

圭太は毎日疑いもなく走る。中学の時は全道で予選落ちレ

ベル程度だったが、この学校に来て飛躍的にタイムが伸び、全国は毎回行けるようになった。つまり全道の決勝に残り、全国に行ける力がついたということだ。しかし全国大会では予選落ちだった。上には上がある。物凄く頑張ったつもりだったが、全国優勝はやはり無理だった。

部活は苦しかったが、目標があった。希望に燃え、つらい練習もまったく苦にならなかった。そして底知れぬスタミナがついていったのだ。

しかし陸上の成績と反比例して学業の方は段々下がっていった。文武両道と先生は簡単に言うが、それはまったく簡単ではなかった。

まず家に帰ると九時近かった。そうになると飯を食い、風呂に入るともうボタンキューだった。どう頑張っても勉強のべの字も頭に浮かばない。せいぜいゲームをやるくらいで、一〇時過ぎには寝てしまっていたのだ。

受験校の運動部員なら、そこで根性を出すのだろうか、元来勉強嫌いな圭太だ。無理と言うものだった。そして遅刻なく学校に行くが、授業が眠くしょうがない。疲れと元から勉強嫌いで大体授業中は夢の中だった。

「かーたーやーま」

数学の先生が耳元で大声を出して起こす。寝ている時に起こされるのは、実は快感だ。昔はよく拳骨を食らったが、数年前から体罰厳禁となつてそれはない。だから余計ぐつすり

眠る生徒は増えたのだ。

圭太にとって、授業とはいったい何だったのだろう。体育以外彼が興味を示したのは、きれいな女の先生が教える英会話だけだった。英会話はみんな起きていた。

「へロー。エブリバデイ。ハウアユウ」

大学出たての可愛い先生は、この学校のアイドルだ。みんな起きて、からかう。ちょっかいを掛けることでみんな起きている。

それ以外は、死んでいると言つても過言ではない。

だから圭太は部活を八月で引退したあと、生きる生き甲斐を失った。本当は自分の人生設計を始めなければいけないのに、そんなことは湧から考えていないので、まったく困ってしまったのだ。

「片山、お前どうするつもりだ？」

担任が放課後残して個人面談だ。

「どっか陸上できる大学ないですか。家がお金がないので、特待生しか無理なんですけど」

「うーん。顧問に相談したのか。お前の陸上の戦績は微妙だよなあ」

「全国は行けるんですが、予選で敗退ばかりです」

「それで特待生の推薦取れるんか？」

「厳しいみたいです」

「一般受験じゃ、入らないだろうしなあ。評定二・五しかない

いしな」

「二・五じゃ厳しいですか」

「厳しいよ。就職も厳しいしなあ。大学はもつと厳しいなあ」

圭太の顔は曇った。これだけ部活で頑張った結果がこれか。何のために自分は毎日苦しい練習に打ち込んだのだろう。

三年の秋くらい荒れた季節はなかった。今までの従順な片山圭太はどこに行つたのか。周りが次々と進路を決めていく中、取り残される不安。圭太は初めて反抗した。

「片山、起きろ！」

圭太は背中全体で無視する。さすがに揺らされるが梃でも起きようとしない。完全にぐれてるのだ。世の中にけつつを向けて生きているのが態度でありありだ。

耳元で大声を出すと、物凄く不快な顔をしてゆつくりと起きる。態度がでかすぎる。

圭太は完全に学校のお荷物になっていた。

担任が放課後残して注意だ。

「片山、お前評判悪いぞ。どうしたんだ最近」

（俺の気持ちも分からねえのか。俺は自棄になつてるんだ）

「お前さあ。成績が悪いのは自分が悪いんだから、自棄になんよ」

（分かつてるさ。分かつてるけど、結局俺は何のために走つてはつかりいたんだ。監督の名誉のためか）

奴隷のような関係だった。顧問は絶対的な存在で、江戸時代の主従関係に近い。そして必死に頑張ってきたのだ。

十二月だった。圭太の母親が知り合いの伝手でガソリンスタンドの話を持ってきた。

「スタンドか」

圭太はつぶやく。正直、乗り気じゃなかった。車の点検はいいが、ガソリン入れて何が面白い。朝から晩まで外に居て、夏は暑いし、冬はくそ寒い。卒業して一〇か月、真冬のあまりの寒さについていへこたれてしまったのだ。

「店長、今日風邪ひきました」

「バカ野郎、少しくらいなんだ。風邪と腹痛は病気のうちに入らん。早く来い」

しぶしぶ店に行くくと、猛吹雪の中店長が一人、奮闘している。背中が怒って、爆発しそうだ。圭太を見つけると早くせい、と一喝、圭太はつなぎのユニフォームに着替えて仕事に加わる。もう現場には風雪だけじゃない冷たい雰囲気が横たわっていた。

車の列は途切れない。周りは目を開けられないくらい雪粒が舞っている。

（ひでえ天気だ。やってらんねえ）

店長は怒って事務所に入ってしまった。遅刻したお前ひとりで責任とれという態度だ。

その一人労働は、三時間続いた。車の列が全く途切れない

のだ。店長が事務所の中で、煙草をふかしながら馴染みのお客と大笑いしているのが見える。車の列は途切れない。眉毛が凍り、雪がこびりついて真っ白だ。気合だけで凍える外で動いていた。

はい、こっちに入ってください。

今テツシユが当たりますよ。

三〇リッターで三六〇〇円です。あ、洗車もやりますか。

全身から声を張り上げて圭太は寒さに耐える。店長は時々外を見て、寒そうだなあみたいな呑気な顔をつくる。悲壯感漂う圭太と目が合うが、まったく無視だ。

圭太の頭の中で、小さな爆発が起こっていた。海底火山の爆発のように、ふつふつと。

心の奥底にある、危険な性質の導火線に火が点けられようとしていた。

「おい、早くしてくれ！」

激しい口調の中年男の叫びに、火は点いてしまった。圭太は、むっとした表情でその客に言った。

「順番なんだから仕方ねえだろ！」

客は眉をひそめ、眼に力を込めた。客になんて態度だ、という顔だ。お客様は神様じゃねえのか。なんだ、オメエ、とその尖った眼が言っている。

そしてその客は車を降りて事務所に入った。店長がその客にひたすら頭を下げているのが見える。圭太は理解した。今

どういう状況に陥ってしまったかを。

店長が事務所から走るように飛び出てきて、圭太の首根っこを掴んで引つ張った。その力から本気で怒っていることがわかった。圭太は事務所まで引つ張られて、深々と頭を下げさせられたのだ。

頭を押さえつけられて詫びを強制されるほど屈辱はない。

しかもかなり長い時間、一分近くも押さえられて、謝れ、お客様に謝れと連呼されたのだ。

客もまた完全にクレマーで、自分勝手の極致だったので、その光景を当然とし、胸を逸らせ、尊大な態度を崩さなかった。

圭太の自尊心が、暴れた。

自分の頭を鷲掴みにするその店長の手首を掴むと、ぎゅつとねじった。店長がぎゃつと声を上げる。そして圭太はユニフォームのつなぎを脱ぎ出した。

「お、おい、どうしたんだ。片山！」

圭太にはもうその声は聞こえない。壁際に設置している細型のロッカーから普段着のシャツとジーンズを出して履き出す。

「片山、何してる」

「辞めるから。こんな店。いい加減にしろや」

圭太の眼には涙があふれ、そのレンズは外で猛威をふるう風雪をうつしていた。

それが圭太の短いガソリンスタンド時代だった。

今日も帰宅は十一時を超えていた。圭太は古いアパートの階段を、軋む音を響かせながらゆつくりと上がる。あの鍛え上げたはずの健脚が、鉛の棒のように重く感じるのほなせだろ。夜が下から手を伸ばしてどこかに引きずり降ろそうとしているように、しんと鎮まっていた。

ついこの前まで鳴いていた虫の音は、もう聞こえない。なんでこんな時間に毎日帰らなきゃいけないのか、圭太は時々疑問に思っていた。確か学校の先生は、労働基準法というものがあって、週四〇時間。一日八時間労働、それを超えたら残業手当が出るかと教えてくれたはずだ。しかし現実にはいつも五時間は残業し、手当もないのだ。ふらふらになつて家に帰り、飯をかつこんで寝るだけだ。

ドアのカギを開け、そつと入る。母が居るが、もう寝ているようだった。居間のテーブルにサランラップをかけたおかずが置いてあった。今日はトンカツだ。

圭太は炊飯器を開け、ご飯をてんこ盛りに盛り、ガスレンジに置いてある鍋の味噌汁を温め、中濃ソースをトンカツとキヤベツにたっぷりとかけた。ホカホカのご飯と熱い味噌汁と母が作るトンカツを胃袋に流し込むと、何故か涙があふれた。

(今日俺は間違いを犯すところだった。お客様は神様なんだ)

圭太はガソリンスタンド時代の失敗を思い出して、冷や汗をかいていた。

(俺は二度と失敗しない。陸上で培った忍耐で、必ず我慢してみせる)

飯を掻つ込む。今日の昼は、母が作ってくれたお握り三つをハンドルの前で慌てて口に突っ込んだ。その間わずか五分余り。まったく味気ない昼飯だった。ただ空腹を満たせばいいというだけの五分間。路上駐車はすぐに摘発されるからだ。今日でもそれ以外にひやりとしたことがあった。暗がりですトラックを回して、左折したとき、自転車が歩道を通ってきた巻き込みかけたのだった。自転車に乗っていたのは七〇代くらいの老人。急ブレーキをかけて、ぎりぎりセーフでぶつからなかった。老人は、何食わぬ顔で前を通り抜けたが、もしあの時自分の足の踏み込みが〇、一秒でも遅かったらきつと事件になっていただろう。圭太は運動をやっている良かつたと思った。この反射神経はアスリートの賜物だろう。圭太はご飯を平らげると、ぬるくなつたお風呂に浸かった。お湯を入れ、眼をつぶる。疲れ果てた肉体がお湯に浮かんで浮遊していた。俺は一体どこに行くんだろう。

そしてまた同じような日常が終わって始まるのだった。

「すみません。使います!」

片山芳江は慌ててその職場から姿を消した。その男はふう

っと大きな息を吐きながら、解放感にみちた音を立てる。かなり長い。一分近くもの時間、その行為は続き、その男はようやく安堵した表情を見せた。

その男が手を洗って出ていくと、廊下にいた芳江は、入れ替わり入って、また仕事を始めた。洗剤をかけ、雑巾でごしごしと擦る。適当にやると必ずクレームが入るので、手を抜かれない。しかし彼女の仕事は時間が難しいのだ。夕方六時にその会社に訪れても、まだ残業している社員が沢山いる。せっかくだが丁寧にきれいにしても、また汚されてしまつて、仕事をしたことにならなくなるのだ。

お掃除おばさんに対する扱いもひどい。特に恰幅の良い上司になると、お掃除おばさんにはまったく歯牙にもかけない。まるで最下層の階級の人間と思つていようだった。

いつも顔を合わせるのに挨拶の一つもない。芳江はまるで透明人間のようにこっそりとその会社ビルに入り、仕事をこなすのだ。

この清掃会社のアルバイトをするときに、言われたことが二つあった。一つは、プライドを持つて仕事をしてください。二つ目は向こうの会社に合わせて仕事してください、だった。つまり、やったから終わりではなくて、その日の終わりにきれいな終わりなのだ。

芳江は丁寧に仕事をこなした。なにしろお客様は神様なのだから。便器を雑巾で丁寧に擦る。決して棒付きのブラシで

ゴシゴシと誤魔化すことをしない。だからいつも新品同様の輝きを保つていた。芳江にとつてその光に反射するピカピカの陶器製の便器が誇りだったのだ。

「片山さん、クレーム来たよ。便器が汚いつて」

それは秋も深まった十一月の夕暮れだった。いつものように清掃会社に行つて、用具を受け取り、事務所に行つてきますと声を発した時だった。

えっ

芳江は最高の仕事をしてきたつもりだった。何しろ信条は、お客様は神様です、だ。ピカピカにして毎日仕事を終えていた。その前日だつて八時まで居て、そのフロアに誰もいなくなつたことを確認している。それなのに何故、誰が？

芳江は、心で泣いていた。仕事には絶対のプライドを持つて臨んできたつもりだったのだ。せっかくだがピカピカにして仕事場を後にしたはずなのに。

今日も芳江は真剣に便器や床のタイルと格闘している。

「母さん、俺、仕事辞めたくなつた」

「何言つてんの。短気起こしちゃだめだよ。スタンドの時のこと忘れたのかい」

母芳江は、眉間にしわを寄せて圭太を睨み付けた。

「仕事なんてあんまりないんだよ。運送屋に拾われただけけりがないと思ひなさい」

芳江が納豆をかき混ぜながら論ず。この家の朝食の定番は、目玉焼きとソーセージを焼いたものと、納豆だった。

「だつてさ、時間指定してんのに、まず居ねえんだ。もうさすがにあつたま来ちやう」

圭太が飯を掻つ込む。もう三杯目だ。

「我慢しな。仕事は我慢だよ。みんな同じことやつてんだろ？」

「そう。誰が考えたんだろ、こんなサービス。せつかく必死に時間内に運んでんのに、居ねえんだ。昨日、切れそうだった。思わず荷物四階からぶん投げそうになって一回転したさ」

喋りながら納豆飯がテーブルにこぼれていく。

「母さんなんて、人のうんこをきれいにしてるんだよ。だけどきれいにすると、気持ちいいんだよ。頑張つたつて感じになる」

「飯食つてるとき、汚ねえなあ。つたくう。でも昼飯食う時間もないし、夜遅すぎるし、この仕事続かないかもね」

「頑張んなさい。あんた他に何できるの？」

「知らねえ。パチンコ屋？パチプロつてのは？」

「バカだねえ」

「でもさ、陸上部の加治屋つていたろ。あいつパチプロで食つてんだ。月三〇万はいくつて」

「へえ。すごいねえ。でもそんなのめつたにないだろ。みんな負けるんじゃないの？」

「分かんねえ。毎日やつてれば上手くなるかも」

圭太は最後に味噌汁をぶっかけてご飯を胃袋に流し込んだ。「最後はやくぎにでもなるしかねえかなあ」

「バカ言つてんじゃないよ。あんたね、母さんがどれだけ苦労したと思つてんの」

圭太の父、泰造は、市役所の清掃事業課の公務員だった。

毎日真面目に仕事に行き、ゴミの集配を頑張っていた。昔は住民のマナーも悪く、分別もされていないゴミも多く、苦勞の連続だったという。

「いやあ、あのアパートの前のゴミ、ひでえ。まったく頭にくる」

帰つてくると、酒をカッ食らいながら機関銃のように文句が出てくる。住民にゴミ収集への感謝がないから、とにかく適当なのだ。夜はいつも荒れていた。でも仕事は一生懸命だった。朝の泰造と夜の泰造はまさに別人格で、朝は希望に燃えていた。

この街のゴミは俺がきれいにしてやる。

よく父泰造は息子に言っていたのだ。

その父が突然おかしくなった。

たまに飲み行くスナックから帰らない夜があったのだ。芳江は心配した。携帯に何回も電話したが出ない。芳江は一晚眠らず泰造を待つていた。そして泰造は次の日、職場に出かけていた。彼はケロッとして家に戻ってきたが、その目つきが少し変わつていたので。

そんなことが週に三回ほど続くと芳江はさすがに怒った。

「お父さん、何してるの。どうして家に帰らないの」

職場から戻った泰造に芳江が詰め寄る。すると泰造は開き直って言った。

「うるせえ。俺の勝手だ。俺は自由に生きるんだ」

芳江を突き飛ばして外に出ると、泰造は二度と家には戻らなかった。その時、後ろで見ていた圭太は、父の恐ろしい目つきを見て、もう近寄るまいと思った。あれは父ではない、もう変わってしまったんだと。

風のたよりに、父泰造はやくざになったと、芳江は聞いた。離婚届が封書で送られてきた時、彼女は迷わず判を押し、届け出た。

あのスナックで一体何があったかは芳江は知らない。ただそれ以来残された片山家二人は塗炭の苦しみを味わうことになったのだ。収入が断たれ、芳江は慣れない仕事に出た。朝から夕方まではスーパールのレジ、一回帰ってきて晩御飯を作り、清掃の仕事に出た。土曜も日曜もない。体を壊す暇もない。とにかく子供がまだ中学生で、お金が要るのだ。

圭太は足が速かった。小学校では学校で一番、中学校でも一番。幸い陸上の強い高校から特待生の話が来たので飛びついた。特技は人を救うと思った。しかし頑張って毎日毎日走った結果が、中途半端な陸上の記録と悪い学業成績だった。

こんなはずではないと思った。陸上で活躍すれば、大学も

特待生、就職も良い口があるかと思っていたが、当ては大きく外れたのだ。

テレビでは、経済的バラエティ番組をやっていた。この番組は大会社の社長さんたちがよく出演する。にこやかにいかにも人が好きそうな社長さんが出て、好感度を上げるのだ。

MCのタレントが言う。

「社長さん、また面白いアイデア持ってんでしょ」

「いえいえ、それほどでも。とにかく私は消費者目線でしか考えてないんです。お客様が求めていることが商売の基本で、そこにドル箱がある。お客様は神様です」

「そうなんです。お客様は神様なんですよね」

「そう。世界を見たら、こんな国珍しいです。例えばドイツだって、あの勤勉で日本に似てるとお思いのドイツなんかでも、労働時間はきっちりしてるし、その分サービスは悪い。しかしここは日本です。みんな、働く人はプライドを持って、滅私奉公。お客様に対して奉公する国なんです。だからこれだけ素晴らしいサービスが生まれる。外人さんはみんなびっくりしますよ」

(びつくりするくらい過酷に働いているからな)

圭太はお茶を啜りながら、ぼっとテレビの画面を眺める。

(結局、労働者にほとんど還元してないじゃない。会社ばかり太って。なんで先進国なのに、こんなに違うの)

母芳江は、口には出さないが、心の中で日本を激しく罵倒していた。

円環えんかんするカレンダー

高橋 剛治

1

五月末、東京から四十年振りに函館の実家に戻った。短期での帰省は折々にはしていたが、喜一きいちがここで暮らしていたのは、大学へ進学する前までだった。

妻の蒼衣あおいと家に入った。開け閉めが渋くなっている窓を開け、風を入れる。電気のブレーカーを上げ、止めていた水道管の元栓を開けた。管に不具合があるのか、水の出がよくない。家は築五十年近く経っていて、途中で何度か親たちも手は入れてはいたが、父が亡くなってからの三年程を無人にしていた。

「人がいないと、家って、傷むんだよね」

喜一は独り言を呟く。暖房装置も故障していて、終の住処とするには、破れている敷地境界のフェンス補修等も含め、多少のリフォームは必要であろうと思えた。

「ここに住むって、何か実感ないのよね」

蒼衣は、今更に、そんな事を言いながら、

「函館、寒い、寒い」

と連発し、部屋を円く掃いている。子供のいない夫婦だけ

らか、二十五年以上も一緒に居るのに成熟していない。悪くはないが、友達のような夫婦のままだと喜一は思う。この五年程、蒼衣は子宮筋腫の手術と更年期のせいで体調が優れなかった。函館に戻る事は将来想定だったが、知らぬ土地に蒼衣を連れて来る事に不安もあつた。けれど、大丈夫そうだな、と喜一は思った。そして家の方も、蒼衣の超簡単な清掃で、取りあえず寝泊りできそうなのは、ありがたい事だと思えた。

翌日、物置代わりになつていた以前自分が使つていた部屋を片付ける。押入れの段ボールの一つを開けると、何冊かの古いノートと一枚の原稿用紙が出てきた。ノートには二十代の頃書き溜めていた詩が書かれていて、その原稿用紙には「二十二月のソネット」と題された詩が記されていた。喜一は東京の大学を卒業した後、故郷よりだいたい北に位置するK市に職を得たので、二十代後半の四年程を一人その街で暮した。詩はその頃趣味として熱心に作り、月刊の社内報に載せてもらつていた。けれども、ある事情で会社を去り、再上京してからは、詩は書かなくなつていた。発表の場が無くなった事もあるが、日々に追われ、詩を書く意義と動機を喪失していた

のだった。なので、その箱から出てきた詩編は、K市に居た頃を書いていった物だったが、あの時、再上京する前に実家に寄り、置いていったのだと思われた。ノートの詩はどれも見覚えあるものだったが、「十二月のソネット」と原稿用紙に題された詩だけは、他の作品とは違い記憶に薄い物だった。そして、それは何故だか微妙な緊張を喜一に与えた。声を出して、その詩を読んでみる。

強いジンの匂いが 漂っていた
有線放送では クリスマス・ソングが流れ
一人 グラスを重ねながら
次にあの歌を聴きたい と僕は思った

ボックス席の 恋人たちは
新しい年の 運勢を占っては
創作された禍福に 興じている
「新しい年まであと僅か」

去り行く年よ 僕は忘れてしまいうらろ
この重い疲労や 今年あつた失意を
流行り廃れる、あの歌とともに

そして 新しい年の毎日を

希望や困惑や悲しみとともに
又進むだろう 新しい歌を口遊みながら

この頃、四、四、三、三行からなる十四行形式の詩を好んで作っていた覚えがあり、ノートの方にも、ソネットと題された幾つかの詩が記されていた。末尾に一九八六年とあった。スペース・シャトルの打上げ失敗、チェルノブイリ原発事故の年、二十八歳だった。それは、この年を振り返った平凡な詩に思えたが、飲んでいたのはこのバーであつたらう。独身だつたその頃、喜一は週二回は繁華街へ繰り出していたので、一人で行くような馴染みの店も二、三はあつたが、この店がどこであつたのか思い浮かばない。そして「あの歌」とは何の歌であつたか気にもなつた。

当時のヒット曲の幾つかは今でも覚えている。その頃のヒットチャートの順位は、現在のようなCDではなかったが、ドーナツ盤と呼ばれたシングルレコードの売上げ枚数を、今と同様に、ランキングのベースとしていたはずだ。喜一もレコード店でそれを購入していた覚えがある。実際に家の何処かを探せばステレオセットこそ無いものの、何十枚かのレコードはまだ残っているはずだ。

ところでこの翌年、喜一は新卒で入った大手企業を飛び出し、当てもなく東京へ戻る。その無謀すぎる冒険で、生活の安定を欠き、テレビやラジオで流行歌は耳に入れてはいたが、

購買からは関心が逸れていた。その為十年程レコードを購入しない期間があり、気がつくと言楽媒体はCDに代わっていた。その後CDを買う事はあったが、その過渡期に、それがどう切替わったのか、いつ頃切替わったのか、喜一の中では謎になってしまった。

因みに、喜一より十歳若い蒼衣に、この辺の事情を聴いてみたが、あまり流行歌の購買に興味がないようで、ずっとカセットを買っていたので分からない、と言う答えた。

カセットはカセットで、ここにも親の残した膨大な演歌のカラオケカセットがあるし、一時期確かに、新譜のシングルカセットと呼ばれるものが発売されていた覚えがある。しかしカセットについて言えば、当時、誰もがハマっていた自選音楽テープの、録音作成苦心エピソードが溢れてくる。録音媒体としてのカセットの想い出が、記憶を埋める。

「ホットフラッシュで、熱い、熱い」

蒼衣が隣室でボヤいている。喜一は横道に逸れて広がる思考を止めた。蒼衣はこの頃、突然身体がほてる。ホットフラッシュは更年期の女性の多くに発生する症状らしい。

「小休止、小休止、ソフトクリームタイム」

蒼衣は歌うように、それを冷凍庫から取り出してくる。長い小休止が始まる。

喜一も更年期は五十肩に悩まされた。丁度十年前、右肩に激痛が走り、腕が上がらなくなった。シップ等、治療の効果

はなかったものの、一年で治った。しかし翌年から左肩が痛みだした。更年期でホルモンのバランスが崩れるのだ、と言われたが、実際どうなのだろう。けれどこれも一年で、治まった。

その五十肩で苦しんでいた頃、喜一はカラオケの為に、流行歌の最新曲を積極的に聴き始めた。それは急激に発達したパソコンのユーチューブ上だったが、無料で好む歌を、すぐに聴けるのが便利で有難かった。それでも時折はまだCDを買ったりしていたが、最近CDから音楽配信へ音楽媒体が変わろうとしているらしい。ヒット曲のランキングも、そのダウンロード数とかがベースになってゆくのだろうか。時代の機材に付いてゆき、慣れるのは大変ではある、と喜一は思う。

2

六十の定年を迎える前、会社から残留を打診された。経済的には慣れた仕事で、年金の支給される五年後まで働いた方が良いのかもしれないが、営利的な仕事からは、そろそろ離れたいと喜一は思った。再上京した三〇年で幾つかの仕事に就いてきたが、精神的にはそれによって予想以上に疲労していた。

本当はもっと早くに退職して、父母との同居を考えるべきだったのだが、仕事の責任上も、自分の経済状況からも離職

は難しい事だった。あと五年程、両親に長生きしてもらえれば、最後だけでも一緒に暮らせたのだが、一人息子なのにも関わらず、さしたる孝行もできなかった事が、喜一を悔やませている。

今回は引継ぎに、だいぶ心を砕いたが、予定通り仕事は抜けられた。生活についても、車を廃車にし、多くはない貯蓄で、慎ましく暮らす方向で目途をつけた。函館に住む家がある事が背中を押してくれたかもしれない。

函館に移つてのひと月は、転入に関する諸手続きと各種住所変更で過ぎた。車の無い生活が影響してはいる。電車やバス、徒歩移動は、この街では意外と時間をロスさせる。

「時間はあるんだから、健康の為には、この方が良いよ。慎重しく、慎重しく」

と、蒼衣が笑う。その通りなのだろう。自家用車所有の間総維持費は、子供の養育費と同じくらい掛るらしい、と蒼衣は続ける。

屋根の修繕、家の壁塗り等を含め、リフォーム業者から見積りを貰い、七月末からの作業段取りが決まった。仕事をしているわけでもないのに忙しい。それでも仕事から解放される気分的には楽だった。朝、携帯の着信マークと留守録を気にする必要もなく、日々の拘束も無い生活は快適だ、と喜一は思う。

なので、その徒然に、詩に記された一九八六年のヒット曲

を調べてみた。個人的に印象深いのは、その年にレコード大賞を受賞した中森明菜の『デザイナーズ情熱』だ。特にファンと言うわけではないが、テレビの歌謡番組で随分その曲を喜一は聴いた。彼女の数多いヒット曲の中でも、後々まで代表曲としてラジオ等で流されていた気がする。和の衣装も印象深く、艶やかで伸びのあるボーカル、阿木燿子の蠱惑的な詞が心に残る。レコード売上げも、この年の第二位になっていた。

当時、テレビの歌謡番組は全盛だったように思えたが、今調べると視聴率などはピークを過ぎ、下り坂に入っていたようだ。よく言われる事だが、当時に、誰もが知っている流行歌、国民的な歌謡曲と言うものは無くなっていった。今ほどではないが、私たちの聴いている歌と喜一たち若い世代の聴いている歌は大きく乖離していた。それでもテレビの歌謡番組が幾らかの接着をしていて、ヒットチャートには各世代の好む歌、演歌やムードコーラス、ロックやフォーク、アイドル曲等、様々なジャンルの歌が、ほどよく入り混じってランクインされていた。

無論、音楽嗜好の乖離は既に避けがたく、私たちの世代は、テレビで流れる若い歌を聞きながしていたし、若い世代も多くの演歌、歌謡曲には関心がなかった。喜一とは十年、世代の違う蒼衣は、この五年後に知り合った二十三の頃、演歌って、どれも同じに聞こえる、と言っていた。もっともその二

十七年後の現在、オバさんになってしまった蒼衣は、AKBも乃木坂も櫻坂も、若い歌の区別がつかないと言っている。この辺は年配者になった喜一の友人の誰もが、同様な感想を漏らしている。更に彼らは概ね、若い歌を否定する。昔の曲の方が優れている事を述べ、自分たちが聴き込んだ頃の歌を熱く語る。それが悪いわけではないが、それは嗜好の違いに過ぎず、優劣ではない。若い世代の歌手も良い曲を歌っている、と喜一は彼らに言うが、それを聴いている事自体に奇妙な顔をされる。まあ、流行歌の嗜好の乖離はより拡大しているから、それも詮無い事だとは思う。その意味では、この年はヒット曲の在り方に、変化を与えた現象があった事を喜一は思い出した。

「おニヤン子クラブ」である。これは前年から放送されていたテレビ番組から輩出された女子のグループだった。グループはテレビ番組での人気を背景にグループ全体、ソロ、デュエット、複数のユニットグループで、絶え間なく楽曲を発売し、ヒットチャートを席捲した。この年のシングル売上げ週間一位の四十六曲中、おニヤン子クラブ関連が三十曲を獲得した。これらの楽曲は、これまでのように曲が発売後に評判を呼び、売上げを伸ばし、ヒットチャートを上がって行くのではなかった。その全曲が番組内で発売日が告知され、その前に披露された。発売初週には若いファンにより爆発的に購入され、ランキングトップに登場した。勿論この傾向は他

のアイドルや流行歌にも言える面はあったのだが、コアな購買層を持ったおニヤン子クラブの歌で特に顕著だった。瞬間的な購買は二週目からは売尽くした感じで普通に戻り、ランキングを降下させた。その為、曲は広く世間に認知、流布されず、一般には浸透して行かない面があった。この年の年間売上げで、あれだけ週間ランキングの一位を独占しながら、トップテンに入る曲は、十位の河合その子のソロ曲『青いスタスイオン』があるだけだった。無論、以下の順位には、それぞれ売れた曲が並んではいて、売れたのは確かな事だった。素人同然の歌唱といい、批判も多かった。けれど、肯定的な意見としては、この頃、貸しレコード店の普及などにより数年来低迷していたシングル盤市場が、再び盛り上がりを見せたと言われている。つまり流行歌は売れない時代に入っていたのだが、おニヤン子クラブによって再浮上したと言う事だった。この後一九九〇年から、レコード盤に変るCDとその再生装置の爆発的な普及により、音楽市場の一気に拡大が起ころ。シングルCDの売上げは右肩上がりを続けたが、その動きこそ、おニヤン子クラブにおける若者等のレコード購買活動に起因があるとの理屈だった。

その時、記憶に引つ掛かる物を感じた。それを言ったのは誰だったか。田中さんではなかっただろうか。田中さんは大学の一年先輩で、バイト先で知り合い、学生だった頃と喜一が翌年再上京してから、一緒に飲み歩いていた人だった。再

会後に、去年流行った歌で好きな曲は、と次のように言っていた。

「まずクワタバンドの『スキップ・ビート』だろ、レベッカの『フレンズ』それと渡辺美里の『マイ・レボリューション』とチューブの『シーズン・イン・ザ・サン』だな」

しかしその頃、田中さんは酔っぱらってカラオケに行くと、何故か少年隊の『仮面舞踏会』とかチャッカーズの『ソング・フォー・USA』を歌っていた。ギャラリーの受けが良い、と言っていたが、どうだろう。それらは全て一九八六年を代表する懐かしい曲だ。

田中さんとは、その後五年位は交友していたが、互いに家庭を持つてからは会う機会が減った。更にその後、田中さんは起業した自分の会社を潰してしまい、負債を抱え、失踪してしまった。再起の為、家族と別れ、東南アジア方面に移住した、と言う話も聞いたのだが、定かでは無い。おニヤン子クラブとレコード購買の話は、最後に会った頃、聞いた気がする。二十一世紀に入る少し前の頃で、それから二十年位音信がとれていない。

3

函館マラソンは、喜一がここを離れている間に始まったので、今回初めて遭遇した。その日は宝来町の伯父の家に、帰郷の挨拶に行く予定で訪問時間を連絡していた。路面電車が

二時間も休みになるとは、当日まで知らなかったが、訪問時間の変更も、連絡が面倒だったので早めに出かける事にした。

函館公園でも行つて時間を潰そうかと思つたが、雨が降り出したので、宝来町のコンビニに入り、カップコーヒーを手に常設の喫茶場所から通りを眺めていた。沿道には応援者が意外と大勢いて、みんな知り合いでも出場するのだろうか、と喜一は思った。やがて雨中をランナーが駆けて行つた。招待選手もいるようで、ちよつとした大会だ。適当な時間まで見て、伯父の家に向かう。

伯父は、喜一の母の三番目の兄で、今年九十三になる。東京で暮らす三十年の間で、自分の両親を含め親戚の親世代は皆、永眠してしまつた。兄弟のない喜一には、行き来のある親戚は数人しかないのだが、父の葬儀の時に、一番年長の父方の従兄の虎雄さんが、

「また皆で集まる時は、俺の葬式の時だな」

と、半分は冗談だろうが、そう言つた。虎雄さんは、まだその時六十三だったので、すぐの事ではないにしても、自分たちの世代が親族の最前列に来たと言う感慨が、強く喜一を襲つた。母方の親戚も、これから尋ねる伯父だけが健在で、時の流れを感じさせる。

伯父は耳が悪く、会話が不自由だったが、元気に暮らしているようだった。

「少し、頭がマダラボケな所があるけど、まあまあ元気だわ。

医者嫌い、具合悪くても行かないんだわ、頑固で困る」

と、同居している従兄の広行が続けた。

「でも、それが長生きの秘訣なのかな、薬漬けになるのが一番やばいよね」

と、医者を皮肉る。喜一の両親とも、最後は入院中に亡くなっていた。

「でも、素人にはその判断がね。結果的に強い薬の副作用で死期を早めたにしても、使わないと病気が悪化する、と言われるとね」

喜一が話す横で、インコのピーちゃんが、伯父さんの手から巣カゴに戻った。広行がピーちゃんの喉を撫でながら、話を継ぐ、

「まあ、そうだね、ところで仕事辞めちゃって、大丈夫なの」

「子供いないし、二人だけだからね」

「働かなくても、やってゆけんならいいよ。けど、仕事しなくて退屈じゃないの」

この件は東京の仲間からも随分言われた。家においてても手持無沙汰で、仕事を継続していると言っ者もいる。ボケますよ、と笑いながらかましてくる部下もいた。唯一の例外意見は、一年前に六十五歳で定年退職した虎雄さんだけだった。虎雄さんは、仕事はそれ程負担じゃないが、休み明け出勤前夜、日曜の夜とかの、あの憂鬱な心持ちから解放されたのが良かったと言う。好きな事をして、心身ともに健康に暮らせる

のも、あと十年位だから、経済的に何とかなるなら、早めの引退もありだよ、と力説していた。

「うん、遣うことや遣りたいこと結構あるからね。仕事はちよつと精神的に疲れたしね」

喜一が答える。

「ふうーん、どんな仕事だったんだっけ」

「一口で言えば、センターの運営。幾つかのメーカーの在庫品を、冷凍冷蔵、ドライの倉庫で預かり、仕分けから、出荷、配送までを運営、管理する仕事なんだ」

「俺、今さ、水産加工会社で、仕分けとかの作業をしてんだけど、そんな感じかな」

広行は喜一より一つ上で、寝具メーカーを定年後、そこに勤めていた。

「そうだね、その全体的複合管理かな。何もなくて順調なら良いけど、作業、人員、配送商品のどこかに不具合があると、指示を求めて、二十四時間連絡が来るからね」

「そりゃあ、気が張るわ、使われて、指示受けて、動いてる方が、楽は楽だわね」

伯父さんがピーちゃんに餌をあげている。

「やりがいい、あるかもしれないけどね」

喜一は答えながら考える。業界的には、人手不足が深刻だった。特にトラックドライバーの不足は、目を覆うほどで、それは安全対策の為に免許取得の仕組みが変わった事が大き

かった。以前は最初に普通免許を取得した時に、4トントラックまで運転可能の免許が交付されたが、二〇〇七年の法改正により、普通免許では総重量5トン以上の車が運転できなくなり、積載2トン以上の冷蔵冷凍車の運転は、その機材分の重さがあるので、ほぼ不可となる。つまり免許があれば誰でもなれたドライバー職が、それになる為には、中型免許とかの新たな免許取得が必要になる。これでは若い人材の参入は容易ではなく、どの運送会社も人材確保に苦勞していた。「やっぱり個々の人員管理と全体のコスト管理が厳しいかな。良い人材を安く使いたいと言う仕組みに無理があるよね」と、喜一は纏めた。

伯父は前のように会話はできないが、喜一の事は分かってくれているようだった。辞去する時耳元で、また来ますと大声で言うと、皆さんに宜しくと答えた。皆さんの中に、死んだ両親もまだ入っているのかもしれないがと思ったが、喜一は、はい、と頷いた。

帰りは十字街まで歩いた。途中高田屋嘉兵衛の銅像の前を過ぎる。小学校までは、この辺に居たので、銅像前のグリーンベルトでよく遊んだ。五十年以上前の事だった。当時は嘉兵衛の事は詳しくは知らなかったが、大学生の時、司馬遼太郎の「菜の花の沖」を読んだ。土方歳三や榎本武揚に比べ、函館関連の歴史人物としてのネームバリューは低いが、ゴロ―ニン事件における日露交渉等を含め、もっと喧伝され、関

心が高まってほしい人物だと思った。銅像についてその後少し調べ、函館開港百年を記念し、喜一の生年に、彫刻家の梁川剛一氏が制作されたものと知った。

それから、今回歩いていて初めて気づいたのだが、作詞家高橋掬太郎の歌碑があった。昭和六年の大ヒット『酒は涙か溜息か』を顕彰したものらしい。この年、日本中の夜の繁華街で愛唱されたと言うこの曲や『古城』『雨に咲く花』等多数のヒット曲を残した高橋掬太郎の事は知ってはいたが、この歌碑の存在は知らなかった。更に詞の舞台が、ここからすぐの、当時函館の繁華街だった十字街銀座通りであった事を知って、少し驚いた。喜一が子供の頃には、もう十字街銀座通りから繁華街は松風町に移っていた。函館の中心地は北方へ移動しているが、更に五十年がたった現在はどうなのだろう。五稜郭本町の方が松風町より賑やかなのか、久々に戻ったばかりなので良くは分からなかった。

十字街から電車に乗った。子供の頃は宝来町から松風町まで電車が通っていたが、その路線はだいぶ前に廃止されていた。函館駅前からガス会社を回り五稜郭に向かうルートもあったが、それも無くなっている。縮小されていたが、現在の経営はどうなのだろう。サンフランシスコの路面電車みたいに、観光でもっと人気になれば良いのと思う。採算が合うなら、末広町から公会堂の坂を登る電車があれば格好いいよな、と喜一は考えた。

蒼衣がパソコン画面を見ながら言う。

「函館の人口つてさ、年間で三千人ずつ減っているんだって」
 「大企業があまり無くて、仕事少ないからかな。観光だけで
 はきついいよネ。やつぱり」

「国民保険料が、高いのが原因かもね」

実際にそれが原因なわけではないが。関東より随分高いと、
 その手続きが終わつてから、ずっと蒼衣は愚痴つていた。

夜、友人と会う為に五稜郭本町に出た。土曜の夜の人出と
 しては、どうなのだろう。人口流出が多く、繁華街は厳しい
 のだろうか。

「久しぶり。よく函館なんかに戻つて来る気になつたなあ」

新垣が言う。新垣は中学の同級生だ。

「なんか、はひどくない。函館、人口減つてるし、そんなに、
 良くないか」

喜一が答えると、新垣は苦笑する。地方公務員の新垣は、
 三年毎に全道を転動していたが、ここ二年は函館勤務で、来
 年の定年まで移動はないらしい。函館に家を建てているから、
 函館なんか、の表現は概ね照れだろう。

「新垣も充分働いたから、公務員で退職金もたんまりで、定
 年後は楽隠居だな」

ホッケを掴まむ新垣に、喜一が雑ぜ返す。

「それがさ、子供が二人とも大学院なんか行くんでさ、まだ

まだ掛るんだわ」

脛齧られまくり。早く仕事辞めたいよ、と新垣は続け、囁
 託で、あと五年は残る予定だと言う。息子二人と家購入が無
 い分、働きが少なくても済んだかなあ、と喜一は思った。

居酒屋で、ビールで乾杯した後、近況や、とりとめのない
 話題で時間を過ごした。病気や健康に関する話が増えている。

「石川は、三十代後半だったつけ、脳溢血つて、信じられな
 いよな」

最後は死んだ同級生の話になった。

「酒の飲み過ぎだよ、石川は。結構一緒に飲んだけど、好き
 もあるんだろが、良い恰好いで、浴びるように強い酒、
 飲むんだな」

三十代半ば、新垣は何回目かの函館勤務だったので、石川
 の葬式にも行ったそうだ。

「子供は小さかったし、奥さんが可哀そうだったよなあ。そ
 の後、どうしたのかな」

その後も幾人か、交通事故や病気で亡くなった友人の名が
 出た。最後は追悼会のようになり、泥酔手前で、散開した。

若くして逝った人を思うと、人生とか運命を意識させられ
 た。そして喪失感と共に、生かされている自分とは何なのだ
 ろう、いつも考えさせられた。一九八六年のヒット曲を並
 べて見ると、既に亡くなっている歌手の曲があり、それは四
 名いた。全員が女性で二人が喜一より年上で、二人が下だつ

た。

美空ひばりは、親たちの世代の偉大な歌い手、歌謡曲の女王だった。喜一らの世代でも有名で誰もが知ってはいたが、全盛期は少し過ぎた感じだった。この年の『愛燦燦』も売上的には話題となる曲ではなかったが、喜一は覚えていた。よく聴いていた小椋佳の作詞作曲になるものだったからだ。この歌は後にカラオケで愛唱され名曲と呼ばれる。美空ひばりはこの三年後、五十二才で亡くなっているが、今の喜一より若いと言う事が何だか不思議で、信じられない。戦後歌謡と呼ばれた時代、多くのヒット曲は圧巻で、その世代の記憶に生き、死後に国民栄誉賞を受賞した。

亡くなる年の美空ひばり最後の曲『川の流れるように』も有名で、カラオケで歌う人が多い。喜一は若い時にはカラオケにそれほど興味はなかったが、五十を過ぎた頃からハマった。それ以前も嫌いではなかったのだが、あまり上手くはなかったたので、友人や蒼衣に付き合う程度だった。ただ、母親が好きだったから、短い帰省の時には両親に連れられ、二人の馴染みのカラオケスナックに行ったりしていた。ささやかな親孝行のつもりだったが、どうなのだろう。

ハマりだしたのは、歌が上手くなったと言う事ではない。この頃病気がちになっていた母親の見舞いに頻繁に実家に帰り、母親自作の「持ち歌一覧」の手帳を目にしてからだ。そこにはざっと五十程のカラオケの演歌曲の題名が並んでいた。

無論実家にはカラオケのレーザー・ディスクやカセット、楽譜とかが無数に置いてあったが、何故かその手帳は心をひき、自分もカラオケのレパートリーと言うのを書き出してみたくなったのだ。

書き出してみると歌える曲は百五十程あった。母親の五十は上手く歌える歌、つまり十八番の曲の記載だろう。喜一のリストは単に歌える歌と言う事で、上手い下手は考慮していないものだった。それらをエクセルでデータ入力して打ち出したものを持ち歩き、点数を記録し出してから、ちよつとハマってしまった。又、類は友を呼ぶと言うのか、取引先に同好の士がいて、カラオケスナックに同行するようになり、完全にハマった。ただ歌唱力に自信があるわけではないので、歌唱点数は目安で、人の受けを取る為に、持ち歌のレパートリー数で勝負する方向に進んだ。あらゆる時代とジャンルの曲を、手当たり次第に覚え、現在では二千曲になっている。

人が聞きたいと思う歌、場の流れに合いながら、意表をつく歌や珍しい歌を披露し、感心され、驚かれるのが快感なのだ。かなり屈折した趣味で、ストリートで歌の上手い蒼衣からは、変態カラオケマニアと言われる。

話を戻すと、次のテレサ・テンは喜一より五歳上で、この年の発表曲『時の流れに身をまかせ』で有線大賞を受賞している。三年連続の獲得で、この頃が全盛期だった。母国台湾をはじめ、広く中華圏や東南アジアでも人気を博したが、こ

の九年後に四十二才で亡くなっている。今の喜一より、だいぶ若い。

残る二人は年齢も喜一より下で、若くして亡くなっている。岡田有希子は、この年『くちびるネットワーク』と言う曲で、初の週間売上の一位を獲得した。さあ、これから、と言う感じの時の、衝撃的な自殺で、その年十八だった。若い世代への衝撃が強かったようだ。当時、同世代だった蒼衣は、

「なんだか良くは分からなかったのだけど、ニュースと共に強い衝撃が学校中に、生徒たちの間に、広がった感じがした」と話す。その後、若者たちの後追い自殺が、社会的な問題として取り上げられた。恋愛問題の悩み、みたいなことが原因と報道されたが、若者たちには、その原因より、同世代のトップ並走者、仲間の死に遭遇した心の衝撃が大きかったのではないだろうか。社会人だった喜一はファンであったわけではないので、驚きはあつたが、大きくはなかった。

岡田有希子と同じ年の本田美奈子は、この年『一九八六年のマリン』と言う曲をヒットさせた。他にも幾つかのヒット曲をだし、ミュージカルにも進出していたが、十九年後に白血病で亡くなり、こちらも当時社会的に大きく報道された。

5

七月七日。七夕の夜の「蠟燭もらい」の行事は函館独特の伝承行事だ。小学校低学年以下の子供らが、地域の住宅を巡

回し、蠟燭やお菓子を貰う行事である。地元を離れて久しい事もあり、喜一は当日までそれを忘れていた。慌てて、蒼衣にそれを言うと、

「何、それ。擬似ハロウィンなの」

と言う。確かにハロウィンに似ているが、関係あるのかどうか、五十年前に巡回していた喜一は、ハロウィン自体を知らなかった。

「今は、お菓子をあげるのね」

ネット検索した蒼衣が、画面を見ながら言う。喜一は家にある多少のお菓子と蠟燭をビニール袋に纏め、十五セット程を作った。

「家の前に、七夕の笹飾りがあるようよ」

訪問を嫌う家もあつて、近年は小学校の指導で、七夕飾りのある家だけを訪問するようになっていたらしいと蒼衣が言う。

「昔は、そんなのなかったなあ。確か、提灯を持って、何人かのグループで決まりの歌を唱和して、回ったなあ」

隣家から子供たちの唱和が聞こえた。今から七夕の飾りは間に合わない。

「竹に短冊、七夕祭り、大いに祝おう、蠟燭一本頂戴な」

自分たちの時は、確か「大いに祝おう」のところが多いは、嫌よ」だったが、と喜一は思った。節は、同じだった。

七夕飾りの件は、虎雄さんと新垣にメールで確認した。虎

雄さんからは、子供が小学生の時は七夕飾りを出していたけど、今は飾っていないと回答があった。新垣からの返信はストリートで笑えた。飾りは、立てないよ。立てたら子供が家に寄るべよ、とあった。

七夕飾りが無いので、どうやら今年には子供らの訪問はないようだ。親がどうしていたかわからないが、三年も無人だったから、七夕飾りがあったとしてもどうだろう。

「蠟燭もらい、の項目でウイキがあるよ」

まだネットを検索していた蒼衣が、感心しながら言う。それによると函館の古い習俗を記した一八五五年の『函館風俗書』に、この行事は出ているらしく、ハロウィンとは無関係らしい。更にこの行事は全道的に実施されているとの事だった。知らなかった、函館だけの行事だと喜一は思っていた。

ところで蠟燭と言うと、去年突然にリバイバルヒットした歌があった。「キャンドルライトが素敵な夜よ」と歌われた『ダンシング・ヒーロー』だが、これも一九八六年の歌だった。荻野目洋子はこの後も幾つかのヒット曲を出していたが、結婚して表舞台から降りていた。けれど、去年この歌がバブル期を代表する曲としてバブリーダンスなるもので取り上げられ、ユーチューブ上で拡散され、再ブレイクした。喜一も昨年後半、年配者たちがスナックで歌うこの曲を再三聞かされた。元々はイギリスのヒット曲のカバーで、この年は他にも三つの洋楽のカバー曲がヒットしている。後に演歌歌手と

して活躍する長山洋子の『ビーナス』、ダイアン・レインの映画主題歌をカバーし、テレビドラマの主題歌に使われた椎名恵『今夜はエンジェル』、そして同じくテレビドラマの主題歌で、この年の最大売上げを記録した『チャ・チャ・チャ』だ。

これはイタリヤでヒットした歌だったが、原曲歌手より、陰りのある低声で歌う石井明美に合っていると喜一は思った。翌年春の選抜高校野球行進曲にも選ばれたこの曲の為、一発屋のイメージが強いが、石井明美は四年後に南米の人気曲をカバーした『ランバダ』もヒットさせている。どちらも造花のようなバブルの光彩を象徴する歌だった。

バブル時代は、後に振り返ると、この年後半に始まり、五年後の一九九一年初頭に終了した。あの詩を書いた頃が、その始まり地点であったのだ。時代の騒めきが、フラフラと東京に自分を飛び出させた、と喜一はずっと信じていたのだが、この前、田中さんの事を思い出し、記憶が違っていた事を認識した。あの詩は次のように作られたのだった。

一九八六年のクリスマス頃、喜一はK市の繁華街にあるバーでウイスキーの水割を飲んでた。一枚のクリスマスカードが手にあった。学生の頃に付き合っていた菊絵からのもので、来春に結婚する事が記されていた。四年前、北海道に就職が決まった時に、一緒に来ないか、と申し込み、生まれ育った関東を離れられない、という答えて別れた女性だった。喜一の就職に反対はなかったが、答えは多分、その頃から決

めていたのだろう。

喜一はその後、札幌での短い研修の後、赴任先のK市で四年を過ごしていた。その間、菊絵とは連絡も取り合っていないかった。そのカードは単なる事務連絡だったのかもしれないが、喜一にはやや唐突な感じがした。おめでどう、何か送る、とカードを返信したが、ひどく寂しかったのは何故だったのだろう。縁のなかった女性だと思っていたが、まだ残る未練は大きかったのだろうか。心の何処かで、いつか戻ってくるでも思っていたのか。幾つかのクリスマス・ソングと、丁度この時に流行り出していた小泉今日子の『木枯しに抱かれて』が流れていた。この曲も良いが、強烈に、聴きたいと欲した歌が心に浮かんでいた。あれは何の曲だったろう。

翌日、休日の午後の二日酔いの中で、あの詩を書いた。舞台のイメージが、学生時代に行きつけだった渋谷のQになっていた。強いジンの香りがしていたのは、いつも一緒に飲んでいた田中さんが、横でジンベースのカクテル、トニックやフィズ、マティーニとかギムレットを愛飲していたからだ。

その店は最初に田中さんに連れて行ってもらった。渋谷の公園通りと言う場所柄、外装こそ洒落ていたが、あとは何もないバーだった。女の子もおらずカラオケもなかったが、マスターが様々なカクテルを作る。しかしビールかウイスキーの水割、たまに注文する度に、古臭いねえとか、渋いねとか言われ、当時まるで廃れていて流行遅れだったハイボールし

か飲まない喜一が、誰かと会う以外で何故そこに通っていたのか不思議だった。その店には一人でも随分行ったが、田中さんがいない時は、ただ有線から流れる曲を聴いていたような気がする。一九八一年頃の事だったが、その頃『ルビーの指環』をはじめ寺尾聰の歌を随分と聴いた気がする。

その前年のクリスマスだったかに、喜一は菊絵とそこで飲みながら、菊絵の持ってきた新しい年の占い本を見ていた。血液とか生年月日、星座とかは個人に固定されたものだから、未来は知ってしまったも変えられないのなら、と喜一は占いには興味がなかった。けれど知っていたほうが、対処や予防が可能だと菊絵が言うので、それに付き合っていた。

菊絵は、新しい年の様々な運命を提示したが、何をどうしたら運命がそんなふうに変えられるのか分からなかった。その時どんな未来が提示されたのか忘れてしまったが、一九九九年のノストラダムスの予言は当たらないと言い、バラ色の未来を語る菊絵の嬉々とした表情が蘇る。付き合っていた三年の中で一番嬉しそうな顔だった気がする。

けれど喜一は、まぐれ当たりはあっても、未来は予見できないと思っていた。それ故、「創作された禍福」と五年後の詩に書いた。

6

両親の遺品の多くは処分せざるを得ない物ばかりだが、何

で、と思う程多量の母の帽子とバッグや財布、折りたたみ傘等が出てきた。捨てるべきか迷い、箱に入れ戻した。

お盆が近い。函館のお盆参りは七月なのだが、八月お盆が常態の土地にいた蒼衣に「新旧」の説明するのは難しい。

「新暦の七月十五日に実施する盆だから、函館のは新盆、他の処は新暦の八月十五日、つまり旧暦の七月十五日のお盆だから、旧盆」

喜一はそう説明するのだが

「元々の七月十五日のお盆にやっているお盆は旧で、新しく八月にやる方が新盆だわ」

と、蒼衣は言う。確かにそうだ。蒼衣の素朴な疑問は無敵だ。この場合の新旧は、新暦の七月十五日に実施するか、旧暦のその日に実施するかを、新旧のお盆名称としているとの誰かの決定を前提としていると言う、その説明が必要なのだと喜一は理解した。

因みに言うと、東京も七月お盆なのだがあまり知られていない。幾度か会社で、函館も東京と同じ七月お盆だと言ったが、地方出身者が多く、ほとんどの相手は東京がそうだと理解できていないようだった。これは東京及び首都圏の会社の多くが「お盆休み」を八月に設定し、全国ニュースでもその時の帰省ラッシュを取り上げているからだ。世論を形成するのは東京でも、意外とそこには純粹の東京人は少なく、東京在住の地方人が多いと言う事なのだろう。喜一も合わせれば

三十六年もの年月をその場所で暮らした。

大学とK市を出奔してからの年月、東京にいたが、新卒で入った大手の会社を辞め、どうしてK市を出奔したのか。当てもなく東京を目指したのか。函館に適当な仕事がなかったと言う事が要因だとしても、何を求め、バブル煌めく東京に戻ろうとしたのか、ずっと自分でもそれを失念していた、と言うか記憶に蓋をしていた。仕事に嫌気がさしたのだろう、まだ若かったからと考えていた。

しかし、今ははっきりと思い出した。それはクリスマスカードを買った翌年初め、菊絵が亡くなったからだ。交通事故、式を予定していた六月の三ヶ月前、道路を横断中に轢き逃げされた、と田中さんから電話があった。菊絵の結婚相手は田中さんだったのだ。田中さんと菊絵は、喜一を通し面識があったが、前年の夏に、三年振りにQで会い、進展したらしい。もうすぐ発送予定の、式の招待状で喜一に詳細は知らせるつもりだった、言いくかかったと田中さんは言った。それにっいては何も思わなかったが、ただ説明のつかない喪失感が、心に沸き起こった。

四年以上前に別れ、とうに縁のない女性だとは理解していたのだが、得体のしれない感情が動いた。東京へ行かなければと思った。心にどんな衝動が起こったのだろう。良く分かんなかったが、愛情とは違う気がした。岡田有希子の後追い自殺をした若者たちと同じ衝動だったのだろうか。すぐに退

職届を書き、周りの説得を振り切り、多くの人に迷惑をかけながら東京に向かった。葬儀はどうに終わっていたし、何が出来ると言うのでも、何かしたいと言うのでもなかった。結局一週間、田中さんのマンションに居候をし、Qで飲んでいただけだった。婚約者を失った田中さんは、色々と忙しかっただろうが、特に菊絵の話はしなかった。再上京の動機を田中さんにどう話したか、記憶がない。田中さんの部屋には、写真とか菊絵を想起させる物も何も無かった。

それから、アパートを借り、添乗員の派遣会社に入り、一年半位、その仕事で日本中を回っていた。結局一度も菊絵の墓も、実家も訪ねなかった。何の為に東京へ出てきたのか自分でも分からなかったし、今考えても理解できない。ただその時、失ってみて、初めて大切な何かを失くしたのだと感じていた。別れて幸せに過ごしてきてくれたならば、湧き起らない感情だったと思うが、自分が側を離れなければ大丈夫だったのに、等と考えたわけではない。勿論、田中さんには何も関係なく、これが彼女の運命なののだと思っただけ、ただ喪失感が苦しかった。添乗員の旅から帰ると、次の添乗予定の日までQで飲んでた。

「酒は涙か溜息か、心のうさの捨てどころ」

旧い歌の通りだった。酒と時間は何かを癒してくれた。それは青春の喪失に対する足掻きでもあったのか、要は自分の心の問題で、一方的な感情である事は理解していた。

旅とその添乗の生活は、それなりに楽しかったが、浮き草のような派遣稼業を終え、後の五十肩の時のように何事もなかったかのように、東京で一般の会社員に営業として就職した。気持ちにどう折り合いをつけたのか覚えていない。どこかで記憶に蓋をしたのかもしれない。心配を掛けっぱなしだった両親を、幾らかホッとさせた、と言う自覚があった。

それから三十年、平凡に勤め人として年を過ごし、結局は円環するカレンダーのように故郷に戻った。この後どれ位の時が残されているのだろう。何をすべきか、どこへ向かうべきか、自分の人生と言うものを纏めて行かなければならないと喜一は考える。とりあえずは詩を書こうと思った。若い頃の詩も合わせ、一冊の詩集を作りたいと考えていた。

あの詩に書かれた歌は結局、分らない。音楽について更に考えれば、嗜好の違いは個人に於いても世代に於いても大きい。流行歌以外のクラシック等も含めれば、嗜好の幅はより広がる。喜一は音楽の好みが広い。クラシックや民謡を含めジャンルは問わず、若い時から懐メロや演歌も好み、親子や年配者の音楽にもカラオケで対応できた。

その演歌は、一九八六年は豊年だったが、年間売上ランキングには、前年の発売で、この年に売れた小林旭の『熱き心に』だけしか入っていない。演歌曲のランキングの上昇は遅い。世間一般への周知に時間がかかる為だが、この年発売された演歌の良曲も、売れだすのは翌年以降になる物や、後に

なりカラオケで愛唱される物が多い。前者では瀬川瑛子の『命
くれなひ』、吉幾三『雪国』、堀内孝雄『愛しき日々』、尾形大
作『無錫旅情』があり、後者としては石川さゆりの『天城越
え』、北島三郎『北の漁場』があった。この年の演歌曲は今も
カラオケで歌われている。

通り過ぎる流行歌に寄り添い、助けられながら、また新た
な歌を迎えてきたが、流行歌のCDシングルが売れなくなっ
てくるのは二〇〇〇年代後半。音楽配信（デジタル・ダウン
ロード）の売上が増加して、CDのような音源記録媒体を購
入する時代から音源そのものだけを購入する、ダウンロード
販売が主体の時代へ移行した。その比率は逆転したと聞いた
が、流行歌の流布に変わりはない。

7

七月十五日は雨予報だったので。前日にお盆参りに出かけ
た。墓のある地藏寺は、函館山の麓、市の西部にあり、そこ
からは湾が一望できる。音信の途絶えていた田中さんのハガ
キがポケットにあった。東京の元の住所から、今日転送され
てきたもので、差出場所はベトナムのハノイ、とあった。

「何とかやっている、元気だ」

裏面の印刷された写真に、頭髮の後退した姿があり、横に
ベトナムの若い女性が写っていた。奥さんなのか関係は書か
れていない。細面の美人で、菊絵によく似ていた。

多くのものを失い、ただ時を無為に過ごしてきたのだろう
か、と喜一は思った。

「お墓まで遠いにや、遠いにや」

と蒼衣が、ふざけながら言う。それに反応して、喜一は、
いや、違うはずだと思いなおす。何故なら、希望や困惑や悲
しみと共に過ごした、自分の円環するカレンダーには、流行
り歌を含めて、多くの記憶が積み重なっている。そして、な
により水桶を手に歩む自分の横には、仏花を抱えた蒼衣がい
た。

「私より、長生きしてくださいよ」

蒼衣が、拝み終わって言う。

それならば、これからも大切な者を失う日が来るのかな、
と喜一は蒼衣に吹き、微笑みながら、わかったよ、と答える。
頭上には函館の初夏が青く輝き広がっていた。

(了)

ふたつの「二握の砂」と啄木の「生活の発見」 水関 清

第一章 啄木の性格特徴と「意識歌」 石川啄木は、だれよりも深く自らの意識世界を掘り下げて徹底的に「自我」に迫った歌人である。自分自身の内なる世界である「自我」を観るためには、その時々に関心を感じたり考えたりしたこと、そしてその結果としてとった行動を、自分の意識によって確認するほかない。「行動」は他者の目にも見え、その把握も容易であるが、その深層にある「感覚」や「思考」については、「行動」から推測するしか方法がない。啄木は、日常生活の中で、ひとびとの心を一瞬去来する「感覚」や「思考」、そしてその時々々の「行動」を、自己愛惜の見地から、文字にして定着する歌論を確立した（「利己主義者と友人との対話」）。そして短詩型としての短歌が備える手軽さには、その一瞬を捉えて文字として残す上での優越性があることを見抜いたのである。

表裏両面から「自我」に迫り、凝視することは容易なことではない。冷徹な自己分析は時に己を傷つけ、自己嫌悪に苛まれることにもなる。「ローマ字日記」執筆中の啄木は、まさにそのような状態のただ中であつた。

筆者が前著「啄木の精神分析」で述べたように、啄木の性

格には「神経質者」としての明瞭な特徴がうかがえる。神経質者の性格の四大特徴とされる「執着性」「心配性」「自己内省性」「強い欲求」、それ自体は普遍的なもので何ら疾患的意義はないが、もの見方に偏りがあると、神経質性格の負の側面が助長されることになり、しばしば社会との適応性を欠いた非社会的言動をとることになる。「自己中心的」「観念的」「依存的」という三つの幼弱性が、負の側面を助長させる主要因子である。

啄木の場合も、寺の坊ちゃん育ちという幼弱性に加え、十代後半に編み出した、独特の天才意識が、上京以来のたび重なる文学的挫折の結果、見直しを余儀なくされたために、現実生活への適応性が著しく減弱して、日常生活が困難になるという状態に陥っている。当時の苦境を綴った「ローマ字日記」を繙いてみると、この時期の啄木が「神経質症」発症の瀬戸際にあつたことをうかがわせる記載が随所にみられ、その診断は確実なものと思われる。

神経質症治療の王道とされる森田療法において、日常生活行動の着実な実践を通じて、こだわり思考と行動の悪循環を

断ち切り、神経質性格の正の側面に則つた行動を促すことで、神経質者の生活を立て直す。その意味で、家族の強引な上京と同居は、啄木の自堕落な日常の解消において有効であり、からくもその危機を脱することにもつながった。

その後の紆余曲折は省くが、前述したように、『一握の砂』の特徴は、啄木の「意識歌」という点にあり、その意味でこの歌集はまさに「我を愛する歌」なのである。この歌集の随所に見られる卓抜な表現力や、精緻な編集手腕については、すでに多くの研究がなされてきたが、なぜ啄木が「自我」のありようを、このように好悪両面から短歌に詠みこめたのか、という問題についての検討は、管見の限りでは見当たらない。

本稿において筆者はまず、歌集の題名となった『一握の砂』という書名の由来に着目し、歌集以前の出現例について概観した。次いで、啄木が着想した「砂」の寓意について『一握の砂』の収載歌をもとに考察した。その上で、この歌集の収載歌に見える「生活の発見」歌としての性格を、啄木の神経質症状の改善過程で生起するとされる行動変容として再定義することで、神経質理論の立場からみた、この歌集の魅力についても論考した。

第二章 神経質理論の観点からみた『一握の砂』 歌人・啄木の才能をいち早く見抜いて歌集出版をすすめた、東京朝日新聞社会部長であり、啄木の上司でもあった渋川柳次郎・藪野椋

十は、『一握の砂』の序文に、こう書いた。

「歌集の序を書けとある、人もあらうに此の俺に新派の歌集の序を書けとちや。(中略)手当たり次第に繰り展げた処が、高きより飛び下りるとき心もて／この一生を／終るすべなきか

此ア面白い、ふん此の刹那の心を常住に持することが出来たら、至極ぢや。面白い処に気がついたものぢや、面白く言ひまはしたものでぢや。

非凡なる人のごとくにふるまへる／後のさびしさは／何にかたぐへむ

いや斯ういふ事は俺等の半生にしこたま有つた。此のさびしさを一生覚えずに過す人が、所謂当節の成功者ぢや。(中略)さうぢや、そんなことがある、斯ういふ様な想ひは、俺にもある。二三十年もかけはなれた此の著者と此の読者の間にすら共通の感ぢやから、定めし総ての人にもあるのぢやろう。(中略)そもそも、歌は人の心を種として言葉の手品を使ふものとのみ合点して居た拙者は、斯ういふ種も仕掛も無い誰にも承知の出来る歌も亦当節新發明に為つて居たかと、くれぐれも感心仕る。(後略)」

この序文には、『一握の砂』の特徴が、余すところなく表現されている。ごく普通の分かり易い言葉で詠つた、忙しい日常の中で心に浮かぶあらゆる断片的な思い、すなわち、啄木の言葉を借りれば、いのちの一瞬一瞬が、市井の人々の心に浮かぶそれらと同質のものであるゆえに、広い共感を得るこ

とつながったためである。

では、なぜ啄木は、日常のこうした断片的な思いに気づき、すばやく言葉という形に定着することが出来たのだろうか。この問題について神経質理論から検討してみる。

時間をいったん、明治四二年四月上旬(美質的には三旦)から六月中旬までの「ローマ字日記」の時期にもどしてみる。前年の上京後から約一年間にわたって、定稿だけでも六編の小説を書いたものの、活字になったのは「鳥影」の一編だけという惨憺たる結果は、文学に目覚めて以来、啄木が抱き続けてきた「天才意識」の清算を迫った。「書けるはずという理想の我」と「書けない事実」に苦しむ我」との壮絶な戦いの中で続けられる小説執筆の努力はむくわれず、この時期の啄木のみせる症状が「神経質症」の水準にあつたことは、記載の随所にうかがえる。

例えば、四月一〇日の項から要所を抜粋し、カッコ内に神経質の症候論を併記してみる。なお、以下に示す「ローマ字日記」の表記は、便宜上かな漢字交じり文とした。

「予の到達した積極的自然主義は即ちまた新理想主義である。理想という言葉を我らは長い間侮辱してきた。実際、哀れな空想に過ぎなかった。『Life Illusion』に過ぎなかった。しかし、我らは生きている。あらゆるものを破壊しつくして新たに我らの手ずから樹てたこの理想は、もはや哀れな空想ではない。理想そのものはやはり『Life Illusion』だとしても、

それなしには生きられぬのだ！——この深い内部の要求までも捨てるとすれば、予には死ぬよりほかの道がない。」(「観念的傾向」、その観念に引きずられてものごとの判断が偏る「思想の矛盾」、「とらわれ思考」)

「今朝書いておいたことは嘘だ、少なくとも予にとつての第一義ではない。いかなることにして、予は、人間の事業というものを偉いものと思わぬ。ほかのことより文学を偉い、尊いと思つていたのはまだ偉いとはどんな事か知らぬ時のことであつた。人間のすること何一つ偉いことがあり得るものか。人間そのものがすでに偉くも尊くもないのだ。」(「観念に引きずられてものごとの思考が偏る「思想の矛盾」)

「近頃、予の心の最もものきなものは、社の往復の電車の中ばかりだ。家にいると、ただ、もう、何のことはなく、何かしなければならぬような気がする。「何か」とは困つたものだ。読むことか？ 書くことか？ どちらでもないらしい。読む、書く、というほかに、何の私のあることがあるか？ が、とにかく何かをしなければならぬような気がして、どんなのんきなことを考えている時でも、しよつちゅう後ろから「何か」に追っかけられているような気持ちだ。それでいて、何にも手につかぬ。」(ある感覚に対して過度に注意が集中すると、その感覚はより一層鋭敏になり、その感覚が固着され、感覚と注意が相互に影響しあつて、行動や思考が制限される「精神交互作用」)

「社にいますと、早く時間が経てばよいと思つている。早く帰つて「何か」しなければならぬような氣に追つたてられてゐるのだ。何をすればよいのか分からぬが、とにかく「何かしなければならぬ」という氣に、後ろから追つたてられてゐるのだ。」(自分の現状を直視しないことから生じる「心配性」「不安気分」、その結果生じる焦燥感、自分の眞の欲求から目をそらせる「防衛機制の單純化」)

「予の求めているものは何だらう? 名?でもない、事業?でもない、恋?でもない、知識?でもない。そんなら金?金もそうだ。しかしそれは目的ではなくて手段だ。予の心の底から求めているものは、安心だ、きつとそうだ!」(自分の現状を直視しないことから生じる「心配性」「不安気分」、その結果生じる焦燥感。自分の眞の欲求である売れる小説を書くということから目をそらせる「防衛機制の單純化」)

「去年の暮れから予の心に起こつた二種の革命は、非常な勢いで進行した。予はこの百日の間を、これという敵は眼の前にいなくなつたにかかわらず、常に武装して過ごした。誰彼の区別なく、人は皆敵にみえた。武装した百日は、ただ武者ぶるいをしてる間に過ぎた。予は誰に勝つたか?予はどれだけ強くなつたか?ああ!つまり疲れたのだ。戦わずして疲れたのだ。世の中を渡る道が二つある。ただ二つある。「All or Nothing」一つは凡つてに対して戦ふことだ。これは勝つ、しからずんば死ぬ。もう一つは何ものに対しても戦わぬことだ。

これは勝たぬ。しかし負けることがない。負けることのないものには安心がある。」(「とらわれ思考」の結果としての、ものごとを多面的に見る「両面感」と、ものごとは常に變化して一点にとどまることはないという「運動感」の欠如と、「全か無か思考」)

このように、症候論的には当時の啄木が神経質症圏内の状態を示していたことは明らかである。

第三章 「ローマ字日記」の時代の小説断片「一握の砂」 作

家としての前途に暗雲が立ちこめ、襲い来る深刻な不安の根源を見つめることが恐ろしい啄木が過ごした、七〇日間余の「ローマ字日記」の中でも、さらにどん底に落ち込んで、最も苦しかったであろうと考えられる五月七日に書かれたのが、「一握の砂」という小説断片である。四月には長文がひしめいていたこの日記も、この時期には短くなり、五月七日の項には、こうある。

「七時頃に起してもらつて、九時には弓町へ行つた。そして本を古本屋へ預けて八十銭を得、五分廿のラムプと将棋と煙草を買つた。桔梗屋の娘!話ばかり栄え、それに天氣がよくないので、筆は進まなかつた。それでも「宿屋」を十枚ばかり、それから「一握の砂」というのを別に書き出した。とにかく今日はムダには過ごさなかつた。夜九時ごろ帰つた。桔梗屋の娘!」

わずか数行ほどこの中に、「桔梗屋の娘!」という記載が二度

も見える。この月も、七日の段階にして、はや下宿への支払いと故郷の後輩に対する散財の結果、手持ち金を使い果たしてしまっている。勝手元不如意のために浅草の私娼窟に行くこともできず、「桔梗屋の娘！」との会話を代償としたのだからか。

作家失格を自認することを恐れる啄木が、自らの姿をフィクションという形で描こうとしたのが「二握の砂」であった。

啄木作品の中でもほとんど顧みられることのない小説断片であるが、主人公とされた「半生を旅から旅へと渡り歩いてきた私の様な者」が作中で行う自己告白には、精神医学的に興味深いものがある。主人公は、自己の性癖として以下のものを挙げている。やや長文になるが、要約してみる。

「自分は、いろいろのことをしてきたが、最終的に自己の利益になったものはない。一生懸命になるあまり他を顧みず、周囲と衝突するか、それに嫌気がさして途中で投げ出して、信用を失うかするからだ。

友人関係にしてもそうだ。自分は人好きのする性格のよう
で、何処に行っても四く五人の友達なら、すぐできる。気に入った人と腹藏なく話しているうちはよいが、そのうち、人の欠点ばかりが目につくようになるともういけない。そして、人の長所が自分の利得にはならないことがわかってしまうと、たちまちに飽きてしまつて興味を失う。

困つた時には相談もし、援助もしてくれる友はいるが、貧

乏な自分には、お返ししようとしてもそれができない。そのうちに、会つた当初から、別れが来るのを知っているような付き合い方をするようになり、旅から旅へとさまようようになつた。

そんな自分を振り返る時、いつそ死んだほうがよいと思えてくるが、死ねない。自分で自分を罵つてみても、やはり自分は自分だ。どうにもならず、この先何をすればよいのかも皆目わからない。

自分は、兎のようだとも思う。前肢が短く後肢が長い兎は、坂道を登るには都合だが、自分のように、登ろう、登ろうと焦つてばかりいると、ずるずると坂道を滑り落ちてしまふ。自分は、不幸な兎だ。」

この後、あまりものごとを深く考えない友人との対話の中で「真の幸福とは何か」について論じ始めるが、徐々に筆はそれてゆく。話を、上京前夜の剣路時代のことについて戻す。

「あちこちで食い詰めての剣路行きであつたが、そこでもいろいろなことがあつたため、そういう境遇に耐えられなくなつてしまつた。是が非でも生活を一新せねばならないと思つた時、自分は以前一度踏み出そうとしてそのままにしていた路を選んだのだ。大した抱負があるように人にも言い、日記にも書いたが、それは真つ赤な嘘で、自分を欺かすにはいられなかつたのだ。」と、かなり危うい本音を吐きながら、

「決心でも何でも無い、外の事では食えなかったから唯一つ残してゐる方角へ歩み出さうとしたに過ぎぬのだ。」とまで言い切る。そして、函館を経由して横浜に至るまでの船中の出来事を、こうつづる。

「後ろには嘲笑の声を残し、友人には重い迷惑をかけ、親や妻子を寄食の境涯に落し、此先どうなることか？私には才がある。悲しい哉才だけはある。一心になってやらうとは思っているが、約束の如く半年やそこいらで家族を呼寄せられるに成らうとは、考えられない。」

その後、船内での涙の記憶とともに、「その後の一年！」と書いたところで、中断する。

一見すると、とらえどころのない小説断片に過ぎないようにも思えるが、精神医学的観点から捕らえると、神経質者・啄木の自己分析が、一定の水準にまで到達していたことを明示した、貴重な資料であることがわかる。

まず前段の記載をみると、ものごとへの取り組み方が、強い「執着性」を基盤として「自己中心的」になるあまり、他者との関係が不安定になること。その結果、他者の自分への評価がいつも「心配(性)」になり、ついつい疎遠になって交際が長続きしないこと。これら、みずからの性癖をひと通り反省する、「自己反省性」。自分は自分で、何かをしたいという「強い欲求」を持っているが、その何かがわからないという「観念的」な思考。そして何よりも、月初めの七日の段階

で所持金を使い果たしてしまい、翌月までの暮らしは他者からの援助を深層心理的には当てにしている「依存性」。

次いで後段に移ると、自らの才能への強い「執着(性)」と表裏一体となった「心配(性)」、自らの言動が過大であったことへの反省とともに、将来への不安をありのままにつづっている(「自己反省性」)。

以上、神経質の負の側面を助長させる三つの幼弱性と、現実生活への適応性が減弱して日常生活が困難になる神経質者の四大性格特徴すべての存在と、「ローマ字日記」を記載する日々の中で蓄えられた、「自己反省(性)」の深化をうかがわせる小説断片なのである。

そして注目すべきは、自己の作家活動の限界をこれほど際どくつづつても、四月一六日に見せたような狂気を、啄木が発しなくなっていることである。

「あらん限りの馬鹿真似をして、金田一君を帰した。そしてすぐペンをとった。三十分過ぎた。予は予がとうい小説を書けぬことをまた真面目に考えねばならなかった。予の未来に何の希望のないことを考えねばならなかった。そして予はまた金田一君の部屋に行つて、数限りの馬鹿真似をした。胸に大きな人の顔を書いたり、いろいろな顔を書いたり、口笛でうぐいすやホトトギスの真似をしたり——そして最後に予はナイフを取り上げて芝居の人殺しの真似をした。金田一君は部屋の外に逃げ出した！ ああ！ 予はきつとその時ある

恐ろしいことを考えていたつたに相違ない!

予はその部屋の電灯を消した、そして戸袋の中にナイフを振り上げて立っていた!——」

「どうてい小説を書けぬことを真面目に考えた」だけで、親友である金田一にナイフを向けたのである。「小説を書けない」という事実の直視は、当時の啄木をそれほど動揺させたのである。

第四章 書名としての「二握の砂」 「二握の砂」という言葉は、歌集名として採用される以前に、三度現れる。最初のそれは、明治四〇年九月二〇日刊の「盛岡校友会雑誌」第一〇号に収載された「二握の砂」と題した随想である。長短一〇編の小文からなるこの随想には、啄木の考える文明論に加えて、一定の論理性をもって「我とはなにか」が論じられている。要約のみを示すと、以下のようになる。

「天を見上げよ。足元をみよ。小児の心こそ、真と美をあらわす最上のものである。人生は短い。人生の一分一秒を大切にせよ。真と美を求める心こそ大切である。一切を疑いつくしても最後に残るのは私の存在であり、これを信じ一切の標準とせよ。林中の譚…人間が謳歌する文明は人を怠惰にさせる悪魔の手であり、人の傲慢さと思慮のなさが自然を破壊する。知識は活用してはじめてその価値が生まれるのであり、万事を知って何事も行わないのは、何事も知らず何も行わないことと同じことになる。無垢の昔からこの世に、真と美と

生命は存在するものであるのに対して、同じように昔から存在する善と悪とは、人の行為に対する評価があつてはじめて認識される点で、明瞭に区別される。」

二番目に「二握の砂」が出てくるのは、明治四二年六月二三日（実際は二四日未明）に詠んだ「類につたふ涙のこはず一握の砂を示しし人を忘れず」であり、歌稿ノート「暇ナ時」の同日二〇首目に見える。一首前は「いざ立てむ明日を囚らず昨をみずかく相抱く標号の石」、一首後は「血を見ずば飽くをしらざる獣の本性をもて神を崇めむ」となっており、相互の関連性は認められない。

三番目の用例が、先に示した小説断片である。この三用例を並べてみると、そのいずれにも「我」という主題が隠されていることが分かる。まず校友会雑誌では、「私の存在を信じ、小児の心をもつて、真と美を追求することこそ大切である」と書いて「我」の立ち位置を示した。次に、作歌ノート「暇ナ時」の「類につたふ……」の短歌は、その後の歌集『一握の砂』の冒頭「砂山十首」の二首目に据えられて、歌集の作者を暗示するという重要な役割を担うことになった。最後の小説断片は、一見とりとめのないことを書いているようであるが、自らの性癖がもたらす負の影響を正確に理解し、文壇での活躍を確信しての上京ではなかったという、自らの不安感もありのままに、取り乱すことなく率直に述べている。

「盛岡校友会雑誌」への寄稿は明治四〇年、時期的に見て

函館で執筆されたものと推定される。啄木が函館の海に親しんだことはよく知られており、和歌に詠み、随想に書き、書簡で触れるなど、その推測の正しさを支持する作品も多く残されている。なかでも大森浜をこよなく愛したことは格別で、小品「ハコダテノ歌 小引」には、こんな記載がある。

「友と相携へて大森の砂浜を行くに、北国の磯の香は強くて高し。砂をとって仔細に見、心常に人生を思ふ。目に見るは劫時より不断の咆哮をあぐる大海原なり。耳に聴くは千古の不平を訴えてやまざる波狼の諧音なり。」

手に取って仔細に見た大森浜の砂（一握の砂）に、人生を思った、というのである。文学的野心を抱いての上京後、苦闘の中で自らの人生に重ねて回想したのは、この浜辺であり、砂だったのだと思われる。その意味で、再起を期して暮らした函館の地の象徴である大森浜とその地で執筆した校友会雑誌の記事、上京後の赤心館での報られない奮闘の最中に湧き出した短歌のひとつである「頬につたふ……」の歌、小説執筆の挫折がもたらした覆い難いほどの窮状の中で書いた小説断片。これらはいずれも、啄木がその人生の変革を迫られていた時期の作品であり、人生を思い悩む啄木の脳裏には、その象徴としての「砂」のイメージが満ちていたものと考えられる。

第五章 砂のイメージとその寓意 書名である『一握の砂』とのかかわりから、冒頭に配された「砂山十首」の八首目にあ

る、「いのちなき砂のかなしさよ／さらさらと／握れば指のあひだより落つ」をもって、砂のイメージについて語られることが多い。古くは矢代東村が「はかなさという程の、虚無的なものの象徴」（『啄木短歌評釈』泰山房、一九三五年）とし、渡辺順三は「いのちなき砂の悲しさは、人生のはかなさを象徴し、握れば指のあひだより落つ、という具体的な表現で、その虚無感を強調した」（『青春の悲歌』ナウカ社、一九五一年）と指摘した。岩城之徳も「はかない砂に託して己が生命を哀惜する作者の虚無的な心情が歌われており、「頬につたふ／なみだのこはず／一握の砂を示しし人を忘れず」歌とともにこの歌集の書名を暗示する」（『啄木歌集全歌評釈』筑摩書房、一九八五年）という。昆豊は啄木の文学的命題を「砂と海」に置き、死と生になぞらえた（『苦小牧駒沢短期大学研究紀要』、昭和四六年／昭和五三年）。さらに太田登は、「砂山十首」を「死と再生の象徴劇」と評した（『日本近代短歌史の構築—晶子・啄木・弥一・茂吉・佐美雄—』八木書店、平成一六年）。

以上に共通するのは、いずれも「砂」という素材感に着目したものである。すなわち、巨大な砂山のうちの微小な、とるにたらない部分、握られている限りはまとまりがあるが、もともとはばらばらのもの、という「砂」のイメージから導き出される「いのちなき砂の……」の主題は「はかなさ」と「虚無感」であり、はかない「いのち」を哀惜する気持ちであ

るという(傍線…筆者)。帰らないものを悲しみ惜しむ気持ち
が、哀惜である。

筆者には、『一握の砂』という書名を暗示するほどの両歌が、
ともに虚無感だけを詠ったものとは、とても思えない。なぜ
なら、歌集と前後して発表された歌論である「一利己主義者
と友人との対話」で、啄木は以下のように語っているのだか
ら。作中の「A」は啄木自身、「B」のモデルは、啄木の親友・
並木武雄である。

「A 人は歌の形は小さくて不便だというが、おれは小さ
いから却って便利だと思つている。人は誰でも、その時が過
ぎてしまえば間もなく忘れるような、乃至は長く忘れずにい
るにしても、それを言い出すには余り接穂(つぎほ)がなく
てどうとう一生言い出さずにしまふというような、内から外
からの数限りなき感じを、後から後からと常に経験している。
多くの人はそれを軽蔑しないまでも殆ど無関心にエスケープ
している。しかしいのちを愛する者はそれを軽蔑することが
出来ない。

B 一分は六十秒なりの論法だね。

A そうき。一生に二度とは帰つて来ないいのちの一秒だ。
おれはその一秒がいとしい。ただ逃がしてやりたくない。そ
れを現すには、形が小さくて、手間暇のいらぬ歌が一番便
利なのだ。(中略)おれはいのちを愛するから歌を作る。おれ自
身が何よりも可愛いから歌を作る。」

啄木の主張はこうである。二度とは帰つてこないいのちの
一秒を送る中で、心の中に浮かんでくる切れ切れの生活断片
こそ、歌の源泉であり、言葉として定着しておくことで、そ
の時々々のいのちの一秒は、消え去ることを免れ、後々の愛惜
の対象となり得る(傍線…筆者)。自らのいのちの一瞬を名残惜
しく思うとともに、愛して大切にしようという、未来志向の
姿勢がそこにある。

『一握の砂』の中で「砂」の文字が含まれる短歌は、一
首あり、うち九首は冒頭の「砂山十首」に集中している。さ
らに、類義語である「沙」を含めると一二首となる。歌集の
題名からするとともにとたくさんありそうだが、その割合は収
載歌の1%にも満たない。

- 1 東海の小島の磯の白砂に／われ泣きぬれて／蟹とたはむ
る
- 2 類につたふ／なみだのごはず／一握の砂を示しし人を忘
れず
- 4 いたく錆びしピストル出でぬ／砂山の／砂を指もて掘り
てありしに
- 5 ひと夜さに嵐来りて築きたる／この砂山は／何の墓ぞも
- 6 砂山の砂に腹這ひ／初恋の／いたみを遠くおもひ出づる
日
- 7 砂山の裾によこたはる流木に／あたり見まはし／物言ひ
てみる

8 いのちなき砂のかなしさよ／さらさらと／握れば指のあ
ひだより落つ

9 しつとりと／なみだを吸へる砂の玉／なみだは重きもの
にしあるかな

10 大という字を百あまり／砂に書き／死ぬことをやめて帰
り来れり

300 はてもなく砂うちつづく／戈壁の野に住みたまふ神は／
秋の神かも

304 潮かをる北の浜辺の／砂山のかの浜薔薇よ／今年も咲け
るや

414 浪淘沙／ながくも声をふるはせて／うたふがごとき旅な
りしかな

冒頭の九首は「砂山十首」のほとんどを構成する海の歌、
秋の歌(300)を二首はさんで、残り二首は忘れがたき人人(二)
の章頭歌(304)と章末歌(414)である。304は、明治四十年
当時の函館の大森浜を回想したもので、414は明治四十一年、
船で釧路を離れる際の感興を詠んだものである。「浪淘沙」
とは、「浪が砂を洗う」という意味で、遠く離れている商人の
夫を妻が想つて詠う、という唐詩が残されている。啄木の場
合も、函館く札幌く小樽く釧路と二年弱の間に北海道を巡っ
たという思いが、「波に洗われる砂」というイメージに重ねら
れたものである。故郷である渋民を離れてからの時間とそ
こでの人々との交流の記憶が、函館の砂と釧路の砂との間に

ぎつしりと詰め込まれている。

さて、「砂山十首」である。その構成をみると、前半五首が
明治四一〜四二年の作で、後半五首は『一握の砂』編纂時に
詠まれたものである。前半五首の核となっているのが、1の
東海歌であり、後半五首の核は8のいのちなき砂の歌である。
東海歌が、明治四一年の歌稿ノート「暇ナ時」の最終ページ
に、啄木自らの手になる五行書きで墨書されたのは、明治四
三年四月と推定される。この歌は、同年七月の「創作」自選
歌号の筆頭にも採録されており、自らの処女歌集出版時には
巻頭歌とする構想が啄木の念頭にあったことは、疑う余地の
ないところである。

後半五首の核となる歌について、近藤典彦は、土岐哀果
「NAKIWARAI」の次の歌によつて触発されたと推測する
（「一握の砂」の研究、おうふう、平成一四年）。

Waga Inochi-

Suna no Tokei no sarasaranu

Oto no nanimani Kami ni kaeru ka!

8 いのちなき砂のかなしさよ／さらさらと／握れば指のあ
ひだより落つ

哀果の歌に対する啄木の換骨奪胎ぶりが興味深い。哀果の
歌における砂は、時の過ぎてゆく様を示す存在に過ぎないが、
啄木の歌における砂は、握ろうとしても果たせず、指の間か
ら、あの独特の感覚をもつて滑り落ちてしまう、人の力では

どうにもならない存在である砂を示しつつ、その滑り落ちる姿は砂時計を連想させ、かつ、その時計が捉え得る出来る時間の短さをも重層的に表現した奥深いものになっている。すなわち、砂の素材感に加えて、「握る」という行為が暗示する時間の流れの要素をも歌い込むことで、砂という存在を際立たせることに成功している。

なお「砂山十首」には、一首だけ「砂」の文字を含まない歌がある。

3 大海にむかひて一人／七八日／泣きなむとすと家を出でにき

「砂」の代わりに「海」の字が組み込まれている。啄木は、海が大好きだったようであり、洪民を出て青森から函館に渡る陸奥丸船内で記した「明治四十丁未歳日誌」には、こうある。

「五月五日 —— 青森 —— (陸奥丸) —— 函館 —— 偉いな

るかな海！世界開発の初めより、絶間なき方量の波浪をあげる海原よ、抑々奈何の思ひをか天に向つて訴へむとすらむ。

海は動けり、常に動けり。これ不断の覚醒なり。不朽の自由なり。(中略) 我は世界に家なき浪々の逸民なり。今来つて此海を見たり。海の心はこれ、宇宙の寿命を貫く永劫の大威力なり。噫、誰れか、海を見て、人間の小さなを切実に感ぜざるものあらむや。我が魂の眞の恋人は、唯海のみ、と、我は心に叫び。」

ここで精神医学的観点から、「砂山十首」を読み解いてみたい。神経質症の類型として、不安 (Anxiety: A)、心気 (Hypochondric: H)、強迫 (Obsessive: O) の各型が知られている。些細なことが気になる H、その結果予期不安が高まる A、過去の失敗経験などに捕らわれるあまり観念上の防衛行為が自己目的化する O、の症状は、固定的なものではなく相互に移行し、時には併存して、現実の行動が妨げられるのが、神経質症の特徴とされる。「砂山十首」のうち、1、2、3、5、7、9 には H、3、5、9 には A、そして 4、7、10 には O の特徴がうかがえる。特に 4 と 10 の歌には、日常生活の困難からの逃避と、一定の代償行動による、心の混乱からの回復の意図が明瞭である。その意味で「砂山十首」は、神経質者の症状の多彩さを、独特の存在感を持つ砂に託して表現した、啄木ならではの物語なのである。

第六章 「生活の発見」歌と『砂』の「握る砂」性格として

の神経質を、わが国で系統的に理論立てた精神医学者である森田正馬(まさたけ)(明治七年〜昭和十三年)は、多様な神経質症の症状の背後には、内向的、自己内省的、心配性、小心、敏感、完全主義的性格等の神経質性格が、共通して認められるという事実を見出した(「神経質の本態と療法」白揚社、昭和三五年)。そして、神経質そのものは、人間の性格傾向を表現したもので何ら病的意義はないこと、その性格傾向の負の側面が前景に出ることによって社会生活に支障をきたした

場合にのみ、その症状を神経質症と呼ぶこと、神経質症の症状は性格傾向の偏りを是正することで速やかに解消するばかりか、その性格傾向の備えている正の側面に気づくことによって、社会生活上の好循環が生まれ、そうした気づきの連続によって性格の陶冶も望まれることを主張した。大正八年、当時ドイツ精神医学の影響を強く受けていた精神医学会での「精神病人格」に対する議論に一石を投じて、この理論をもとに森田療法を創始した（『森田正馬全集』三巻、白揚社、昭和四九年）。このユニークな治療方法は、人の感情の動きと、それにまつわる行動様式に、一定の法則性があることを見抜くことによって創始されたものである。その治療理論は、まづ事実のあり様をありのままに見つめること（森田はこれを「事実唯真（じじつただしん）」と呼んだ。）から始めて、神経質症発症において重要な、「思想の矛盾」や「精神交互作用」の結果として起こる「とらわれ」という特有の心理的メカニズムを打破することによって症状を改善に導くものである（『森田精神療法の実際』白揚社、昭和五一年）。

森田の卓見は、まず行動に働きかけることで感情を動かし、感情が変化することで凝り固まった観念を変容させることで、症状打破への道を拓こうとするところにある。

さまざまな観念上のとらわれのために日常生活が困難な段階では、症状受容に徹して衣・食のみの時間以外は「臥褥する」時期を設け、一定の期間を経た後は、行動欲求を徐々に

満たすための作業期を設けて、軽作業↓中作業↓通常作業を経て生活を立て直し、社会復帰に導く治療を行う。啄木の場合、「ローマ字日記」の時期が症状受容期に相当すると思われるが、特にその症状の強かった時期の日記をみると、八日から一三日までの六日間をひとまとめにして記載し、最後の一日の項には、

「社にも行かず、何もしない。煙草がなかった。つくねんとして又田舎行きのことを考えた。国の新聞を出してみているいろと地方新聞の編集のことを考えた。（中略）田舎！ 田舎！ 予の骨を埋むべき所はそこだ。俺は都会の激しい生活に適していない。一生を文学に！ それは出来ぬ。やつて出来ぬことではないが、要するに文学者の生活などは、空虚なものに過ぎぬ。」

と、苦しまぎれの述懐を書き連ねている。
明けて、翌・一七日。
「午前は凄まじいばかり風が吹いた。休む。（中略）今日も予は田舎のことを考えた。そしてそれだけのことに日を送った。」

「如何にして田舎の新聞を経営すべきか？ 又、編集すべきか？」それだ！（中略）
夜枕の上で「新小説」を読んで少しく思い当たることがあった。

「National life」それだ。」

ふたつの「それだ！」が並んでいるが、後の方の発見は大きかった。啄木が読んだのは、田中喜一（王堂）談「近世文壇に於ける評論の価値」であるが、評論の持つ可能性に目覚めたことで、自らの自然主義を模倣した小説における行き詰まりを、National life を吟味する評論を通して打破する方向性を見出したものと思われる。

その後の家族との同居、節子の家出という衝撃を経て、啄木は自堕落な生活を卒業し、田中王堂的な「心身両面の生活の統一と徹底」の実践に励んだ。それはまさに、森田治療理論における社会復帰期の活動としても合目的なものであった。啄木流の「生活の統一」の徹底は、家族の生活の維持継続に過度に重心が傾いたものであったため、同じく「文学中心の生活」に浸っていた「ローマ字日記」時代以前の生活と同様に、バランスの悪いものであった。その両極端の生活経験を経て、ついに啄木は、家族の扶養義務と自らの文学活動のバランスをとるべく、作歌活動を再開した。

その頃創刊された「創作」に刺激を受けて確立された「啄木調」短歌の質の高さが、洪川柳次郎の目に留まり、紆余曲折はあったものの処女歌集である『一握の砂』の出版につながったのである。

森田療法の治療理論によると、気分や観念本位の生活から、現在の課題を事実本位に解決するという日常的な実践を積み重ねていくことによつて、観念と行動との間の悪循環が打破

されて神経質症状が軽快していくと、性格の陶冶が起り、素直な感情が涵養されるようになる。森田はこれを「純な心」と表現して、それまで庇護を受けてきた他者に対する自然な感謝の念として表出されるという。

啄木が明治四三年春に、春陽堂に出版を断られた歌集『仕事の後』（二五五首）が、同年夏頃までに三七五首に増補された上で、同年一〇月四日に東雲堂に持ち込まれ、買い取られることが決まるや、啄木は猛烈な勢いで歌集の改定を進め、その後の約一〇日間で二六〇首もの歌が増補されて、新たな章が編まれた。具体的には、まず一〇月一〇日までの約七五首は「忘れがたき人々（二）」に、次いで二三日の夜までの七九首は「煙」の章に収められたが、追加詠の対象として、北海道や盛岡・洪民の人々のことが念頭に浮かんだこと自体、この純な心の発露であったと考えられる。

歌集の章立てにも、当時の啄木の心理は明瞭に反映されている。「我を愛する歌」と「手套を脱ぐ時」には、ものごとをありのままに見る啄木の姿勢が反映されており、この事実本意のものの方見方は、自身の神経質からの回復にも有用であったはずである。さらに、「秋風のこころよさに」には、明治四一年秋に受けた親友・金田一京助の厚意への感謝が、「忘れがたき人々（二）」では北海道滞在中に親交を結んだ親友・知人たちへの感謝がつけられたのは、啄木の素直な心情のあらわれであった。

啄木が、巧まずして森田治療理論に沿った行動をとった時のことを描写した歌が、『一握の砂』にみられる。

439 朝の湯の／湯槽のふちにうなじ載せ／ゆるく息する物思ひかな

119 ある日のこと／室の障子をはりかへぬ／その日はそれにて心なごみき

267 さらさらさらと雨落ち来り／庭の面の濡れゆくを見て／涙わずれぬ

439 の初出は、『創作』明治四三年五月号であるが、『一握の砂』では「手套を脱ぐ時」の三首目、復刻版では章題を示す頁から三頁目で、見開き四首の筆頭という重要な位置に置かれている。一方、「ローマ字日記」四月二一日の項にはこうある。

「昨日は電車の中で、夏帽をかぶった人を見た。夏だ！九時に台町の湯屋へ行った。ここは去年東京に来て赤心館にいた頃、よく行きつけた湯屋だ。一枚ガラスの窓には、朝のすがすがしい日光が、青葉の影がゆらめいていた。予は、一年前の心持になった。赤心館のひと夏！(中略)予はその頃より健康になったからだを洗いながら、追懐にふけた。入浴と追憶とは予にいくらか熱した若い快活さを与えた。予は若い。人生はそんなに暗くも苦しくもない。もし予が金を送らずも、わが母と妻は何とかして食っていくだろう。今日から汽車の時間改正のため、出勤は一二時、引けは六時。夜、平出から原稿催促の電話。」妻子への仕送りをせぬことを正当化すると

は無責任きわまりないが、この記載翌日の二二日には早起きをして歌を作り、その次の二三日には、夜までかかって「莫復問七十首」をまとめ、以下の言葉でこの日の日記を締めくくっている。「何に限らず一日暇なく仕事をしたあとの心持は例うるものもなく楽しい。人生の真の深い意味は蓋しここにあるのだろうか！」このように、四月二〇日までの鬱屈とは様変わりした記載が、以後数日間続く。

森田理論に即して言えば、入浴行動に「事実本位」に取り組み、入浴行動そのものに専念した結果、啄木の意識は、書けない先の自分の姿を恐れる「気分本位」から、目の前の入浴という「目的本位」になっていたはずである。感情の法則に沿って言えば、「書けない自分」と、その事実を直視して認めたくない自分」との間の戦いによって、増幅され続けてきた不愉快な感情と気分本位のすさんだ生活態度が、入浴という些細な、しかし日常生活に深く染みこんだ行為のもたらす「快」の感情で、一時的にせよ消退したことを示している。そのことは、平出からの原稿催促に応じて作歌に励んで締め切りに間に合わせるといふ、目的本位の行動につながって、それまでの気分本位の行動は一時的に影を潜める。

この一連の経過はまさに、感情の法則⑤「感情は新しい経験によってこれを体得し、反復によりますます養成される。」好例といえる。筆者には439の作歌時の啄木の脳裏に、この明治四二年四月二一日の入浴のことがあったと思われるならな

い。

119 (初出：明治四十二年一月「すばる」)も439同様に、日常生活に深く根差した障子の張替という行為に、ひと時没頭することで、感情面での変化が起こったことを記しているが、267 (作歌：明治四十一年九月二日)はやや趣が異なる。歌意はおおむね「降り出した雨が庭を濡らす様を見ることに集中していたら、それまで感じていた悲しみが薄らいだ」であるが、ここには感情の法則①「感情は、そのまま放任すれば山形の曲線をなしひと登りしてついには消失する。」が示されている。すなわち、快・不快にかかわらず、注意し続けなければ、感情は自然に消失して、留まり続けることはない、ということである。

267も「秋風のころよきに」の章の一〇頁目、見開き四首の冒頭に置かれている。「一握の砂」の題意に深くかかわる、「さらさら」という字句が、8の「いのちなき砂の……」歌と共通して含まれていることから、「雨を見つめ続けた時」から「悲しみが薄らいだことに気づいた時」までの時間の流れを、詠出時ではないにせよ、少なくとも歌集編纂時には、題意との重層的な響き合いを意図して書き込んだ可能性も考えられる。

これら三首はいずれも、「とらわれ思考」に支配されていた啄木が、日常生活に根ざした行動をとることで、そこから脱するという神経質理論のダイナミズムの例証となった、「生活

の発見」歌なのである。

第七章 まとめふたつの「一握の砂」と啄木の「我」 その原型として構想された歌集の題名が『仕事の後』であることが示すように、『一握の砂』は、生活の細部を意識することで触発されてくる啄木の心理を、持ち前の卓抜な表現力で定着させる「啄木調」の歌を縦横に配することによって、みずからの歌論「歌のいろいろ」の中で提唱した「忙しい生活の間に心に浮かんでは消えてゆく刹那々の感じを、歌の形で定着させることで、その愛惜心を満たすことが出来る(大意要約)」の見事な実践例となり、その名を後世に残した。

さらにこの歌集は、歌の置かれた位置が歌の意味を開顕するという、まれに見る方針で編集されたが、この着想には啄木の神経質性格が大きく寄与した。すなわち、「我的存在を信じ、小児の心をもつて、真と美を追求することこそ大切である」と書いて、「理想の実現に燃える「我」の立ち位置」を示した校友会雑誌の随想と、自らの性癖がもたらす負の影響を正確に理解し、文壇での活躍に確信をもつての上京ではなかったという、みずからの不安感をありのままに、取り乱すことなく率直に述べるというところにまで自己分析が深まった「あるがままに自己を見つめた時期」の標柱としての小説断片。精神的浮き沈みの両端の時期に書かれた、これらふたつの「一握の砂」があったからこそ、啄木は、みずからの歌論に忠実に『一握の砂』を編むことが出来たともいえよう。

「生活の細部を意識する」ことは、換言すればまさに「生活の発見」ということになる。その発見の場は、急速にすすんだ近代化の結果、就業構造が変化して、仕事や学びの場を求めて地方から都市へと人口の集中がすすみ、暮らしのかたちには大きな変化が起こった、明治時代後半の都市社会である。

筆者は前作「砂山十首」から読み解く「握の砂」の世界において、「都市住民」の象徴として「砂」を位置づけることを提唱した。そのように読んでいくと、「砂」は住民、「砂山」は住まい、「砂浜」は都市社会と考えられ、波に洗われる浜辺のあり様は、さながら勤め人の一日を想起させるのである。では、「砂の玉」とは何であるのか。

乾いた砂は軽く、握ろうとしても、指の間からサラサラとこぼれ落ち、決してまとまることはない。砂は海水を吸えば、握って球を作れることもでき、驚くほどの重さとなる。海水を湛える海、それは歌集冒頭の東海歌の「海」であり、明治四〇年の日誌で啄木が、「我が魂の眞の恋人は、唯海のみ」と叫んだ「海」なのである。天才主義に裏打ちされた、啄木の理想を吸って、砂の玉はふくらみ続けた。その砂の玉は、北海道流浪の旅の中で、その後の都市生活の中で、波浪に洗われ続けることになった。

乾いた砂を湿らせるものには、もうひとつ、涙がある。生命の象徴である涙を吸って玉となった砂には、その涙の源と

なった生命の重さが宿る。市井の勤め人として世の中を見つめるといふ立場を終生くずさず、青春を卒業した中年ならではの暮らしの哀歎を詠い続けた啄木の短歌は、まさに「なみだを吸へる砂の玉」なのである。

近代化の時代は、「われ」重視の時代でもあり、広がった自意識は、青春・病氣・貧困・都市の孤独と望郷の切実など、短歌の主題となり得る領域を広げた。啄木は、短歌の持つ「短詩型」という手軽さに着目して、その自意識が捕えた「切れ切れの生活断片」に明晰かつ繊細な言葉を与えて、分かり易い「心の索引」とした。それは、「日記がわりの短歌」「しかも題材は日々の暮らし」「時間がないので用語は平易」「そんなことなら、自分にもあった」と同意してもらえる短歌なのである。詠うことが日々のいのちの愛惜につながることを基本としながらも、日常の食事に供される「香の物」のような短歌を目指したのである（「食ふべき詩」）。

筆者はさきに、哀果の歌を換骨奪胎した啄木の歌には、砂の素材感に加えて時間の流れの要素も歌い込まれていることを指摘した。この時間の流れは、砂を握るという行為を通じてしか知り得ないものであり、それは、『「握の砂」という書名をひとまとまりにして捕らえてこそ、導き出せるものである。』「握の」「砂」と要素ごとに分けて考えては、砂の素材感が相対的に大きくなってしまい、啄木が潜ませた歌意が希薄化してしまう恐れが大きくなるからである。

絶えず波の打ち寄せる砂浜という社会に、「砂」たる民が描いた壮大な模様、それが『一握の砂』の世界なのである。

小説は応募13篇活況と言えろが、内容も多様で上限枚数いっぱい力の力作も多く、その分作品の選考にはいささか心を勞した。

山野みちこ「あこがれ」 情意とも均齊のとれた上質な作品として最も心に残った。

函館山の山頂などで開かれる映画祭に、友人と三島由紀夫原作の「美しい星」を観に行くまでの話。三島作品でも異例のSF小説がどんな映画になっているのか。「美しい星」が発表された年、主人公寿々は15才。愛読書は叔母から貰った料理の本だった。母とふたり暮らしの日常で叔母の家でくつろぐ時間、ステレオのある居間や叔母のホットケーキと紅茶、そして深夜の寢床で聞いた音楽好きの叔父が隣室で口ずさむ「君が代」の声などが印象的に描かれる。閉じこもり気味の高校時代を伴走してくれた友人

優子のこと、語り合った三島作品、「金閣寺」や「豊饒の海」などに後半「美しい星」への思いが重なる。自分達は地球に飛来した宇宙人だという意識に目覚めた一家の物語。三島が「思想小説」として書いたという作品は、地球を核のない美しい星にしようとする一家の物語だった。小説に書かれた五十年前の時代背景は現在と相似だと思ふ。それは極めて今日的な小説だと思ふながら寿々は優子とともに、星空の山頂にゆくゴンドラに乗る。

衝撃的な三島の死から半世紀近い。昭和の戦後を象徴的に駆け抜けた三島由紀夫の名を平成も終ろうとする今文学部の学生が知らないという。あらためて三島由紀夫の扉の前に立とうという寿々の思いはさまざま感慨を誘う。抑制された表現は含意と詩趣に富み、好個の短篇として仕上がっている。

菊地政義「庭に咲く薔薇」 函館在住のアマチユア画家がロンドンの国際展でグランプリを受賞する。その絵が尊

敬する近在の画家の絵の模写だと抗議する美術愛好家の電話から一連の事件が推移する。発端からなかなか考えられた展開で興味深く読ませる。視点人物の中心はもと美術教師の愛好家だが、受賞者や家庭、報道した新聞記事や記者の対応、模写された画家などそれぞれの視点をほどよく配置して事態の展開を客観的にわかり易く描く。芸術作品の模写問題は古くて新しい。それを函館と近郊当事者の話として物語化したところに話の目新しさと実感がある。中心になる美術愛好家の美術を愛する心情が真摯に描かれているので事の成り行きも肯ける。限られた紙数で後半やや追われた書き方になると、感嘆符多用の表記は気になるが、興味ある題材を一篇の物語として書きあげた筆力と創意を評価したい。

畠田実里「笑顔」 小学校教員の主人公が、帰郷する汽車で乗り合わせた同僚の女先生の笑顔から遠い記憶を蘇らせる。どもり癖で内気の少年が小学校

教員になるまでの立身譚。小学校からの節目の話が一人称で語られるが、中心になるのは小学校時代に出会った小さな修理工場の爺さんとの縁。その勤めて働きながら通信教育を受け念願の小学校教員になるという話の道筋に、後半小学校時代の先生の話が入り、中学を出た頃出会った少女の笑顔が冒頭の女先生の笑顔に重なって終るとい構成は、時間の出入りが多い話の展開で、話の焦点が拡散するが、入選歴十分の作者の意欲的な話の作りは評価したい。

日高光「お客様は神様です」 高校時代は期待された陸上部の選手だったが今は宅配便のハンドルを握る、仕事にプライドがあったが不在便の多い長時間労働の日常に気持ちが悪れていく。理不尽な客に気持ちが悪れたガソリンスタンド時代の記憶。二人暮らしの母はお掃除おばさんとして便器や床など懸命に磨いているが、客や上司の目に入らない。市役所でゴミの集配でがん

ばっていた父が家を出たのも評価されない仕事の現実がもどった。世の中に必要だが割に合わない仕事にプライドを持つて働いても、客と利益優先先社会の徒勞と理不尽さは、メッセージとしてよく伝わる。ただ物語としてはそこから動いて筆力のある展開に匹敵する話の転結がほしかった。

高橋剛治「円環するカレンダー」 円環するカレンダーのように故郷に戻り、そのカレンダーには流行った歌を含め多くの記憶が重なっていると書く。その言葉のように東京の会社を定年でやめ妻と共に四十年ぶりに函館の実家に戻り暮らし始めた日々と、折々に流行した歌の記憶を描く。回想の起点は大学を出て赴任したK市の時代に書いた詩の一片で、詩を書いた翌年突然上京した自分の心の謎にあらためて思い至るという終盤がなかなか興味深い。流石した歌を巡るいささか煩瑣な記述など全体的に平板な語り口で、終盤物語として話が効果的に立ち上がるまでに

は至らなかったことが惜しまれる。

「未来(あした)」も佳作圏内で心が迷った。アパートにひっそり暮らす老女の日日、体も不自由で外出もままならずヘルパー頼りで節約を心がける日々を、下を向かず肯定的に描く筆致がすがすがしい。夢と現実の境に現れるピエロ君のことがもう少しうまく書いていけば、と思いつつ心に残った。

「ゆらぎ」は長年の妻を失った日日に現れた老いの華やきのある女性との出会いと別れ。展開にもう少し趣向がほしかったが、年齢を感じさせない光沢のある文章に感心した。

以下現実の中の非現実を描く作品が重なった。**「六〇才の真実と挑戦」**は近未来としているが現代に近い定年退職者の話。第二の人生を演劇に求めて挑戦するところで終る話の趣向が物足りないが、着実な筆致で読ませる。

「ボラリス」は女子高生の家に住みつけた女の子の霊。太平洋戦争時攻撃された船で両親と共に亡くなった三才の女

の子が、あの世にゆきはぐれて血縁の家にいる。大叔母に当るその子とのふしぎな生活。話の運びが弱い、静かな語り口に雰囲気がある。「レイニーキヤッツ&ドッグ」は転生譚。筆力ある

作者に期待したが前世を辿る転生譚が犬と猫のワンニャン物語になる展開は、必要な細部が欠けているので書き手だけが楽しむ話になっている。「やまゆりの花」も転生譚、現代から近世のアイヌの時代にタイムスリップする話は興味をひくが、アイヌの若者の運命を描く筆が類型的なので興味が伴わない。

「ヒーローズダイアリー」函館の小学六年生の姉弟。同時に見た夢が現実となり、この世界と別次元の世界をつなぐファンタジーが大森浜で急展開する。

ゲーム感覚の何でもありの展開で、限られた紙数に話の脈絡を求めるのは無理だが、広大な話の序章らしいものをまとめあげた筆力と意欲は認められる。

「北海道K町UFO飛来状況」飛来するUFOにまつわる話だが、断片的な語

り口で作品として評価するまでには至らなかった。

評論一篇は昨年につづく作者の力作
評論。

水関清「ふたつの『一握の砂』と啄木の『生活発見』」

このところ連続して

『ローマ字日記』から歌集「一握の砂」

に至る啄木晩年の精神世界を専門的な

立場から医学的考察を折りまけて書く

考察が多面的で要を得て書くのは難しいが、本稿ではまず「一握の砂」を意

識歌として「ローマ字日記」の時代から啄木の自己分析が内省的に深化した

ことを指摘しその過程にふたつの「一握の砂」の存在をあげる。盛岡中学時代に寄せた随想と、同名の小説断片で、

とくに小説断片の考察が興味深い。歌集の考察では「砂」のイメージに注目

し、従来言われている「はかなさ」「虚無感」だけでなく「いのち」を哀惜す

る気持ちに未来志向があることを、「握

る」という行為の時間的要素に注目し

て指摘する。また日記や歌集に神経質

症の多彩な症状が見られるという精神

医学的な観点から森田正馬の治療理論

が援用され、「ローマ字日記」の症状受

容期から、家族の同居などによる社会

復帰期の活動として「一握の砂」に至る啄木の事情が、「とらわれ思考」に支配されていた啄木が日常生活に根ざした活動をとることによる生活発見歌だったことを「砂山十首」を中心に考察している。前作などとやや論旨が重畳するが、それも重ねて評価したい論考になった。

まとめに生活の発見歌としての「一握の砂」に明治時代後半の都市社会の姿を見立て、波に洗われる砂浜のありようは勤め人の一日を想起させると書いている。それまでの実証的な論の積み重ねからやや飛躍するが、興味深く読んだ。

『御伽草子・うらしま太郎』と乙姫の恋

木村 裕 俊

一、古典の「浦島太郎」

「浦島太郎」の物語は、江戸時代には子供たちに聞かせる御伽草（おとぎばなし）の一つでありましたが、『御伽草子』という大人の「読本（よみほん）」でもあったのです。特に、夫婦が仲良く暮らすための読み物として、若い人たちには人気があったようでした。

これが明治に入ると、子供たちに聞かせるためだけの童話に変わっていきました。そして尋常小学校の「教科書」となり、「小学唱歌」にも取り入れられたのでした。こうした変化に伴って、話の内容も少しずつ変わっていったようでした。

本来「浦島太郎」の物語は、『日本書紀』に書かれた非常に古い、神仙思想を反映した古典の書き物だったのです。『日本書紀』は、七二〇年に成立した歴史書ですが、物語の舞台は「雄略天皇」の項に載せてあることから、西暦四〇〇年代後半を意識して書かれたものようです。『日本書紀』には、次のように記述されています。

「浦嶋子（うらのしま）と読む、浦島太郎のこと。」

は、丹後国（現・京都府）の住人であった。舟に乗って釣りに出掛けたが、捕らえたのは大亀であった。するとこの亀、たちまち女人に化けた。「浦嶋子」は、感ずるところがあつてこれを妻にし、二人は海中に入つて蓬莱の国へ赴き、遍歴して仙人たちに会つた。」とあります。

この「浦島太郎」の物語は、他にも神仙思想を含む物語として、いくつもの史書に取り上げられています。例えば私たちの知っている『古事記』では「海幸・山幸」と関連して龍宮が登場し、『万葉集』でも「水の江の浦島の子」として紹介されています。その中でも詳しく書かれているのは『丹後国風土記』で、具体的な物語として叙述されています。平安時代に入つてもその勢いは止まらず、種々の「浦嶋子伝」が叙述されるようになりました。

面白いのは、中国の徐福伝説との関係です。徐福は秦の始皇帝に仕える仙術家でした。ある日徐福は始皇帝の命を受けて、東海の彼方にあるという蓬萊山に不老不死の薬を求めて、探索の旅に出掛けましたが、そのまま帰って来ませんでした。中国から見て東海の方は日本であり、徐福

は日本に蓬萊山を見つけ、不老不死の薬を探し当て、日本の国で長く生きたのではないか、徐福と一緒に連れて来られた童男童女の子孫は、日本の民になったのではないか、という言い伝えがあります。この徐福伝説は日本各地に残っています。

徐福と浦島太郎は、どちらも蓬萊山を訪れています。『日本書紀』でも、「浦嶋子」は仙衆と蓬萊山で会ったことになっていますから、乙姫と共に三人で対面していたかも知れません。浦島太郎が蓬萊山にいたのは、雄略天皇の時代から七百年ほど遡った頃だとすると、紀元前三世紀頃にあたります。徐福はその頃、始皇帝に命じられ東海に漕ぎ出した時期であり、ちょうど年数が合います。

冒頭で述べたように、明治以降の「浦島太郎」は童話に変わってしまいましたが、古典『日本書紀』でも浦島太郎は乙姫を妻にしていますし、『御伽草子』ではさらに色濃く乙姫が浦島太郎に恋する場面が描かれています。本稿では、現在も読まれている『童話浦島太郎』と江戸時代に読まれていた『御伽草子』の中の「うらしま太郎」との違いを比較しながら、「乙姫の恋」について検討していこうと考えています。

二、童話になった「うらしま太郎」

まずは、私たちの知っている「浦島太郎」についてです。

以下の文は、明治四十三年の『尋常小学読本』第二期国定教科書に書かれている「浦島太郎」です。原文は、カタカナと簡単な漢字で書いてあるのですが、どうも読みにくいので私たちが読みやすい程度の、現代仮名づかいに致しました。

むかし、浦島太郎という人がありました。ある日海辺へ出てみると、子供が大勢で亀をつかまえて、おもちゃにしています。浦島は可哀そうに思って、子供からその亀を買って、海へ放してやりました。

それから三三日経って、浦島が海辺で釣りをしていると大きな亀が出て来て、「浦島さん、この間は有難う御座います。お礼に龍宮へ連れて行ってあげましょう。私の背中にお乗りなさい。」と言います。浦島が喜んで、亀に乗ると、だんだん海の中へ沈んで行って、間もなく龍宮の門へ着きました。

龍宮には乙姫というきれいなお姫様が居て、浦島の来たのを大層喜んで、色々なごちそうをしたり、様々の遊びをして見せました。浦島は面白くてたまりませんから、龍宮のお客様になって、家へ帰るのも忘れていました。

うまいごちそうも毎日食べると、しまいには嫌になります。面白い遊びも毎日見ると、しまいには飽きてきます。

その内に浦島は家へ帰りたくなったから、ある日乙姫に、「色々お世話になって有難うございますが、あまり長くな

りますから、もう家へ帰りましょう。」と言いました。

乙姫は「それは誠にお名残り惜しいことで御座いますが、それではお別れの印にこの箱をお上げ申しましょう。しかし決して蓋をお開けなさいませぬ。」と言って、玉手箱という立派な箱を渡しました。

浦島は箱をもらって、また亀の背中に乗って海の上へ出て来ました。家へ帰ってみると、驚きました、父も母も死んでしまつて、自分の家もありません、友達もみんななくなつて、知っているものは一人もありません。何だか悲しくて、悲しくてたまりません。あまり悲しくなつたから乙姫の言ったことも忘れて、玉手箱を開けて見ると、中から白い煙が出て、浦島は俄かにお爺さんになつてしまいました。

このような内容です。そう長くありませんし、難しいこともありません。内容的にも、私たちが一度は聞いたことのある「浦島太郎の物語」そのものですし、現在語られているものと変わりないことが分かります。明治時代に入つてからの「浦島太郎」は童話ですから、男女の愛をテーマにするのは相応しくないと考えたのでしようか、その部分は省略され単純な分かりやすい構成にしているようです。

三、『御伽草子』の中の「うらしま太郎」

(一) 亀を助けて乙姫に会う。

さて今度は『御伽草子』に取り上げられている「うらしま太郎」を、私たちが知っている「浦島太郎」と比較しながら、何がどう違っているのか、検証しながら読み解いていくこととしましょう。

まずこの物語の冒頭で、どこの地域の物語であるのかをはつきりさせています。舞台は、「丹後国與謝郡日置里筒川村」という所です。『御伽草子』では単に「丹後の国」とあるだけですが、『丹後国風土記』などには詳しく書いています。この住所は現在の「京都府与謝郡伊根町」の辺りであり、今は「浦嶋神社」がある所だとも言われています。ついでに名前も、「浦島太郎」を「浦嶋子（うらのしまこ）」と呼んでいます。入江のある浦の働き者の青年という意味が隠されているように思えます。

この地域、丹後の国に「浦島」という人が住んでいました。そこには太郎という年が二十四・五歳くらいのもとも親孝行な青年がおりました。働き者の漁師で、朝から晩まで魚を釣り、海藻を採っては父や母を助けていました。

今日も海へと漁に出かけました。あちらの岬に周り、こちらの島に出では、また入江に戻つたりしていました。そして江島の磯というところで釣りをしていた時でした。大きなカメが針にかかっていました。太郎は釣り上げられたカメを見て「おまえは命あるものの中でも、鶴は千年、亀は万年といわれるほどに長生き者だ。釣れたからといって

このまま食べてしまつのはいかにも惜しい。助けておろすよいか、おまえは私に助けられたこの恩を決して忘れてはならないぞ。」と言ひ聞かせてこの亀を海に放してやりました。

浦島太郎が亀を助けたのは明治以降の物語と同じですが、子供たちにいじめられていたのではなく、釣り針にかかってしまったのです。これを放して恩着せがましく意見して、放してやるのですが、このことが後に乙姫との結婚という形で帰ってくるのです。

太郎はこの日、日暮れ時まで釣りをして、いつものように家に帰りました。そして、また次の日も海に出て、同じように釣りをしていると、はるかかなたの海上に、見たことのない小舟が漂っているのを発見しました。太郎は気になってしばらく見ていると、次第に太郎の舟に近づいてきました。なんと、その小舟の中には美しい女の人がたった一人であらずんでいて、波間に揺られていたのです。

太郎はその女の人に「あなたは、どこから来たのですか。こんな恐ろしい海を、たった一人で舟に揺られて、どうしたのですか。」と声を掛け聞きました。女の人が太郎に申すには「私は、よその国で用事があつて、都合良く出る船に乗せてもらいました。しかし途中で嵐に遭ひ、船が難破して転覆してしまいました。大勢の人がおぼれてしまいました。私が、私は近くに親切な人がおりました、この小さな舟に

乗せて助けてくれたのです。しかし、何日も波に揺られ海の上を漂ひ、生きた心地がしませんでした。いつ岸辺に着くのかと思案しておりましたが、心細く心配でなりません。いま、あなたにお会いすることが出来たのです。

ここで、こうしてお会い出来たのは、とてもこの世のご縁とは思えません。どうかこの私を助けて下さい。」と言つて、さめざめと泣きました。太郎も、さすがに木石のように情けの無い者ではないし、その女の人をあわれと思ひ、小舟の綱を取つて自分の方に引き寄せました。

さて、その女の人が申すには「私は、蓬萊の国から来た乙姫と言います。どうかお願いですから、私を蓬萊の国まで送つて下さいませんか。ここでこのまま見捨てられると、私はどうしようもなくなります。」といいました。そして太郎に必死で訴え、泣きながら懇願しました。太郎もかわいそうに思ひ、乙姫の舟に乗り込み、沖の方へととき出したのでした。乙姫の言うままに従ひ、その方向に十日余りも舟を進めると、ようやく乙姫の故郷である「蓬萊の国」にたどり着くことが出来ました。

舟から降りてここはどこかと思回せば、扉の壁は銀色に輝き、金の瓦を並べた門が建ち構え、建物の色は赤や白でまばゆく光つておりました。まるで、天上の建物のようにでした。ここは乙姫の住む、「蓬萊の龍宮城」という所で、何とも言葉で言い尽くせないような、見事な所でした。

明治以降の物語では、浦島太郎を龍宮城に案内するのは亀であり、亀の背中に乗って水中深く潜って龍宮城に行くのですが、『御伽草子』では乙姫が案内して太郎に蓬莱の国まで送ってもらっています。ずいぶんと様子が違っています。またその行き先も、海の底の「龍宮」と舟で辿り着いた「蓬莱」とで、異なっています。

本来「蓬莱の国」とは中国からは東海の海の果ての仙境にあり、神仙の住む島であると考えられている所です。そしてもう一方の「龍宮」とは、深海の底にあって、龍神の住む宮殿のことをいいます。ところがこの浦島伝説では、海中に存在する龍宮と蓬莱山が混同して取り入れられてしまったようです。道教や説話文学が中国から日本に移入された際に、この両方が影響し合って混同された結果だろうと考えられます。それが『日本書紀』では「海中に入って蓬莱の国に行った」ことになっており、『御伽草子』では「蓬莱の龍宮城」になってしまったのだと思います。

(二)乙姫からのプロポーズと不思議な部屋

物語は、乙姫の住む蓬莱の国に移ります。乙姫は最初から「浦島太郎」に積極的であったように思われますが、蓬莱の国ではそれがさらに強まり、ついに乙姫の方から結婚を申し入れたのです。

乙姫がいうには「昔から、一本の木の木陰で二人休むこ

とも、同じ川の水を飲んで生活するのも、他生の縁と申しまして生まれる前から決められた因縁でございます。まして貴方様には、はるかな波路を送って頂きました。本当に運命としか言いようがありません。どうかここで、私と夫婦になつて一緒に暮らしてくださいませんか。」と云い、蓬莱の国のことなどを「まじまじと語ってくれました。

太郎は、ここはともかく乙姫の言うことを聞くことに致しました。同じところで生活していると、「借老同穴（かいろどうけつ）」と申しまして、生きてはともにも老い、死んでも同じ穴に葬られる、という言葉もあります。こうして毎日共に語り合えば、互いに気の合ひ、浅からぬ縁となります。

昔の言葉に「天に在れば比翼の鳥となり、地に在らば連理の枝とならん」という言葉があります。「比翼の鳥」とは、雄と雌が目と翼をそれぞれ一つずつしか持っていない想像上の鳥で、常に雌雄一体となって飛ぶ鳥といわれています。「連理の枝」とは、一本の木の枝が他の木の枝と連なり合ひ、木目を通じ合つて一本の木になることをいいます。二人は毎日、このように仲むつまじく、楽しい夢のような生活を過ごしていました。

昔話の中で男女の愛を描く作品は多くあります。そしてそこに描かれる女性は、大概絶世の美女であり、共通して「…実は女性が人間でなかった」ということが上げられます。

す。これは違う世界の者同士が結ばれた結果として、物語の最期にはやがて破局に向かうことを暗示しているようにも見えるのです。この場面ではまたそこまで飛び越えて考えるのは、早すぎるでしょうが、ともあれ今は、幸せの絶頂期にありました。「蓬萊の竜宮城」という閉ざされた世界での二人きりの生活の中で、ただ一人の女性である乙姫と、ただ一人の男性である太郎の間に愛が生まれるのは当然のことであつたのです。

二人の間で、より強い愛情を持つていたのは、乙姫の方だつたようです。プロポーズの言葉も、二人の間に生じた運命論も、さらには「偕老同穴」や「比翼の鳥」あるいは「連理の枝」などといったとえ話についても、乙姫の方が熱心に語っています。太郎は少し控えめに「……ことはともかく乙姫の言うことを聞くことにした」と、乙姫に比べるこやや消極的な態度なのです。

この段に出てくる運命論も、幾つかのたとえ話も、江戸時代にはごく普通の結婚観を表現する言葉だつたと考えてよいでしょう。本文の冒頭に「浦島太郎の物語」が、夫婦円満のための読本となると書いたのは、主にこのような部分のことをいっているのです。『御伽草子』が、江戸時代に限らず果たした役割の一つとして、こうした夫婦の愛情表現の情報を「読本」を通じて若い人たちに植え付けていったのでしよう。

ある時、太郎は乙姫に連れられてふしぎな部屋に行きました。乙姫は「ここは、龍宮城の中でも特別な部屋なのです。四方にあるふすまを一つずつあけると、それぞれに四つの季節を見るのが出来るのです。」と言いました。

まず、東の戸を開けると春の景色が見えてきました。梅や桜が咲き乱れ、柳の糸も春風になびき、霞の中からは軒近くにいらしい鶯の鳴き声も聞こえてきます。部屋から見ると、どの梢にも花が咲き、まさに百花繚乱の景色です。

次に、南の表を開けると夏の景色が見えてきました。春を隔てる垣根には、真つ先に卯の花が咲いています。池の蓮の葉は露に濡れ、水際には涼しいさざ波が立つて水鳥がたくさん遊んでいました。木々の梢も勢いよく繁り、空にはたくさんの蝉の声が聞こえています。夕立過ぎる雲間からは、ホトトギスが夏を知らせるように鳴いています。

西のふすまを開けると、秋が見えてきました。あたり一面の梢には紅葉が見え、間垣の内側には白菊が咲いています。霧立ちこもる野原一面には萩が見事に生い茂り、鹿の鳴く声が寂しく、いつそう秋の深さを感じさせます。

最後に、北の方向を眺めると冬の景色が見えてきました。四方の梢も冬枯れて、枯れ葉には初霜が降りています。山々には真つ白な雪がかかり、埋もれる谷には心細い炭焼き窯の煙が立つており、いかにも冬らしい景色を見せています。

いよいよ「蓬萊の龍宮城」の不思議の部屋が登場してき

ます。太郎は乙姫に案内されて、特別で不思議な部屋に連れられて行きます。一体何の部屋だったのでしょうか。部屋には四つのふすまがあつて、一つずつ見える景色が違ふのです。ここは、一年の季節の移ろいをいつでも好きなように見ることが出来る部屋だったのです。蓬莱の国という仙境では、いつしたことも簡単に出来てしまうのでしよう。つまり、一日の間に仮に四つの景色を見てしまうと、気分かないうちに一年が過ぎてしまうということです。太郎はこの不思議の部屋を気に入る、最初のうちは毎日のように通っていたようです。

読者のみなさんにはもうお分かりのことと思いますが、太郎は仙境の国で何気なく不思議の部屋を使つていましたが、仙人ではない太郎が不思議の部屋をふすまを四枚使うと、一日で一年を過ごしてしまうのです。時間を自由に遊ぶタイムマシンのような役割があり、それが後に出てくる玉手箱の中に蓄積されていたのでしょう。おそらく仙人ではない太郎が蓬莱の国の外に出ると、あつという間に時間が戻つてしまうため、玉手箱を開けずに常に持つていなければならなかったのだと考えられます。

太郎はこの不思議の部屋に通うようになって、心に気持ちの変化が現れるようになりました。毎日このような心を打たれるような景色を見ていると、故郷の景色と重なりそれを思い出しては、ホームシックに陥っていました。一度

でいいから故郷に帰つて、両親に蓬莱の話聞かせてあげたい。父母の暮らしぶりも心配でした。この思いは日ごと募つて来るのです。そしてどうにもならず、ついに乙姫に相談するのです。

(三) ホームシックにかかった太郎と乙姫からの告白

太郎は毎日、おいしいものを食べ、ゆかいに遊び、楽しいことばかりでした。心和やかに、そして贅沢三昧の生活を楽しんでいました。年月が流れ、三年ほど経ちました。

太郎は、乙姫に「私に一月ほどの暇を下さい。故郷に残してきた父母が心配なのです。両親は私が突然いなくなつたと、心配していると思います。父母に蓬莱の国でのことを話し、安心をさせたら、きつとまた帰つてきます。」といいました。乙姫は「三年の間、仲むつまじく契りをなし、片時も離れず暮らしてきました。毎日あなたのことを想い、ああもしたい、こうしようかと心を砕いてきました。今別れたら、今度はまたいつ会えるのでしょうか。夫婦は二世の縁と申しますから、たとえこの世では夢まぼろしの契りであっても、必ず来世ではひとつの蓮の上に生まれ合う固い縁だと思つて下さい。」と言ひ、さめざめと長い間泣き濡れていました。

太郎は乙姫の好意を受けて、三年間蓬莱の不思議の国で過ごしました。故郷の浜での貧しい生活しか知らない太郎

には、この三年間の生活はまさに夢のような世界であった
と思います。それでもホームシックには勝てず、親の心配
をして、故郷に帰ることを選んだのでした。

乙姫にとつても、太郎との愛に満ちた生活は、何にも替
えがたい夢のような毎日の生活でした。しかし太郎の「一
度だけ家に帰りたい」という一言で、この甘美な夢のよ
うな生活が瓦解してしまつたのです。愛する太郎が自分と
の満たされた蓬萊の国での生活を棄てて、貧しい現実の世
界に戻るなど、乙姫には思いも寄らないことだつたの
です。

乙姫との愛に満ちた、豊かで何の不自由もない生活を送
つていた太郎が、突然「親が心配だから帰りたい」と言い
出したのです。なぜこのようなことを言い出したのでしょ
うか、それには太郎も気付いていないもつと別な理由があ
つたのではないのでしょうか、そして乙姫にも何となくそ
の理由は感じられていたのだと思います。

しばらく沈黙が続いた後、乙姫は意を決したように「今
は何もかも全部申し上げます。実は私は、この龍宮城に住
む仙女なのです。あなたが江島の磯で釣りをしていたとき
に助けられたカメは、姿を変えた私だつたのです。

あの時、あなたの優しさに報いたいと思ひ、こうして夫
婦となつたのでございます。」と申しました。そして、左の
脇から、美しい箱をひとつ取り出して「これは私の形見で

す。この玉手箱の中には、あなたがこの三年間過こした龍
宮城での暮らしが入っています。これからお帰りになるあ
なたの世には合わないものです。決して開けてはなりません
。」と言つて太郎に渡しました。

ついに乙姫は、本当のことを語り始めました。乙姫は、
この蓬萊の国に住む仙女だつたということをお話し始めまし
た。そして太郎と会う前から、乙姫は太郎のことを知つて
いたという事実を語り出したのです。

乙姫は仙女ですから、太郎に会う以前に例えば空の上か
ら太郎の働く姿を見染めていたのでしょうか、その働く姿
を何度も見ているうちに好意以上の気持ちを持つようにな
つたのだらうと思います。そしてある日、亀に姿を変えて
太郎の優しさを確かめ、その上で、舟で太郎に近づき蓬萊
の国に案内し、太郎と夫婦になつたのでした。

乙姫には、蓬萊の国から現実の世界に帰る太郎は、二度
と蓬萊の国に帰ることが出来ないことも知つていたのでし
ょう。現実の世界に帰るためには、タイムマシンを操作す
る「玉手箱」が必要でしたし、その説明も細やかにしたの
でしょうが、故郷に帰りたい気持ちでいっぱい太郎の耳
には入らなかつたようです。

「会者定離の習い」という言葉がありますが、会うもの
は必ず別れる運命にあるのがこの世の定めである、という
意味です。そのようなことは知りつつも、しかし別れはど

どめ難く、二人を引き裂きます。乙姫の切ない気持とは裏腹に、太郎はただ帰ることに心を奪われて、浮き立つ気持ちでいるのです。太郎は名残惜しみつつも、形見の玉手箱を小脇に抱え故郷に向かいました。帰り道は忘れもしない、ついでこの間この道を通ったような気がしています。故郷では今頃どうしているのか、蓬萊の土産話を父母に聞かせたい、などと思いつながらはるかな波路を帰る太郎でした。

太郎の浮き立つ心は、他のことを何も受け付けることが出来ませんでした。玉手箱は小脇に抱えています、帰る道中頭の中には故郷の景色と父母のことで一杯だったことでしょう。ところが故郷についてみると、様相が一変していました。

(四) 見知らぬふるさとへの衝撃

さて、太郎が故郷に帰り着いてみると、そこは荒れ果てた野原になっておりました。その横に粗末な庵があり、声をかけると、中から八十ばかりのおじいさんが出てきました。太郎は「ここに浦島という人が住んでおりましたが、知りませんか。」と尋ねました。おじいさんは、ふしぎそうな顔をして「浦島という人が居たのは、もう七百年も前だと聞きます。」と、答えました。太郎は大いに驚き「どうしたことだ。私は、二三年前に漁に出て、今帰っただけなのに、どうしてこんな事になったのだ。」といい、これまでのこと

をありのままに話しました。

おじいさんは、ふしぎな思いでその話を聞き、涙を流して同情してくれました。そして、小高い丘の方を指差し「あそこに見える古い塚は、浦島さんのお墓だと言ひ伝えられております。」と教えてくれました。太郎はその小高い丘に登り、草深い野辺を分けて古い塚に参り、涙を流しました。ほんのわずかの間を留守にして出かけたつもりが、帰ってみれば見たこともない荒れ果てた野原になっていました。

太郎は松の木陰に腰を下ろし、呆然としていました。横に置いてある乙姫からもらった玉手箱を黙って見ていました。乙姫は「決して開けてはならない」と言っていました。が、今の太郎には何かをしないではいられないような心境になっていました。「乙姫が言っていた、三年間とは何のことだろう。開けてみようか。」と思い、この玉手箱を開けてしまいました。中から、紫色の煙が三筋昇ってきて、この煙を吸い込んで咳き込んだ太郎は、二十四・五歳の齢から、たちまち白髪の老人に変わり果てて死んでしまいました。

太郎は、自分がいなくなつてこの村に七百年の歲月が流れていたことを知らなかった。親の死、住み慣れた我が家の喪失、村の変貌、そして見知らぬ村人たちの中で一人取り残されてしまいました。この孤独と苦悩の中で、謎を解くカギは残された「玉手箱」だけでした。

「開けないで」と言っていた乙姫の一言は、「開けないで

欲しい」という本心だったのでしよう。しかし最終的に太郎は「開けるしかなくなるだろう」とも考えていたのではないでしようか。太郎は苦悩し、悲しみの余り「玉手箱」を開けてしまいました。その瞬間、中から紫色の煙が立ち上り、七百年の歳月が太郎を包んだのでした。

乙姫が「玉手箱」に入れて持たせたものは時間でした。しかし、結論的にはこの時間こそが、今の太郎の悲しみを癒す唯一のものだったかもしれませぬ。「玉手箱」を開けて紫煙のけむりと共に、自分も含め七百年の全てのものが消えてしまったのです。

四、乙姫の恋は実ったのか

さて、死んだ太郎は、鶴になって大空を飛んで、龍宮城の乙姫のところに帰って行きました。そもそも太郎の年齢は仙女の乙姫が玉手箱の中に畳み込んでおいたので、年を取らなかつたのです。太郎は、龍宮城の四季の部屋に毎日のように通い、飽きることなく楽しんでいました。四季の部屋を一通り見るごとに、この世の一年に当たるのです。蓬莱の国での三年間に七百回見て、乙姫は七百年もの年月を畳み込んで入れておいたのです。

鶴になった太郎は蓬莱の山に帰り、カメになった乙姫の相手をしながら、いつまでも長生きしたそうです。その後、太郎は丹後の国の「うら嶋明神」となって顕れ、迷える人々

を救っては悟りの境地、西方浄土に連れて行ってくれました。乙姫のカメもまた、同じところに神として顕れ「夫婦大明神」と呼ばれるようになったそうです。

めでたし、めでたし。

というお話です。最後は取って付けたように「めでたく」終わっていますが、本当にめでたいお話だったのでしようか。『御伽草子・うらしま太郎』を読み終えて、なぜ浦島太郎と乙姫との愛の生活が終ってしまったのかを考えてみました。

『御伽草子』以外にも民話などにある、例えば「鶴の恩返し」や「雪女」でも、同じようなパターンで終わっている物語がいくつもあります。鶴が人間に変わって夫婦になり、雪の精の妖怪が女性に化けて夫婦になるという物語です。通常は人間世界に棲むはずのない者たちであり、異なつた世界から女性に変身して来て、結ばれた物語であるということが共通しています。そして、これらの物語はその結果の常として、二人は引き裂かれ最後まで添い遂げられない運命にあるのだということです。

太郎と乙姫もまた、「蓬莱の国」という閉ざされた世界の中で愛が育まれ、夫婦となりました。しかしこの二人も又、異なつた世界に棲む者同志と一緒に暮らせないという事実面に直面し、別れを余儀なくされたのだと考えられます。

太郎が「家に帰りたい」と言ったとき、それは太郎の「現

実の世界に帰りたい」という気持ちだが、無意識のうちに働いて出た言葉なのだと思うのです。「蓬萊の国」での生活が、何の悩みもない夢のような生活であったとすれば、やがてその生活は毎日に変化のない味気ないものになってしまうのではないのでしょうか。人間世界の現実の生活とは、貧しさと苦労が続く厳しい環境の中での生活ですが、その貧しさと悩みを抱えながらも、毎日自分の持てる力を精一杯使って、困難に立ち向かい乗り越えていこうとする喜びもまた、そこにはあるのだと思います。

太郎は無意識のうちにそちらの方を選んでしまったのではないのでしょうか。『御伽草子』の隠れたテーマとして、それが人間らしい生き方ではないのか、と読者に問いかけていたのかもしれませんが。

物語の設定として、乙姫は「蓬萊の国」の仙女として太郎より一段高い見識に立っていないかもしれませんが、乙姫と太郎の恋は天地を司る法則を無視したものであり、許されない異界の人間である男を愛してしまったことになります。太郎の自立と乙姫の恋の破局は、早いか遅いかの差はあっても、いずれ訪れていたことでしょう。

それでも最後の最後、死後にそれを乗り越えて神となり「夫婦大明神」として成就させる所がいかにも日本的な「おとぎ話」を感じさせます。さてこれで、乙姫の恋は成就したのでしょうか。

演じる事の覚悟

佐藤 健

二〇一八年一月二八日、北斗市民合唱団が主催する合唱劇の本番を迎えた。前年の四月から週一回、土日のどちらかで練習を重ねて来た舞台である。本番当日は、氷点下の気温で雪の天候にもかかわらず六〇〇名を超える来場者があり、五〇〇の予想で準備したパンフレットが足りなくなるといふ嬉しいハプニングもあった。この市民合唱団との出合いは、二年前に知人に誘われて劇の役者として出演させていただいたご縁である。『アズキの花』と言う樺太を追われて大野平野に入植した父子四代の物語である。今回は、合唱団の一員としてテナーパートで参加した。

今回の演目は『つるく千年の愛』であり、誰でも知っている『夕鶴』をモチーフとした創作である。見どころは、鶴の化身の『お夕』を演じる女子高生のソロである。彼女は見事に演じ歌ってその大役を果たした。その歌声は観客を魅了して多くの賞賛を浴びた。もちろん他の役者も合唱団も練習の成果を十分に発揮出来たと思う。合唱と演劇が見事に調和して一つの世界を創造した瞬間だった。

私は歌う事は好きで、今でも一人カラオケに行つて歌つて

いる。中学時代は、西城秀樹や郷ひろみに憧れて歌手を夢見たこともあった。ここで、西城、郷とくれば野口五郎を外してはならないのだろう。新御三家と呼ばれて圧倒的な人気を博していた。でも、私には野口が他の二人と違って大人びた感じがして、歌も難しかったため三人を同時に語る事に多少の違和感があった。もともとそんな自分は、ルックス的には藤正樹タイプだったのだが。その憧れの西城秀樹は、今年の五月十六日に六三歳の若さで急性心不全のためこの世を去った。ご冥福を御祈りします。

高校の選択科目では、道具がいらないという理由で、書道や美術ではなく音楽を選択した。でも、何かの楽器が出来るわけでも楽譜が読めるわけでもない。そう言えば、中学時代には好きな女子に近付きたくて彼女のいる吹奏楽部に入ったこともあったが、サクソスのリードを何枚かダメにしただけで止めてしまった情けない過去がある。音楽の授業は、圧倒的に女子が多く、合唱のハーモニーも美しいと思うもの的大勢で歌うことに対して場違いな感じを抱いていたような気がする。

カラオケの話に少し戻るが、私が二十歳になったころは、カラオケは夜のスナックで歌うのが主流で、機械もエイトトラックのテープからカセットテープへ、そしてテレビモニターに映像と歌詞が表示されるレーザーディスクへと進化した。そのころすでに採点できる機械もあって、鹿児島天文館で初めて見たのだった。採点の数字は高いほうが良いに決まっているが、ぞろ目が出ると店から何らかの景品が貰えるシステムだった。特に七七点を出すとハーフトルが貰えるようになって、みんなこぞって挑戦したものである。当時の良き時代の思い出である。そんな店がある一方で、場末のスナックでは、新譜の用意が遅いため、歌いたい新曲がない事が多かった。そのため、自分で好きなカラオケのカセットテープを買って持ち込んで歌っていたのである。

「一曲歌わせてもらいたいんだけど。」

まるでギターを抱えて歌う流しのように開店直後の店のドアを開けた。ギターではなくポケットにカラオケのカセットテープを入れての入店である。カウンタに腰掛けて水割り一杯を頼んで二曲ほど歌う。他の客が入って来たのを機に店を出る。そんなことを一晩に二、三回繰り返すのが常だった。

通信カラオケによりリアルタイムで配信される今となっては考えられないアナログな時代である。あの時によく歌った曲が、水谷豊の『カリフォルニア・コネクション』であり、今でも十八番である。

合唱劇の歌は、全てオリジナル曲であり、台本の台詞に曲を付けたものである。函館市内の作曲家にお願いした全十四曲の構成である。混声四部合唱が六曲と男声のみが一曲の七曲を覚えなければならない。小学生が三曲、女性ソロが四曲である。曲は六月末までには全て完成したが、楽譜を渡されてもシンブンカンペンであり、ト音記号やヘ音記号の意味さ理解していない私の苦闘が始まることになる。私以外は皆さん経験者で、ほとんどの者が他の合唱団にも所属している。楽譜を見ただけで自分のパートを歌える人もいて、頼りになる大先輩たちである。

私はと言えば、ピアノ伴奏では、何とか歌えるものの他のパートが合わさった途端に、わが道を見失ってしまう。特にソプラノの妙齢なマダムの方々の魅力に引き付けられて抜け出せなくなる事が多かった。本番は、ピアノ伴奏も違う旋律を奏でるので当てにはならない。頭の中で自分のパートの音階が奏でられるようになって初めて歌えるのである。また、音程も大事だが、音符の決められた長さで歌うのも大変であり、いつまでも伸ばしていると仲間うちから声が飛ぶ。「あなたの独唱じゃないんだから、切るところはちゃんと切ってくださいね。」

多少言葉は優しいが、目は笑っていない。歌詞を覚えることについては、自分が歌うところだけではなく、歌わないパートの部分も覚えなければ一つの歌として完成しない。また、

ある程度歌えるようになると大きな声で歌いたくなるものである。合唱団の人数が予定よりも少なく、特に男声の数は少ないのだからできるだけ大きな声で歌うほうが良いと思っていたが、声を合わせることの重要性を知る事になる。それまでの私は、他人の声を聞くことしなかつたし、自分が正しく歌えていればそれで良いように思っていた。

ちょうどその頃、黒柳徹子の半生を描いた昼のテレビドラマをやっていて、それを録画して見ていたのだが、その中で同じような失敗が語られていた。徹子の父と母との出会いの場面で、ベートーベンの第九を大声で歌う母『朝（ちょう）』に対してバイオリニストである父の『盛綱』が言った言葉である。

「応援団じゃないのだから、ちゃんと周りの人の声を聞きなさい。」

声を合わせ、歌を合わせることによって、美しいハーモニーが奏でられるのである。

練習の中では、苦手とする歌やどうしても自信がない箇所が出て来る。指揮者から何度もダメ出しをされると次第に声も小さくなって来る。そんな時、誰かが私にささやいた。

「自信がないところは、口パクでも大丈夫だから。足りないところを補い合うのが合唱の良いところだから。」

果たして、その箇所に来た時、みんなが一斉に黙ってしまったのである。苦手とするところは皆さん同じなのである。

「ちゃんと歌って。」

女声サイドからミスを指摘する容赦ないミスイルが発射される。だが、残念ながら男声陣には迎撃する手段はない。ただただ練習あるのみである。こうして、合唱の方は何とかたちになって行った。

そのうちの何曲かは十月から十一月に行われた市民文化祭や音楽祭、発表会で披露することになった。私はもちろん初めての参加だったが、近郊には男性のみの合唱団や小さな子供たちが一緒だったりと大小様々な合唱を楽しむグループがあつて驚かされた。中には複数のグループの掛け持ちの方もいて、ほとんどが私よりも年配の方々である。その歌声は豊富な人生経験を経た深みのある魅力的なものだった。何よりも生き生きとした表情で力強く歌う姿に感動を覚えた。

十月からは合唱と演劇の合わせ稽古が始まった。初めて見る演劇の仕上がり具合は、えっ、と思うほどの出来で台詞の覚えもまだまだの状態だった。主役の『お夕』は、随分と気が強い印象であり、もう少し優しさや弱さを表現しても良いのではとの思いが正直な感想であつた。また、その『お夕』の相手役となる鶴を助けた『吾平』役が何とも頼りないのである。明らかに練習不足が見て取れた。じゃあ前作はどうだっただろうか。自分も同じようなものではなかったか、と自問自答する。まずは自分のパートをしっかりと歌えるようにする事だと自分に言い聞かせる。

そして、十月も終わろうとする時期に、『吾平』役の若者が仕事の都合で練習に参加できなくなつたのである。『お夕』との掛け合いがある台詞の多い大事な役である。そのため他に頼める人を探している事が演出であるN氏から語られた。N氏は今回の脚本も手掛けており、これまでの合唱劇も脚本、演出を担当している方である。

その時、正直私の心がざわついた。でも、一歩前に踏み出すことが出来なかつた。その演出のN氏とは、前回の合唱劇で演技指導のやり方に対する不満と不安から衝突した苦しい思いがあつた。演じる事の難しさは身に染みている。もうあんな苦しい思いはしたくない。何よりも自分の力量は知つているつもりだ。

その一週間後の十一月初旬の練習日に、合唱団の事務局の方が私を舞台袖に引つ張つて行つて、こゝ告げたのである。

「もし、このまま代役が見つからなかつた場合には、役を引き受けてもらいたい。」

それは、まさに私にとっては悪魔のささやきで甘美な言葉だつた。

「心積もりだけしておきます。」

と答えたのだつたが、それから私は方が一に備えて台本を最初から読み返してみた。台詞は何とか覚えられるように思つた。そして、はたと気付いたのである。

「台本をよく読んで、この歌の情景を思い浮かべながら歌つ

て欲しい。」

指揮者からは、常にそう指導されて来た。しかし、私は歌詞を覚え曲を覚えるのに必死でそこまでは手がまわらなかつた。合唱と演技が一体となつて物語が紡がれて行くという合唱劇の本質を理解していなかつたのである。前回の合唱劇では、主役という大任をいただきながら、そんなこともわかつていなかつたことに今頃気付いたのである。自分の台詞を覚えることで精一杯で歌詞の意味を考える事もせず、合唱の歌詞は自分が舞台に出るきっかけとして部分的にしか知らず、当然歌う事もできなかった。合唱の歌詞には景色、登場人物の境遇や感情が綴られており、それを曲に乗せて観客に届けているのである。その延長線上で役者が舞台に出て台詞を吐き、その台詞が次の歌につながつて行くのである。演出のN氏が、よく言つた言葉を思い出す。

「アンタの台詞で、アンタの背中で合唱を引き付けてバーンと客席に送り出せ。」

そのことを十分に理解できないまま演じてしまったことを、今は素直にただただ申し訳なく思う。もし、あの時自分も頭の中で合唱団と一緒に歌いながら演じることが出来ていたならば、もつと違つた演技ができたかも知れない。

物語を進行する『語り部』役を演じた方が、稽古が始まつて間もない頃、ご主人を病気で亡くされた。悲しみの淵に佇む彼女が、役に集中できず台詞も頭に入つてこない状況を克

服して役を演じたことに頭が下がる。本番が近付いたある日、これから練習が始まるうとした時、彼女が我々合唱団に向かって語り掛けた言葉が印象的だった。

「私に皆さんのパワーを下さい。私が役を演じるための力を貸してください。」

そうなのである。合唱劇とは役者と合唱団が互いにパワーを与え合いながら大きな舞台を創り上げるものなのである。今更ながらそんな事に気付く自分は、いかに愚か者なのかと言葉を失くした。

そして、最終的に演出のN氏が代役として指名したのは、私ではなかった。合唱団の副団長のM氏である。M氏は前作で私を合唱劇に誘ってくれた人物である。今回も演出助手としており順当な指名である。M氏は、私より一歳若い。自分ではないとわかった時、心から安堵したのも確かな事だが、一抹の寂しさもあった。

本番が終わった打上げの時にM氏は言った。

「今回は代役でしたが、台本を見た時から自分で演じてみたいと思っていました。」

練習を見ながら自分ならどう演じるかを考えていたので、突然の代役指名でも臆することなく挑戦出来たことを堂々と話した。

余談ではあるが、私の演技や歌には全く興味のない妻が、『吾平』役のM氏によく通る張りのある声が良かったと言っ

た時には、多少の嫉妬を覚えたような気がする。

演出のN氏は、急な代役で大変だろうと言いなながらも演技への要求は容赦なかった。

「いちいち相手の台詞に頷くな。商売人じゃないんだから。」いやいや、彼はお店をやっていますから。と思わず突っ込みを入れたくなる場面もあった。

「彼女が演技している時に、無駄に動くんじゃない。」

いきなり舞台で動くことは、台詞より難しいことである。特に、台詞がない時の動きや顔の表情は初心者にはハードルが高い。経験豊かなM氏だからこそである。

「あっちからこっちの世界へ、こっちからあっちの世界へ行く際の感情の変化が表現できていない。」

禅問答のような演技指導がなされる中で、前作の自分の姿が重なった。N氏から演じる役の感情を問われて、後付その都度考えながら答えることにも違和感があり、納得できないでいる自分がいた。

「もういいです。これ以上はできません。」

あの時、思わず出てしまった私の言葉である。本番まで三週間を切っていた。

「アンタの演技はつまらない。」

何回やってもN氏からのダメ出しが繰り返されて、どうしようもなく追い詰められた気持ちだった。自分の演技がつまらない。それはそうであるう、自分の心の中にワクワクする

ものが無かったのだから。ただただN氏の声に怯え、早く稽古の時間が終わる事だけを願っていたような時期である。週に二回の練習日が苦痛で仕方なかった。正直、N氏の目が他の役者へ向かうとホツとしたものである。

「逃げるのか。オレは最後まで良しとは言わないし、今までもそうやって来た。」

N氏が言った言葉が蘇る。逃げようとは思わなかったが、初めての経験で自信が持てなかった私は抛りどころが欲しかった。昨日まで良しとされていた演技が、今日は突然ダメ出しされるのである。その事に私の気持の整理が追いつかずに混乱した。

「主役に演出を拒否されたら俺はこれ以上演出は続けられない。」

N氏が会場を出て行ってしまったのは正直誤算だった。私より二十歳も上の演出家を本気で怒らせてしまったのだ。

「私はあなたと一緒にこの舞台を成功させたい。」

舞台監督の女性が会場を出て行くこうとするN氏に声を掛けたが、そのまま出て行ってしまった。

「Nさんは、弘（役名）だったら出来ると思っただけのことと言っただから。」

役者仲間が私に声を掛けて、場を取り成してくれる。

「舞台をやっていたら、こんな事はよくある事です。」

そう言ったのは演出助手だったM氏である。混乱している

はずの私は、意外な展開に驚きながらも、その場面を傍観するもう一人の自分を感じていた。N氏を始め、その時発せられたそれぞれの言葉は、会場内に大きく響き渡って、まるで芝居の一場面を見ているような錯覚を覚えたのである。

次の練習日にN氏の姿はなかったが、東京から作曲の先生が来た日の練習にN氏が現れた。

「この間はすみませんでした。今後も指導をお願いします。」と詫びたが、

「アンタだったら出来るから、思いっきりやりなさい。」

と返されて、以後は舞台全体の流れの調整だけで、個々に演出することはなくなった。結局、自分で大きな荷物を背負うことになってしまった私は、今まで受けた注意を一つひとつ思い返して、演じることだけに集中したように思う。本番が終わって、カーテンロールの緞帳が下がってきた時、そばにいたN氏に右手を差し出して握手を求めた。握手に応じてもらいはしたが、言葉はなかった。

そんな苦い経験を思い出しながら稽古を見ていた。M氏は演出のN氏を正面から受け止め、何を言われても役に食らい付いて行っただけの姿を見て演じる事の厳しさを改めて学んだように思う。『お夕』の演技も稽古を重ねる度にどんどん成熟し、鶴の化身としての『お夕』になっていった。稽古をすること。役に成り切ることを。考えることとは、こういう事なのだ。女子高生から教えられたように思う。

人間への化身を解き、鶴に戻る姿を表現したダンスは圧巻であり、鶴に戻った『お夕』が大きく羽根を広げて『吾平』と共に星の彼方へ飛び去る姿が見えた。

今回の『お夕』と『吾平』の役作りを見て、前作の稽古において、私が何とか演出家の要求に応えようとした努力が、まだまだ足りなかったことを認めざるを得なかった。あの時にN氏が言った言葉が再び蘇る。

「俺は最後まで良しとは言わない。」

演じる事に正解はなく最後の最後まで追求する姿勢が求められる。考えて、考えて自分を追い込んだ先に見えて来るものや生まれる感情や動きがあることを教えてもらった。画一的でなく、色々なパターンを試行する挑戦が必要なのである。体の中にあるものを全て出し切った先に得られるものがある。その感覚は、水泳の息継ぎに似ている。水泳の指導者は言う。「息を全て吐き切れば、自然に空気が肺に入ってくるから。」でも、全部吐き切ってしまったら沈んでしまうようで怖い。自分の心を開放し、感情を曝け出してしまふのには勇気がいる。

今回、合唱に参加して役者を側面から見ることので気付かされた事は多い。役者は、演出家の言葉に一喜一憂することなく自分の演技を追求し続けなければならない。立ち止まって、考える事を止めてしまったらそこから先の進展は無い。今なら演出のN氏が言う言葉の意味を理解出来るように思う。N

氏は、役者としての心構えも語ってくれていた。

「どんなに演じても必ず厳しい評価をする者はいる。結局最後は、自分が役を演じ切ったかどうかだ。悪く言えば自己満足の世界だから自分の思うように演じた者勝ちなんだ。だからこそ最後まで役作りに努力し続けなければならないのだ。」

今冷静になって思えば、代役を打診された時点で、はつきりと断るべきだったのだ。頼まれて相応の覚悟がないままに役を引き受ければいざと言う時の逃げ道になってしまふ。その甘さが前作で演出家の厳しい指導に対する不満として反発する結果になってしまったのだと思う。覚悟なき者が役を引き受けてはならないのである。今後は、この経験を活かして覚悟をもって演じる事に挑戦したい。

そして今、函館野外劇の舞台に立っている。高田屋嘉兵衛の役が三年目である。今年の高田屋は覚悟が違う。動きが違う。笑顔が違う。練習の時から、今までの高田屋のイメージを払拭する覚悟で取組んで来た。練習の度に、台詞の言い方を変えてみた。時に力強く、時に優しく、ゆっくりと色々試してみる。色々な嘉兵衛がいてもいい。演出がダメと言うまでは思い切ってやってみる。八回の公演全てに高田屋の役で出演するが、毎回違った嘉兵衛を演じられれば面白いかも知れない。

稽古中にN氏の声が聞こえたような気がした。「台詞を句読点で切るんじゃない。」

「相手の台詞との間を空け過ぎるな。」

「台詞を言うために移動するんじゃない。」

「悲しい場面を下を見るな。」

「台詞は客の目を見て言え。」

「指先、足先まで神経を行き渡らせろ。」

練習で子供たちにアドバイスする機会があったが、真剣になればなるほど、自分の顔から笑顔が消えて引きつったものになる。自分が言っている事が子供たちに通じているのかわかなくなる。そう言えば、N氏の笑った顔を見たことがなかった。常に何かしらの不満を抱えた顔をしていた。わかったようなことを言うが、演出をするという事は本来そういうものなのかも知れない。前作のあの日から止まっていた私とN氏との時間が少しだけ動いたように感じる。

合唱劇の本番を終えて、引き続き函館市内で活動する合唱団の定期演奏会に参加した。その第二部が、一〇曲で構成される『ぞうれっしやがやってきた』である。幼稚園児と大人が一緒になって総勢七〇名を超える人数で造る歌の世界である。歌詞はメッセージ性が強く、合唱劇と通じるものがあり、歌詞の一語一語に気持を込めて歌う貴重な体験となつて四月末の発表会を無事に終了した。

最後になつてしまったが、今年の合唱劇で悪役の庄屋の役を演じたY氏の本番での爆発力と存在感には圧倒される。多少の台詞の間違いなどはその気迫のこもった演技の前ではど

うでもよくなる。前作では私の祖父役を演じたが、七〇歳の半ばを過ぎた年齢を感じさせない演技に驚かされた。私が師と仰ぐ人物である。実は、Y氏は隣町の劇団代表をしており、来年三月にミュージカルの公演を予定している。ダンスレッスンに興味を抱いた私はその稽古にも参加している。ブレイクダンスやロックダンスの初歩中の初歩の部分を教えてもらっている。ランニングマンの振り付けを教えてもらった翌日は、足全体が突つ張つたようになって歩行に支障をきたしたが、運動不足の解消になりそうだ。

調子に乗つて、自宅で人気のダンス&ボーカルグループに成り切つてピョンピョンと跳ねていたら突然右ふくらはぎに激痛が走つた。ふくらはぎが見る間に腫れ上がり痛みも増したので五八年間生きて来て初めて整形外科に受診した。肉離れの診断が下され、時間を掛けて自然治癒しか方法がなく、全治一か月である。一か月分の湿布を処方してもらつて帰宅した。

今後に不安を残す展開となつてしまつたが、その悪戦苦闘振りには次回にお話させていただければと思つた。

鉄道の旅、その三つの愉しみ

水 関 清

鉄道に乗るということ、そこには三つの愉しみが隠れている。

出かける前のプランニング、出かけてからの車窓と味覚、出かけた後の旅程の整理、の三つであり、旅の途中に思いがけない出会いがあった場合には、その愉しみが倍加する。

出かける前のプランニングの際、頼りになる相棒の筆頭は時刻表である。その時刻表と運賃・切符は、かつて切っても切れない関係にあった。目的地と経路を少し工夫するだけで運賃の割引という、きわめて分かりやすい実利的な果実が得られた、国鉄時代の一般周遊券の購入は、それら知識を試される重要な場であった。一般周遊券はオーダーメイドの周遊券とも呼ばれ、国鉄からJRへ移行後もしばらくの間販売されていたが、現在は全廃されている。

オーダーメイドという名の示すとおり、ほぼ全国くまなく設定された周遊指定地を原則として二箇所以上まわり、国鉄線を二〇一km以上利用すれば、あとは船・飛行機・バス・私鉄などさまざまな交通機関を利用して、連続した経路で出発地に戻ってくればよい、という乗車券であった。これらの条

件を満たせば、国鉄運賃は二割引になるばかりか、飛行機などの運賃まで一割引となり、有効期間も一箇月間と長かった。割引運賃といえば往復割引がほとんどだったこの時代、鉄道に比べて高価な飛行機運賃が、片道だけの利用でも一割引となる制度は特に魅力的で、うまく旅程に組み込むことで、移動時間の短縮と旅費の節約というふたつの実益をもたらすものであった。

不思議なことにこの一般周遊券は、国鉄の販売する切符であるにもかかわらず、購入の場は交通公社など民間の旅行会社の窓口に限られていた。旅程作成に一定の知識が要求され、発券に時間がかかることもあるため、国鉄窓口での作業の間を避けたのだろうか。詳しい事情は判らない。

さらに実際の旅程作成と周遊券購入にあたっては、時刻表に掲載された情報だけでは不十分なことも多かった。特に、「経路が連続しているか」ということと、「周遊指定地へのアプローチとして組み入れた交通機関が適切か」ということが、よく問題になった。

「連続した経路は、一見すると簡単なようで奥の深い問題

であった。目的地へ至る経路上の単純な寄り道の場合はまだしも、見方によっては迂回とも受け取れる経路などが問題とされた。「周遊指定地へのアプローチ」として組み入れた交通機関の適否」の場合は、事情がやや異なった。国鉄以外の交通機関を周遊券の経路に組み入れようとする場合、それら機関と国鉄との間で通過運輸契約という、ある種の約束をしていることが必要とされた一方で、紙面の制約等のためか、時刻表にこれらの情報のすべてが掲載されているとは限らなかった。

交通公社本社には、国鉄からの通達が届いていたものの、末端の窓口社員にまでは徹底されておらず、しばしば問題が生じた。地方都市の窓口と本社発券担当者との間でやり取りをして不都合を修正し、当初の希望にほぼ沿うような周遊券を手にするまでには、しばしば数週間を要した。こうしたやり取りのたびに新しい鉄道関連知識の発見があった。周遊券構成の必要条件である「連続した経路」とは、実際にはどういうもので、周遊指定地への妥当なアプローチ経路として認められる交通機関の組み込み方はどんなものか、など、さまざまなことを教わった。

徐々にコツが飲み込めてくると、さらに複雑な経路を作ってみたくなるのが人情である。自分でもどうか、と思う経路での周遊ルートに依頼した時には、当然のように本社担当者から問い合わせが返ってくる。そうした担当者とのやり取

りにやや時間がかかるものの、その都度きちんと発券されてくる。最初のうちは仲介してくれていた地方窓口の担当者も、気を利かしてくれたのか、窓口を飛ばして直接その担当者と交渉することを許してくれるようになった。その場合には、やり取りが適切で短い分だけ修正後の発券も早くなる。時には、自分が気づかなかったような妙案を教えてくださいもあった。

自分の知識の集大成が試され、どの世界にも専門家がいることを教わった場所のひとつは、交通公社の窓口である。

* * *

旅程プランニングという知的活動と、運賃割引という実益とが融合した時刻表と運賃の世界が、鉄道の旅に出かける前の愉しみなら、旅の最中の愉しみは、「鉄道という乗りものは、線路の上しか走れない」という制約を離れては考えられない。自動車のように、道さえ通じていれば、何処にでも自由に行くことはできない。地盤の制約や、勾配の制約もあり、風光明媚な景勝地のごく近くまで、鉄道で行くわけにはいかない。さらに、時間の制約もある。ダイヤグラムという名の予定表どおりに、きちんと運行される乗り物である以上、経路上で途中下車は出来るものの、自動車のように気が向いたらわき道に入ってしまったもの経路に戻るといっわけには行かない。

鉄道の魅力というものを、あらためて考えてみる。

その魅力は、鉄路という線の上でしか動けない制約から生

まれるものなのである。線上の移動ゆえの制約が要請する列車運行ダイヤであり、時間的制約が要請する特別急行や急行などの優等列車であり、夜行列車なのである。優等列車を先に通すために普通列車のダイヤに待ち時間があり、上り下りの優等列車を少しでも早くすれ違いさせるため、単線区間では信号場が設置されるのである。

裏を返せば制約とは、約束そのものである。時刻表に示された時間どおりに目的地に到達できる、という約束がもたらす安心感は、道路事情に左右される割合の大きい自動車にはない魅力のひとつだと思える。

路盤の制約は、地形図を見ると納得できる。特にリアス式海岸を走る鉄道の場合、設計者がその要請に応じようとした苦勞のあとが顕著である。海沿いの町から川沿いを遡り、半島基部を横断したあと反転し、また隣り合う湾の入り江に開けた町に駆け下りる鉄路は、岩手県の三陸沿岸などに見られる。

川は交通路の母である。川の流れが、気の遠くなるような歳月を費やして山肌に刻み込んだ空間があるからこそ、長いトンネルを掘らずとも、道路や鉄道が敷けるのである。

そのありさまは、今は廃止されてしまった江差線の車窓から堪能することが出来た。

江差く木古内間のほぼ中間地点に位置する湯ノ岱駅を過ぎると、それまでほぼ並走してきた列車と道路は徐々に離れは

じめ、神明駅に至る。この駅から次の吉堀駅までの間に、分水嶺となる稲穂峠がある。この峠の手前で、そこまで寄り添うように走ってきた道道五号線と江差線は、大きく離れる。道道五号線は、天の川支流の膳棚川を遡って吉堀トンネルで稲穂峠を越え、木古内川支流に沿って吉堀駅を目指す。一方の江差線は、膳棚川とは別の天ノ川の支流である鹹川ともつれ合うようにしてこの支流を遡り、稲穂トンネルと四箇所の覆道で稲穂峠を越えて木古内側に至り、峠のすぐ下で道道五号線と再会して、ともに吉堀駅を目指す。

この江差線と道道五号線の交叉箇所は、鉄道が道路を跨いで走る、江差線唯一のオーバークロスであり、鉄道ファンにとってはずまらない瞬間を味わえる区間として人気を集めた。吉堀駅を過ぎると木古内川は、トンガリ川、ヨビタラシ川、野七川などの支流を集めて川幅を増す。その河川敷を、列車は次の渡島鶴岡駅を目指して走る。山岳地帯を越えて平坦な区間となったこの吉堀く渡島鶴岡間では、江差側にある上ノ国から中須田にかけての眼福であった、頭を垂れる稲穂の姿を、同様に楽しめたものである。そして、車窓前方に続く木々の緑の中に、当時開通を控えて建設中だった、江差線廃止の誘因となった北海道新幹線の新しい高架が、とぎれとぎれに見え始めていた。

線上の移動という鉄道の持つ制約は、駅弁という別の楽しみと結びついた時、愉しみに変わる。長時間乗車をする中で

必ず生じる空腹という生理的欲求と、途中下車が出来ないという制約とを、うまく調整した存在が駅弁である。地元の食材を、地元ならではの工夫で調理した駅弁のほか、最近では、ユニークな名前と豊富な品揃えで名を上げた、高価な駅弁も現れている。

当時三歳だった私の三男はしばしば父の書齋に忍びこんでは本棚の鉄道雑誌を取り出し、畳の上に並べ、回らぬ舌で表紙の文字を拾い読みしていた。なかでも「汽車旅と食」と題された特集号が特にお気に入り、表紙には列車を背景に駅弁を売るおじさんが写っていた。

来る日も来る日もこの雑誌を開き、「これなあに」「あれなあに」を繰り返したおかげで、森駅の「いか飯」や富山駅の「鱒のすし」、明石駅の「ひっぱりだこ飯」などの主要駅弁は、写真をひと目見て解説できるまでになった。

自然な流れで、食べてみたいと言い出すようになった。三男が披露する雑誌で仕入れた蒨蓄を聴きながら、いか飯の丸々とした姿、樽と笹との間からのぞく鱒の色の鮮やかさとすし飯の甘酸っぱさ、たこ飯の香ばしさを、一緒に味わった。

噂に違わず美味しい。だけど、何か物足りなくて、三男と顔を見合わす。列車の振動が足りない。機械油の匂いもしない。車窓風景も見えない。やっぱりこれらがないと、旅の気分という、駅弁に隠された最高の隠し味が活かされないのだ。そう思った父は、三男にこう提案した。

「特急に乗って、駅弁を食べないかい？」二つ返事でOKした三男。

心配そうな妻の顔を尻目に、四歳になって間もない三男と父とは、早朝出発した。目指すは、奥羽本線秋田駅の「秋田まるごと弁当」。うまい駅弁を食べてもらおうという精神が漲った。秋田の食材を豊富に取り入れた名物駅弁のひとつである。特急を乗り継いで午後早くに秋田駅に着き、駅弁ワゴンに直行するがあいにく売切れ。改札口近くの売店に行くが、ここも売切れ。三男の手前慌てず、代案であった「おばこ弁当」を指名したが、これも売切れ。

売店嬢はにこやかに「新幹線の団体客が大口購入されましたが、追加注文をしましたので、ご安心を。」と告げる。少しホッとして、追加分の弁当が売り場に届く時間を聞くと、一六時だという。

その時間では自宅に帰れなくなってしまふ親子は、後ろ髪を引かれながら秋田駅を発ち、途中の大館駅で売られている「比内鳥弁当」を目指す。

午後遅い時間に着いた大館では、懸念した通りの売り切れ。落胆する親子の姿を見かねてか、親切な駅員さんが販売元まで問合せてくれたが、在庫なしとのこと。緊張の糸が緩んでみれば、親子ともども昼食抜きでの駅弁追跡。湧き上がる後悔の念とともに、空腹感がこみ上げてきた。駅近くの商店で購入した幕の内弁当を手に、親子ともうちしおれて普通列

車に乗り、青森を目指す。

早速包みを開いた弁当は、黒ゴマをまぶした結び飯の中央に梅干、卵焼・カマボコ・焼魚と干椎茸と栗の含め煮が並んだ、お馴染みの姿である。三男はと見ると、まず梅干をカリカリと噛み、ご飯、焼魚、卵焼と、次々と食べていく。苦手な椎茸もペロリとたいらげてしまった。

「パパ、美味しいね。」

駅弁の美味しさって何だろう。それは、列車の振動を受けながら車窓風景を楽しむ、旅の気分。そして、旅を一緒にした人の口からこぼれ出たひと言。

私の駅弁は、いつもこの三男のひと言の味がする。

* * *

鉄道の旅の後には、こんな愉しみも待っている。鉄道好きの人たちが一度は目指す「乗りつぶし」済みルートを、地図に標すことである。時刻表を開くと、全国に鉄道網がはりめぐらされているのがよくわかる。その鉄道網を、もたらさず乗りつくそうというのが「乗りつぶし」であり、鉄道マニアへの一里塚である。乗るべき線区を見定めた後、ともかく鉄道に乗る。すると乗ったところを記録しておきたくなるのが人情である。

時刻表の巻頭にある鉄道路線図の上に、乗車済みの区間をラインマーカーで塗りつぶす。最近では、鉄道雑誌の付録に乗りつぶしマップなるものが提供され、駅は小さな○、路線

はおなじみの縞縞の線で示され、乗車日ごとに色を変えたり、下車した駅の○には塗りつぶしを施すことをすすめるなど、懇切丁寧な利用法まで記載されている。休日ごとに手近な線に乗車し、時には宿泊付きの遠征を行っていると、順調に色を塗られた区間が増えていくが、そのうちに頭打ちになる。

理由は、比較的繁華な本線から伸びる支線、それも行き止まりになった線、世にいう「盲腸線」の存在にある。幹線に比べて運行本数も少なく、単純に往復するだけで一日がかりになることも少なくないからである。

小学生の「乗りつぶし」に遭遇したことがある。

当時の東北本線の八戸駅に向かう普通列車が、三沢・八戸間を走っていた時のこと。運転席後方の最前列に陣取った男の子が、停車するたびに後方のデッキに走って行つては盛んに携帯電話をかける。停車時間が短いので、通話を途中で切り上げては席に戻る。座席には大判の時刻表とリュックとカメラ。停車のたびにデッキに走っていくのは、車内放送の「携帯電話の通話は、停車中にデッキでお願いします。」に忠実にしたがっているからのようだ。

聞くともなしに聞こえてくる内容は、どうも予定の列車に乗り遅れて、今夜の宿泊先をどうするか、というところのようである。次は八戸、というアナウンスが流れたところで、男の子の顔がゆるみ、その視線が、私の持つ使い古した大判の時刻表の上に落ちた。互いの持つ時刻表に視線を落としなが

ら、どちらからともなく話しかけた。聞けば、以下の事情だったという。

当初予定の列車に乗り遅れたため親に相談したこと。今日の宿泊先の確保と、そこにはタクシーで行きなさいと言われること。早速指示された宿泊先を確保したものの、そこまでの行き方がよく分からないので、もうすぐ着く八戸で駅員さんに尋ねようと思っていること。ところで、その時刻表をみると、あなたも乗りつぶしに来ているのか。そういうことであった。

聞けば、その日の宿泊先は、私の宿泊先と至近の距離にあつて、その最寄り駅はともに八戸線の本八戸駅。私とは言え、青森での所用が早く済み、予定した特急列車をキャンセルして、これに先行する普通列車に乗っていたのだから、乗りつぶしとは大差ない。男の子に話を合わせて、本八戸までをおともすることにした。八戸まで六・九km、所要七分、八戸で乗り換えて、本八戸まではさらに所要一〇分。

短い時間であつたが、撮りためた写真の数々と乗車券を取めた分厚いファイルを、大事そうにリュックから取り出して見せてくれた。乗りつぶしの旅には必ず持参して、列車内で繰り返し見ては、乗りつぶしの戦果を確認するそう、きれいに整理されていた。秘蔵の鉄道アイテムの数々のお披露目を受けた後に到着した本八戸駅は、駅員常駐時間を過ぎており、改札はフリーパス状態。車内で求めた八戸・本八戸間の補

充乗車券が、新たに乗車券ファイルに加わるのが嬉しいのか、初対面の私に、好きでたまらぬ鉄道の話を出来たことが嬉しいのか、とにかく満面の笑顔を見せてくれた。

乗るだけではない、鉄道の愉しみ。それは、旅の気分と車窓風景、そして同じ車窓を眺めて共有した時間。鉄道という枠組の中で、流れ広がる時間と空間とを、ある時しっかりと共有したという想い。思い出と一緒に体が揺れたり、停車のたびに車内に流れ込む外気の冷たさが肌によみがえったり、駅弁の蓋についたご飯粒が見えてくるのは、今も列車が時刻表通りに、決まった時間に決まった所を毎日走っているから。記憶の中の列車も、同じように毎日心の中を走り、今も、もうひとつの旅を続けているから。その心の中を走る列車の窓には、そこで大切な人とともに過ごした時間が映っているから。

お城めぐりツアー 片岡 美智子

平成三十年九月、函館空港発着三泊四日の「日本の名城めぐり、兵庫、岡山編」のツアーに参加した。この旅の企画社は一人旅歓迎が多く、私は三回目。最近はいつも一人。お城に関心がある訳でも無かったが、無理なく行けそうだったから。

十年位前に姫路城が改修に入るので、今後八年は見られないと新聞で知った。当時の旅友は学友。「同じ年齢なのだから、今行かないともう見られないかもね。どうせなら他にも寄るコースで考えよう」こういう遊び事は直ぐ決まる。友は施設の指導員。春休みしか長期休暇がとれない。特に旅の企画が好きな私が、勝手に作った予定で旅行社と相談して手配してもらった。

函館空港から伊丹まで直行が出来たばかり、伊丹から姫路迄のバスもありルンルン。

やっとお城が見えてきた頃からの人の群れ。

バスの運転手さんは心得たもので「お客さんの中で姫路城を見に来られた方は多いと思いますが、行列の最後の札の人

に何時間待ちですか?と聞いたほうが良いですよ」と言う。教えられたようにしてみました。「閉館までに順番が来れば良いほうだね」と言う。今、正午。ここを三時間見て次の予定だったが、甘かった。行列から外れた所で写真を撮り合い(天守閣をいれては無理だった)。

やっとお捕まえたタクシーで城の外回りを説明してもらったが、ガツカリで疲れただけ。

運ちゃんも気の毒に思ったか姫路駅まで行く間「春休みになつて最初の土曜日だったものね。又来てください」返事は出来なかった。

この時の友は今、告げられた余命が半年も過ぎている。訪問も遠慮勝ちにしているのに、私の旅は知らせられない。

今回の旅、平成の最後になるかもしれない。

函館からは二人と聞いていたが、どの人かは不明。羽田で乗り継ぎ伊丹で添乗員のT氏と初顔合わせ。三十八人もの多いツアーは初めて。別に伊丹から伊丹までのガイドもいる。

城おたくかな?三十代スエット上下、もじゃもじゃ髪、見てくれは良くないが博識。

一日目 明石城 兵庫県 現在も明石市、今は明石公園。

平城跡で建物は無し、現代の道路か広場のコンクリートを歩いている感じ。

宮本武蔵が居留したことがあるそうで、有名な襖絵があったそうだ。門の跡、井戸の跡など説明は聞き流し。

バスの席が隣同士になった方が良かった。

旭川からの一人参加の方で私より二十歳若いそうだ。「済みませんが私の耳になって頂けませんか？」ビックリさせてしまったようで、謝りながらひどい難聴で補聴器はつけているが、聴き取れないことが多いことを言う。「良いですよ」にホッとす。毎日、席は変わるが二人は一緒。三十八人の内、夫婦が半分、残りの半分ずつ男性、女性の一人参加らしい。こんな多くの男の方の単身参加のツアーは初めてだった。大抵お城めぐりのガイドブックと、スタンブ帖を持っている。事前知識も相当の感じ。夫婦もどちらが興味を持っているか、何となく分かる。私だけが只の観光客かも知れない。

夕方倉敷着。最悪なビジネスホテルかも。

オプシヨンの夕食を頼まなかったのでコンビ二へ。連泊と喜んだのに残念。

二日目 備中高松城 岡山市

羽柴秀吉による水攻めで有名な城。歴史に強くない私でも知っている。テレビの大河ドラマで二回くらい見たように思

う。

建物は何も残っていないのに、百名城の一つなのは、天晴れな城主の行跡のせいかな。

高松城主、清水宗治は毛利氏の配下。毛利は山口の国主と知っていたので、備中ではもともと広島に近いと思っていたが、岡山県だった。

織田信長に高松城を攻める役をさせられた秀吉は、攻めあぐねて策をねり、兵糧攻めにする為城の周りに土手を築き川の水を引き入れ孤立させた(八メートルの跡がある)。

丁度その時、明智光秀の謀反で信長の死を知り、それを隠して和議で戦いを中断させた。城主宗治を切腹させる代わりに、城中の全員を救うと言う策だが、なかなか応じなかったが、最後は自分が死ぬことで助かる者が多いのなら喜ばしいと言う辞世を残して切腹した。

清水宗治の辞世 四十五歳

浮世をば 今こそ渡れ 武士の
名を高松の 苔に残して

この船上の行いに感服した秀吉は「武士の鑑」と評し「天下人」になってから、以前は各藩毎違っていた切腹を正式な切腹の仕方にしたそうだ。

今回のお城巡りで私が一番感銘した所で、壁にあったパネ

ルに深くお辞儀をして来た。

片岡の川柳

城巡り 惜しき人の名 顕彰碑

城巡り 武士の時代が 無かつたら

鬼ノ城（じま） 岡山県

「桃太郎」のお伽噺の元となった所で、鬼が島に住み着いて、悪さをし桃太郎に滅ぼされる赤鬼などは、流れ着いた外国人がいたのではないかとの説もあるそうだ。すぐく荒れた山道で、大きな岩をガタガタに敷き並べたような階段では、手を着いて這い這い登りや引つ張りあげてもらったりだった。何故こんな山に多くの石が運べたか？

大昔、この山があつたのは海で島だったそうだ。瀬戸内海の一部で学術的にも証明されていると言う。

それで赤鬼が赤い顔の外人の説と結びつくのかも。でも桃太郎のお伽噺は残したい文化と思う。

備中松山城 岡山県 高梁市（たかはし）

備中に先に見て感動した高松城もあるし、似たような名前が多く覚えきれない心配があつたが、説明や体感で分かつてきた。松山城は天守閣のある城で現存する十二の中で一番高い物で、初めから私は居残ることを伝えておいた。鬼ノ城で

懲りてこれ以上疲れるのは困る。一人だけと思つたらもう一人いて、博物館や小堀遠州の作つた有名な庭のあるお寺など見ていて下さいと地図をくれた。

高梁市の人の多くはとても親切だった。地図を見てキヨロキヨロしていると、「どちらを探しておられますか？」と連れて行ってくれたり、近いのに車を出してくれたりだった。何もお札に差し上げるものが無くて残念。言葉とお辞儀をするだけだった。

城に登つた人達が「行かなくて良かったよ。疲れた、疲れた。もう二万五千歩だぞ！」登らなかつた私でも、一万四千三十だもの。

津山城 岡山県 津山市

石垣が高いことで有名。織田信長の腰巾着森蘭丸の弟、森忠政が築いたと聞いたし、ここなら行けそうと思つたから行つてみた。地元ボランティアの声が大きくて、私には聞き易く良かったが、集合時間に遅れそうな程丁寧なので、最後には誰もいなかった。

三日目 岡山城 岡山市

岡山城には、前出の旅友とミステリーツアーで来た時寄つている。時間配分のせいか外回りと、日本三大庭園の一つ、後楽園しか見られず、キビダンゴをお土産に買ったのを覚え

ている。その時の説明で、外壁を黒く塗ったのは空襲に備えてと聞いたように覚えていたが違った。今回は姫路城の白鷺城に対向する為だったとの説明だ。築城当時空襲なんて言葉も無かつたらう。空襲では完全にやられて石垣だけが残ったと言う。

今の城は残った石垣の上に天守閣を作ったので各階層の形が歪んでいるそうだが、下から見たのには美しい。天守閣以外は再建されず、コンクリートの床の上に各部屋の名前が書いてある。水所、野菜置き場などの近くは下々の部屋。廊下も多く書院、控えの間、どれも狭く感じる。御座所も八畳あるかな。

他に入れた城でも、各部屋は狭く、殿様の座る真ん中が五センチ位高く、座布団と、脇息があった。各部屋は襖で仕切つてあるので暗い。木の札に書かれた順路で廊下に出る時この札に躓いて脛に二箇所も傷をつけてしまった。こんな作りも中まで敵に攻め込まれた時、殿を護るためだったろう。

小雨だったのが強くなり、キビダンゴが欲しかったが行けなかった。

三日目 午後 赤穂城跡 兵庫県 赤穂市

岡山から赤穂に向かう途中から風雨が強くなり出した。心配されていた台風二十一号にまともにぶつかってしまった。赤穂城もこの後の姫路城も今日は締め切りだそうだ。バスの

中で雨着を着始めたが、大抵は軽カッパか上着だけ。私は上下的のカッパ。傘は全然駄目。赤穂城の橋が見えるまん前がお土産屋で、赤穂の有名な塩が効いた「塩饅頭」に殺到した人達は皆ビシヨ濡れ。このお店がお昼の食事所。「討ち入りそば」真つ黒な十割と言うのかも。私は初めてだった。ゴツゴツかと思つたら食べやすかった。すこし足りない感じだったが、追加はしなかった。他の仲間が二枚目を食べたのを見て、どうしようかな?と思っていたら、私の前にも二枚目のザル同じ物。「私追加注文していませんよ」と断つたら、「皆さん二枚なんです」説明は聞いていない。耳係もキョトン。どうせなら、白(城)蕎麦と対にすればよいのにと思つたのは私だけか。

私も味見をして少しだけ「塩饅頭」を買った。頼んでおいた聞き役の方(Rさん)が「写真どうします?」と言ってくれた。知り合った時から赤穂城に渡る橋の正門の私を写して欲しいと頼んでおいた。「もう少し待ってみましょう、これじゃどうにもなりませんもの」少し風が弱くなったかなと思つたら、何人かがデジカメで写し出した。人様に頼むので躊躇していたら「ホラ、横向きで顔だけこっち向いて」と声が掛かる。

二枚写してくれたので嬉しい。お礼を言う。

シニアハウスに移る時、写真は全部整理したし、以後はカメラは持つて歩かない。淋しい気もするが仕方無い。

姫路城

赤穂城から真つ直ぐ姫路市へ。閉館ではしようがない。城の近くの道も通らない。道が曲がった時かすかに見えたと言う人もいたが。

夕食はオプシオンで高級料亭の夕食だった人も駄目でお金を返してもらっている。

姫路のホテルに二時半に入った。明るいうちから昼寝。出来たばかりというホテルは立派。外からも入れるコンビニがあった。何時でも食べられるようにパンだけは、持ち歩いている私は「おでん」五種に汁を多めにもらって夕食。

今回も姫路城にご縁が無く、もう一つ赤穂城も中に入らなかったが残念。

四日目 最終日 竹田城跡 兵庫県 姫路市 (天空の城)

台風一過とは聞くが初体験かもしれない。台風があまり来ない函館に住んで永いから、鈍いのかも。

天空の城とは、高い所にある天守閣跡の石垣だけなのに、観光の方でも有名だ。秋から冬の間、地上との間に雲海が多く発生し雲の上に見える石垣の風景が有名になっている。

土の道が曲がりくねっているし暑い。Rさんに手を引っ張ってもらってやつと登る。下りの途中から、石垣まで行かず近道の標しを歩いた。この時もう一組の夫婦がいたので良かったが、一人なら心細かった。

資料館の壁に大きな写真が貼ってあり、足型の所にカメラマンがいてシャッターを切ると、雲海の中に見える様に写る。仲間を見ていたら「一緒に写りませんか？」と声を掛けて誘ってくださったのは、下り道で近くにいられた奥さん。ちよつと照れたがお願いをした。お名前も知らない。私の住所、氏名を書いて手渡す。帰宅三日後に写真が届き、早くて驚き。

ちよつと天空には見えないが嬉しい。

岩手県一の関のご夫婦で直ぐ札状を出した。

篠山城跡 兵庫県 篠山市

何処にあるかも知らなかった城の一つ。案内に丹波山の字を見た時、「丹波山には狸がおつてさ、それを猟師が鉄砲で撃つてさ」のわらべ歌を思い出したが、すごい勘違い。

狸のいる丹波は熊本。

ここも領地争いが激しかったそうだが、今迄で見た所で何処にも無かった「馬出し」の跡がハッキリ残っているのが三箇所。堀を渡って攻めてきた時、中から攻め出すのに有効と聞いたがよく分からなかった。平場は草原で所々石で区切っており石垣も高くない。

この石垣に見られる刻印が色々あって面白い。○○、四角の中に斜め線、△など、紋所か、関わった武士達の所属などが分かるそうだ。観光地としても整備してないらしく、の

どが渴いたが、自動販売機も無かった。人の飲み残しを貰って凌いだ。最後のお笑いだ。

伊丹空港ではスムーズに手続きが出来た。

前の日、小さいが荷物を宅急便で送ったので、預ける手続きや荷物検査も無し。

函館空港でも荷物を受け取る時間も減る。

だが、台風の影響で欠航や遅延が多く、羽田での乗り継ぎも失敗する処だった。Rさんが教えてくれたので助かった。

それなのに、函館空港が豪雨の為再開せず、時間がロス、結局最終バスにも乗れず、タクシーで我が家に着いたら、へとへとだった。

蛇足ながら、疲れて爆睡中の五時間後「胆振東部地震」が函館も震度五。

地震前に帰り着いただけでも良しとした。

『御伽草子・うらしま太郎』と『姫の恋』

木村 裕俊

絵本や童話にしばしば登場する「浦島太郎」について興味深く詳細に調べられ改めて勉強させていただいた。

単にお伽話ではすまされない。重い日本の物語の底を垣間見る思いがして大いに参考になった。しかも、大陸との交流の際の「神仙思想」に基づくもので不老不死の薬石を求めて派遣された「徐福」との遠縁にも言及し実に幅広い大陸に関わる重要な文化論としてすこぶる完成度が高い作品となった。

『演じる事の覚悟』

佐藤 健

作者は過去北斗市で行なわれた「アズキの花」という音楽劇に合唱団の一員として参加された。

今度は演技者としての登場という。

合唱では口パクとは失礼だが歌ったふりで誤魔化され、全体の影響は最小で済むが劇では一人ひとりの演技の力量が問われる。

演題は夕鶴をベースの物語である。

途中大役の若者が出られなくなりついに自分にお鉢が回ってきた。

音楽劇とあつて互いに息のあうことが大切でかなりの神経を使ったことが想像できる。

作品の中にもしばしば登場するN氏やM氏を考えて見るに、やはり演劇の中に世阿弥の「風姿花伝」の奔流が脈々と流れて受け継がれていることに気付かされた。同時に作者の努力と奮闘の日々を思った。

『鉄道の旅 その三つの愉しみ』

水関 清

最近鉄道ブームが再燃した。過去でも鉄道ファンがあり、単に移動手段と見るのではなく作者がここに列挙されたように「ブラニングの楽しみ」今は、パン

コン等の発達により窓口からでない多様な購入法が確立されている。

従って計画はより正確で具体的にできるようになったよっだ。

合わせて、時刻表、運賃、切符の関わりの中に実利的な節約を提案し、それも楽しみの一つとしている。

次に楽しみとしてその地の風土に触れることを挙げている。認識することはあくまでも鉄道とは敷かれた道のみ限定であり目的地までは何かを以て繋ぐ他にない。

また駅弁の楽しさや、ファンの少年との出会いなど豊富なエピソード等を紹介し読者を楽しい旅に誘う。

『お城めぐりツアー』

片岡 美智子

今回のテーマがお城巡りとあつて、その歴史的備えが大切になってくる。ポイントとして、・・・時代に建てられたか。あるいは何時復元又は改修したか。

次に誰が何のために建立したか。

さらに石垣のみなのは何故か。山城、平城の違い。居城とは。さらに「武者隠しの間」等々あるがこの旅には、かような「何でも見てやろう」の姿勢が感じられ好感が持てた。

今回は四編と少なかったが全体として内容面で充実した作品が多かった。特に『御伽草子・うらしま太郎』と乙姫の恋』の論述や「演じる事の覚悟」の実践的論旨に大きな説得力を感じた。

それぞれの流れゆくエピソードの中にそれぞれの確かな碑が築かれた。

今後のますますのご健闘をお祈りします。

選者

詩

入選

白いキャンバス

玉掛 公恵

白いキャンバス

その白さの中に

体を滑り込ませる

手足を

キャンバス一杯に

伸ばしてみる

洒落たポーズを

とつてみる

心の想うままに

空に向けて

跳びはねてみる

白いキャンバスは

自由に溢れている

もし

何もかもうまく行かなかつたら

キャンバスから抜け出し

キャンバスに

絵の具で描き改つてみればいい

時には絵の具を厚く 時には薄く

時には優しく 時には荒く

パレットナイフで削つたり

重ね塗りしてもいい

疲れたら

又、白いキャンパスの中に

体を滑り込ませたらいい

人生なんて こんなもの

描^かいたり削^かったり

いくらでもやり直しができる

それを描くのは あなた

僕は時々

白いキャンパスの中で

普段

自由にならない体 手足を

目一杯

振げるんだ！

詩

佳作

野原の中に

毛間内悦子

草にうずもれて咲くキミの

空はどれくらいに広がっているだろう

限りない青空は

キミの目に届くまで

いく度も色を重ねたはずだ

でも 風通しの悪さや

日の光の少なさも

キミの世界を変えることはない

すぐそばで

蜂の羽音が風に乘る

かすかに白いキミは

ひたすら咲き続ける

蜂がまぎれ込んだ草むらの中で

ほんのかすかな触れ合う音

昨日のキミと

いま そつと受粉したキミと

同じようについて

光のように違っている

命の輪に伝わる
わずかな振動は
いつもと変わらず
時を刻んでいた

詩

佳作

幸せってなに

高橋和子

幸せって 一つ一つの苦勞の中から

見つけた小さな 小さなもの

その幸せを心の奥にしまっている

宝箱の中に 一つ又一つと

大切にしまっておくの

そして

いつの日か ふたが開くの自然にね

ゆっくり ゆっくり日々を重ね

こぼれ落ちてゆくのを

なぜ

なぜって新たな幸せが宝箱に

ふわっと入ってくるの

目には見えなけれど感じるの

とてもあたたかいものなの

そして誰かの心に

そつと寄り添うの

今も幸せは 宝箱から

出たり 入ったりしているのよ。

選評

鷲谷峰雄

今回の詩は36作品でした。前作品よりは少ないのですが、実力のある詩が多かった。特に言葉に敏感な作品が目立った。現代詩は口語でかかれた口語自由詩が中心です。明治時代は文語で詩がかかれています。だから美文調の作品が多かった。

ところで「市民文芸」は漢詩の応募は受け付けていません。あくまでも日本語の現代詩です。日本語に訳してから応募してください。

入選 「白いキャンバス」

玉掛公憲

言葉が丁寧につかわれています。「白いキャンバス」は、からだと一体になっていて、その白さのなかに、からだを滑り込ませている。白さのなかにです。この白さに、まぶしいほどの詩がありました。

手足を空に向って「キャンバス」一杯に伸ばしてみる。「キャンバス」は自分のものであり、あなたのものです。

何もかにも、うまく行かなくなったら、「キャンバス」から抜けだして、絵の具を厚く、時には薄く、時には優しく、時には荒くパレットナイフで削ったりして重ね塗りしたらよい。それも一度は抜けます。

「キャンバス」は使うものであり、使われるものなのです。「キャンバス」は、その自在さを知ったのです。

「白いキャンバス」は自由で溢れているのです。いくらでもやり直しがきくのです。それは人生に似ています。いつかは思いのままになるのですから。

情感的な作品です。「キャンバス」をよく展開していて、どんな角度からでも描写しています。

佳作 「野原の中に」

毛間内悦子

草の中で白く咲くキミは待っている

のだ。咲きつづけるとは、待つことなのだ。だと。

蜂がまきれ込んだ草の中で、かすかに触れ合う音がして受粉したキミは昨日のキミとはまるで違う。

野の中で今日も咲きつづける白いキミがいて、風通しの悪さや、日光の少なさをこえて今日も昨日と違うキミがいる。

くりかえしの生命力が野原の中にあるのではないか。野原とは生命を生む場所だ。キミの忍耐はいつも結実する。

待ってもこなかったキミの上で萎びた姿になっても、咲いて待つのもキミなのだ。

生命力の謎にせまった作品でした。

佳作 「幸せってなに」

高橋和子

幸せは苦勞のなかにある。それも小さな小さなものだ。その幸せを心の奥にしまっている。幸せは一つ一つ大切に仕舞っておいたのだけれど、いつかふたが開

いて自然に落ちていった。
なぜ、

それは新しい幸せがくるから。目には
見えないけれど感じるの。

幸せは変わることができる。そして誰
かの心にそっと寄り添うのです。

幸せが別の幸せに変わることができ
るのは、新鮮な考え方です。その考え方
によって幸せは、またあらたな幸せに変
わっていくのです。

詩的な表現です。

入
選

いたづきて子は産土をまほろばと称へて遺す三十路愛しも

石岡 繁雄

電動のミシンにあれば鼻歌に妻は木綿の布を滑らす

菊地 利春

AIに頭脳はあれど心なし心無きものやがて脅威に

山田 正明

佳
作

今はまだマンボとジルバだけだけどラストダンスはいつかあなたと

柿崎 芳明

窓越しの赤き朝日に手を合わせ手術に向かう室の仲間よ

柴田 泰子

廢駅のホームに広がる反魂草錆びゆくレール覆うまで咲け

水関 清

鳥賊洗ふホースの水も凍り付く作業場にて我ら働く

竹田 光彦

駆けつけし救急外來の長椅子に独り坐り居る母の目赤し

中崎 裕美

選評

山県 庸美

入選

いたづきて子は産土をまほろぼと称
へて遺す三十路愛しも

生まれた土地、すぐれたよい国と称えて、遺された三十代の息子さんが、愛しくもあり、哀しくもある親御さんの思いが伝わってくる歌。戦時詠か。

電動のミシンにあれば鼻歌に妻は木
綿の布を滑らす

以前、足踏みのミシンを使われていたのではあるまいか。やわらかな木綿の布も、電動なれば鼻歌まじりですやすいと、ご夫婦の姿が目には浮かぶ歌。

AIに頭脳はあれど心なし心無きも
のやがて脅威に

未来への脅威が、また想定外になるのであるとか。感情をもたないAIへの警鐘の歌。同じ作者の歌だが「嬉しい虫籠

抱きし少年はゴムまりのごと弾みてゆけり」の捉え方が良い。

佳作

今はまたマンボとシルバだけけど
ラストダンスはいつかあなたと

現在形ならばと思うが、過去形ではあるまいか。いづれにしても一気に詠まれていて気持ち伝わってくる。

窓越しの赤き朝日に手を合わせ手術
に向かう室の仲間よ

結句の「室の仲間よ」が落ち着かないが、許される範囲ではないか。

魔駅のホームに満ちる反魂草錆び
ゆくレール覆うまで咲け

二句目、ホームに満ちるをリズム的には「広がる」としたい。反魂草はキク科の多年草。山地に自生。高さは一メートル半にもなるので、どうせなら、再び使われることのない、「錆びゆくレール覆うまで咲け」と作者は叫びたかったのだ

あろう。

鳥賊洗ふホースの水も凍り付く
作業場にて我ら働く

水産加工業の厳しい現場の様子が痛いほど良く解る歌。「数トンの鳥賊の足切る仲間らの顔に跳ねたる墨が付き居り」も良いが、居りの使い方は難しい。ややもすれば軽くなるので。

駆けつけし救急外来の長椅子に独り
居る母の目赤し

四句目、独り居るでは字足らずなので「独り坐り居る」としたい。比較的若い作者ではないかと思われるので、短歌は五七七七七の三十一音が定型なので早く慣れ親しんでほしい。

今回は原作のままを主としたために、採らなかつた作品があり、心苦しい。選外だからと気落ちしないで、次回も応募をお待ちしております。

選者詠

山 県 庸 美

二億年経て今も地上に生えてゐる皺ふかき公孫樹の葉を拾ひ持つ

シヤクシャインの戦ひ以来三百余年「単一民族国家」と言ひたる首相

朽ち果てし綴ぢ金替へて背の補強終へて読みつぐ「阿羅々木」壺巻参号

久し振りの高速道路にペダル踏み込む八十、百キロと加速に馴れて

上田三四二の『死に臨む態度』ふと思ひそつと捜せり深夜の書架に

俳句

熊澤 三太郎 選

入選

鷺草や玉三郎の指の反り

茗荷みようがの子昨日九つ今朝三つ

たつぷりと夕日も埋めて田植かな

池田陽子

菊地政義

清水法雄

佳作

タンポポを摘むたびゆるるランドセル

秋晴の猫の欠伸の気持よき

水指の浅葱色なり夏稽古

捨てきれぬものまた仕舞ふ年の暮

晩学の色なき風や辞書めくる

佐々木 了一

関口 孝三

伊藤 静子

富樫 進

齋藤 ふじお

選評

熊澤 三太郎

入選

鷺草や玉三郎の指の反り

素晴らしい句ですね。「鷺草」は夏の季語です。「純白の花の形が白鷺の舞う姿に似る」と歳時記にもあります。そんな事で鷺草の句は、舞姿を詠んだものが多いのですが、ここに「玉三郎」が登場しました。玉三郎は歌舞伎の女形を演ずるにしても、その舞踊にしても絶妙の美しさと魅力を持っていますね。鷺草は白鷺が羽を開いたように咲いている。それを「玉三郎の指の反り」と表現しました。

茗荷の子昨日九つ今朝二つ

リズムもあって面白い句ですね。「茗荷の子」は夏の季語。茗荷は根元に小さな花茎を出してその頂に花をつける前に取って食べます。わたしも時季になると庭の茗荷の子を取って刺身のつまにしたりして食べています。「昨日九つ今

朝三つ」がいいですね。

たつぷりと夕日も埋めて田植かな

「田植」は夏の季語。「最近では機械化されて以前のような手作業の田植は少なくなつた」と歳時記にあります。しかしながら、この句には代を搔き、水を張った田に苗を植えつけるイメージが漂っています。「たつぷりと夕日も埋めて」の表現がそれですね。それに日が傾くまで「田植」に勤しむ人の姿も詠まれています。

佳作

タンポポを摘むたびゆれるランドセル

「タンポポ」は、もう云うまでもなく春の野にも道端にもある親しみ深く強い野草です。漢字で蒲公英と書きますね。鼓草とも云うと歳時記にあります。タンポポと云う心地よい名はその鼓を打つ音からきたものではないでしょうか。鼓を「タンタンポンポン」と打つ擬音ですよ。

その「タンポポ」と「ランドセル」の

取合せがとてもいいと思いました。この句から、わたしは入学の小学校一年生が帰り道、母親の手からつと離れて、道端のタンポポを摘む光景を想像しました。

秋晴の猫の欠伸の気持よさ

「秋晴」は人間ばかりか「猫」だって気持がいいのです。目覚めた猫が外に出て秋晴に大きな「欠伸」をしてみせたのです。ただ語順をいま少し変えて「秋晴や猫も気持のいい欠伸」とでもすれば、どうでしょうか。

水指の浅葱色なり夏稽古

この句の「水指」は茶の湯の釜に水をさす器ですね。「浅葱色」は薄い藍色です。わたしは茶の湯のことについてよく解りませんが、そのような茶会の趣の句として頂きました。ただ「夏稽古」は歳時記にありません。「夏点前」ですね。ぜひそうしましょう。

捨てきれぬものまた仕舞ふ年の暮

まったく、その通りですね。「捨てきれぬもの」と「年の暮」の取り合せがよいのです。昨年「終活」と云う語が使われはじめましたね。生きているうちに自分の物の始末をする。残された家族に言っておくべきことを書いておく、などを意味しています。この句のように「また仕舞ふ」は句として面白いのですが、また仕舞ってはいけませんね。勇気を出して捨てましょう……。

晩学の色なき風や辞書めぐる

この句「色なき風」が季語ですね。すでにご存知でありましょうが、難しい季語で、あまり使われない季題でもあり、この項を読んで下さる人もおありでしょうから、少しばかり句評から逸れますが述べます。歳時記には「吹き来れば身にもしみける秋風を色なきものと思ひけるかな」（紀友則）の歌を引用しています。この歌が「色なき風」の季語の生みの親ですね。

「はなやかな情感のない風の意に用いた。――以下略」と歳時記は説明しています。いま少しよけいなことを云えば、百人一首に「ひさかたの光のどけき春の日にしづ心なく花のちるらん」の歌も紀友則作です。

そこで句評に戻りますが「晩学」と「色なき風」の組み合わせがとてもいいと思いました

選者吟

熊澤三太郎

初鏡つつがなけれど老いにけり

櫛の芽へ背伸びすれども届かざる

牛洗ひつつ話しかけ修道士

庭履きの片つぼどこへ小鳥くる

第九曲流るるポインセチアの夜

入
選

余生なお笑顔の花を咲かせよう
年金が義理の蛇口をきつく締め
震度七ブラックアウト想定外

岩本真穂
白井靖孝
山根裕二

佳
作

努力した釘も出すぎと打つ社会
多数決民主主義にも落とし穴
政治家も嘘とまことの二枚舌
老いた母生きる姿に励まされ
命だけは神が知ってる予定表

本間総子
伊藤静子
辰宮清春
山根敬子
大山利子

選評

坂本 千代光

入選

余生なお笑顔の花を咲かせよう

岩本 真穂

この句を見た時何か春風に吹かれたようなあたたか味を感じた。

余生と言えば、何かじめじめした暗さを感じられる語句であるが、しかしこの句にはそうした空気が微塵も感じられない。むしろ余生と言われる年齢によし私もひと花咲かせようかという元気を与える句である。

笑顔の花とはまことに言い得て妙。感心しました。

年金が義理の蛇口をきつく締め

白井 靖孝

先ず義理の蛇口とは皮肉の比喩が素晴らしい。年金暮らしは余程の方でない限りつつましく暮らす人たちである。だ

から財布の紐を締めておかなければならない。

けれど浮世の義理に勝てずお金を出さなければいけない。だから財布から出す金は暮らしの狭間であり、きつく締めて出す金になります。そんな胸の内をこの句は的確に描き出している。川柳の三大要素の一つ「うがち」とはこういう作品を示すものである。

震度七ブラックアウト想定外

山根 裕一

震度七は想定外の被害を与えた。ブラックアウト、つまり一時的な機能障害を起した人も少なくない。私たちは地震のおそろしさを知っている。しかし頭だけで知る事と現実には余りに違い恐怖と残酷は心の奥にくい込んで離れない。

川柳は人間を描くものであるが、社会事象も又描くものであります。何故なら人間は独りで生きられない社会的人間だからです。ですから川柳は人間や社会を諷刺しうがつつ文芸なのです。

佳作

努力した釘も出すぎと打つ社会

本間 繪子

ここに釘と書かれた物は人の事である。人間社会は競争と欲望の世界とも言えましよう。仲間の誰かが優位に立つ事は逆に自分が劣勢になる事である。だから劣勢に立った多くは努力もするが策を持って相手を叩くしかない。競争に勝った人のみに椅子は用意され美酒が飲めるとしたら。仕方ないというには余りに非情と言わねばならない。本来努力して手にしたものならば祝福すべきなのである。而し現実はずう。だから諷刺する句が生まれるのである。

多数決民主主義にも落とし穴

伊藤 静子

多数決は民主主義の基本である。しかし多数が正しいとは限らない。民主主義は或る意味で愚民政治とも言われる所

以である。だからこそ少数の意見は尊重されねばならない。けれど現実はそのでない事が多い。今の日本にもそういう傾向があるのではないか、その驕りを指摘する事も大事なのである。

政治家も嘘とまじりの二枚舌

辰宮 清春

この句は政治家が二枚舌の代表であるように見えるが、政治家「も」の「も」は人間自体も嘘つきであるといっているのである。それはさておき、政治家は一般大衆と違う。何故なら国を治める責務が彼等にある。だから人間としても模範たるべきなのである。それが今の政治家に見えない。

正に大衆よ怒れであると同時に、監視せねばならないという作者の気持が伝わって来る句。

老いた母生きる姿に励まされ

山根 敬子

子は親の背を見て育つという。その親

も老いては昔の姿を保つ事は出来ない。やがて子は親の面倒を見、介護する事となるのが普通の姿であろう。けれど作者のお母さんはまだ前向きに生きているのでしよう。だからその母に少しくたびた作者は元気を貰う。そんなお母さんの背なかに有り難うと言うべきでしょう。

命だけは神が知ってる予定表

大山 利子

神のみぞ知るといふ言葉がある。これは人間の知恵など知れたものだという裏返しがある。人類の未来。人間の未来は誰も確と述べる人は居ない。今や世界は第三革命の時代でもあろう。AIの発達は私たちの未来を変える。ロボットは有段の棋士に勝負で勝つ。介護に案内所に、又工場の精密機械に登場。ドローンは空から地球を眺め撮影し、兵器にもなり得る。今や人類も人間も未来を予見する事は出来ない。

果たして神はすべての未来を知っているか。せめて神の子である人間の命の

事も知っているか、この迷える羊の寿命を知っているか、若しその予定表があるとすれば見たい。そんな心境の作者なのだろう。

選者吟

坂本千代光

青写真いつも真ん中妻がいる

許す度優しい顔になってゆき

父の背に喜怒哀楽の地図がある

ぬるま湯で育ち背骨が脆くなる

過労死の予備軍がいる風の町

追悼 池 さとし 先生

平成二十四年三月発行の函館市民文芸第五十一集から、川柳部門の審査員を務めていただいた池さとし（本名 菊池敏之）先生が、昨年十一月十二日ご逝去されました。毎年市民文芸の審査を楽しみにされていて、昨年も審査を始めた矢先、体調を崩し入院されて審査を続けることが難しい状態になりました。そのため、先生が所属されている函館川柳社から坂本千代光先生を推挙いただき、池先生の代わりに審査いただきました。

池先生は昭和十一年函館市出身で、教職につかれると共に川柳を続けてこられました。平成二十三年米澤苦郎氏から函館川柳社の主幹を引き継ぐとともに、市民文芸川柳部門審査員にも就任いただきました。

これまでの市民文芸に対する貢献に感謝し、謹んで哀悼の意を表したいと存じます。

先生が生涯に作られた数多い川柳の中から、ご本人が最後まで自宅に飾っていた句をご紹介します。

いのち残照こころに点るものあれば

蛍の光命と書いて否定せず

シャボン玉現実逃避かもしれぬ

函館川柳社の白井靖孝さんから池先生に追悼の句が寄せられました。

さとし調臥牛の空へ冴え渡り

審査員紹介（*本紙各部門受賞作品の掲載順）

随筆

函館文学学校講師

対馬 俊明

小説・文芸評論

北海道教育大学名誉教授

安東 璋二

ノンフィクション

函館文学学校講師

竹中 征機

文芸誌『海光』代表

詩

日本現代詩人会会員

鷺谷 峰雄

北海道詩人協会理事

短歌

北海道アララギ地方編集委員

山 県 庸 美

道南歌人協会顧問

俳句

函館俳句協会会長

熊 澤 三太郎

『ホトトギス』同人

川柳

函館川柳同好会顧問

坂 本 千代光

あとがき

『市民文芸』第五十八集をお届けします。

今年の各部門の応募作品数は、

随筆二十五編、小説十三編、文芸評論一編、ノンフィクション

四編、詩三十六編、短歌八十九首、俳句九十三句、川柳九十二

句、計三百五十二点となりました。

今年度もほぼ昨年と同様たくさんのお応募がありました。常連

の方のお募に混じり、初めて投稿される方も増えてまいりまし

た。特筆すべきは小説のお募が増えたことです。他の部門につ

きまして、更に市民の皆様方に広く浸透するべく、これから

も取り組んでいきたいと思えます。

昨年の十一月に川柳の審査員を務めていただいた池さと

し先生がご逝去されました。いっお会いしても穏やかで、温か

いままさしで私たちを見守ってくれました。今までお世話にな

りありがとうございました。担当者一同、ご冥福をお祈りしま

す。最後になりますが、各審査員の先生方にはご多用中にもか

かわらず、厳密なる選考とご講評、貴重なご意見を賜りました

ことを心より厚くお礼申し上げます。

函館市民文芸 ― 第五十八集 ―

発行日 平成31年3月16日

編集・発行 函館市中央図書館指定管理者TRC函館グループ

（函館市五稜郭町26―1）TEL（〇二三八）三五―五五〇〇

題 字 木下 順一

表紙 函館市中央図書館中庭（ハウチワカエデ）
印刷所 有限会社 日孔社

【 応 募 要 項 】

募集作品

1. 随筆	400 字詰原稿用紙	5 枚以内
2. 小説	同 上	4 5 枚以内
3. 文芸評論	同 上	4 5 枚以内
4. ノンフィクション	同 上	3 5 枚以内
5. 詩	同 上	5 編以内
6. 短歌	同 上	5 首以内
7. 俳句	同 上	5 句以内
8. 川柳	同 上	5 句以内

【 応 募 規 定 】

1. 応募資格は函館市民であること（函館市内の学校に通学している児童、学生、生徒、また函館市内に通勤している者を含む）
2. 原稿は未発表のものであること。
3. 原稿には ①応募部門
②住所
③氏名（ふりがなを必ず付記のこと）
④年齢・性別
⑤職業（児童、学生、生徒は学校名・学年も必ず記載のこと）
⑥電話番号 を明記してください。
4. 400 字詰め原稿用紙に手書き、またはワープロ・パソコン原稿によるもの。原稿用紙に手書きする場合、ボールペンもしくはインクで誤字脱字のないように、読みやすい字（楷書）で記載してください。
ワープロ・パソコン原稿の書式は、原稿用紙（400 字・20 字×20 行）設定で、規定枚数内であることをご確認のうえ、ご応募ください。
短歌・俳句・川柳は、すべての漢字にふりがな（読み方）を記入してください。
ふりがなについては、作品集掲載の際に表示を希望する箇所に（ ）をしてください。
5. 応募原稿は返却いたしません。
また、入賞（入選・佳作）作品の著作権は、すべて函館市に帰属いたしますので、ご了承願います。
6. 作品の中では個人情報保護に配慮し、個人・団体を誹謗・中傷するような内容の記載はご遠慮ください。